

鹿角市文化財調査資料56

特別史跡  
大湯環状列石

発掘調査報告書(12)

1996-3

秋田県鹿角市教育委員会



特別史跡大瀧環状列石

## 序

自然に恵まれた鹿角市は、遺跡の宝庫でもあります。

数多くの遺跡のなかでも大湯環状列石は、縄文時代の代表的な遺跡として、昭和31年には国特別史跡に指定されております。

この貴重な文化遺産を保存し、学術的・歴史的価値を正しく後世に伝えていくため、昭和59年より発掘調査を継続してまいりました。

これと共に、平成2年の周辺遺跡の特別史跡への追加指定と指定地の公有化事業に始まった史跡環境整備事業も、平成7年の「特別史跡大湯環状列石環境整備基本計画」の策定に至り、次への前提条件が整ったといえます。

平成4年度からは「同基本構想」を踏まえ、史跡整備の急がれる万座環状列石隣接地に調査区を移し、本年度は同列石南側隣接地に調査区を設定いたしました。

調査の結果、建物跡、土城、フラスコ状土壇等の遺構の検出と共に多量の遺物が出土し、同列石南側の遺構、遺物の分布状況を明らかにすることができました。

本書は、調査成果をまとめたものであります。学術研究・埋蔵文化財保護の資料として活用いただければ幸いと存じます。

終わりに、この調査に際し、御協力・御指導を賜りました文化庁並びに秋田県教育委員会、関係各位に心から感謝申し上げますと共に今後の環境整備事業につきましても、一層の御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年3月

鹿角市教育委員会

教育長 淺利 忠

## 例 言

1. 本報告書は、平成7年度に国・県の補助を得て実施した特別史跡大湯環状列石第12次発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、史跡の環境整備のための基礎資料収集を目的に実施されたものである。
3. 調査の概要については、機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。
4. 報告書の執筆は、調査員・調査補助員が分担し、文責は各々の文末に記した。
5. 資料の鑑定等は、下記のとおり依頼した。

石器類石質鑑定 …………… 秋田県立十和田高等学校 教諭 鎌田 健一  
炭化物の同定 …………… 小坂町立十和田小中学校 教頭 成田 典彦

6. 土層、土器等の色調の記載には「新版 標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
7. 本報告書に記載した地形図は、建設省国土地理院発行の「毛馬内 1/2万5千」である。
8. 遺物の水洗から実測・採拓・トレース等の一連の整理作業は、調査員の指導のもとに、調査補助員、整理作業員が行った。
9. 本報告書に記載した図版の縮尺については各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。
10. 本報告書の文中において用語の主たるものに統一するように努めた。なお、数度にわたり使用するものについては簡略化しているものもある。
11. 本文・図版等で下記のような記号、スクリーン・トーンを使用した。

S B……………建物跡      S K……………土 竪      S K(F)……プラスチック状土塊  
S K(T)……Tピット      S X(S)……配石遺構      S X(f)……焼土遺構  
Pit……………柱穴状ピット

……………遺構確認面下の土層      ……………柱痕・焼土

12. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。(敬称略・順不同)

田中哲雄、岡村道雄、本中 真(文化庁記念物課)、斉藤 忠(大正大学)

江坂輝彌(慶応大学)、佐原 真、阿部義平(国立歴史民俗博物館)

小林達夫(國學院大学)、富樫泰時(秋田県環蔵文化財センター)

遠藤正夫(青森市教育委員会)、高木 晃(岩手県文化振興事業団環蔵文化財センター)

# 本文目次

序

例言

本文目次

図版・写真図版・表目次

## 第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地 ..... 1
2. 遺跡の層序 ..... 2

## 第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査要項 ..... 4
2. 調査の方法 ..... 5
3. 調査の経過 ..... 5

## 第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 建物跡と柱穴状ビット ..... 9
2. 配石遺構 ..... 18
  - (1) 環状配石遺構 ..... 18
  - (2) 立石遺構 ..... 19
3. 焼土遺構 ..... 22
4. 土 壁 ..... 23
  - (1) Tビット ..... 23
  - (2) フラスコ状土壁 ..... 25
  - (3) 土 壁 ..... 38
5. 遺構外出土遺物 ..... 61
  - (1) 土 器 ..... 61
  - (2) 石 器 ..... 80
  - (3) 土製品 ..... 99
  - (4) 石製品 ..... 106

## 第Ⅳ章 分析と考察 ..... 113

## 第Ⅴ章 調査のまとめ ..... 119

# 図版・写真図版・表目次

## 図 版 目 次

第1区	遺跡の位置	1	第32区	土壌実測図(4)	51
第2区	遺跡の層序	3	第33区	土壌実測図(5)	53
第3区	調査区と地形	6	第34区	土壌出土遺物(1)	56
第4区	D <sub>1</sub> 区遺構配置図	7	第35区	土壌出土遺物(2)	57
第5区	建物跡実測図(1)	10	第36区	土壌出土遺物(3)	58
第6区	建物跡実測図(2)	11	第37区	土壌出土遺物(4)	59
第7区	建物跡実測図(3)	13	第38区	土壌出土遺物(5)	60
第8区	柱穴状ピット断面図(1)	15	第39区	土器破片出土分布密度	62
第9区	柱穴状ピット断面図(2)	16	第40区	完形・復原土器出土状況	62
第10区	柱穴状ピット出土遺物(1)	19	第41区	遺構外出土土器実測図(1)	64
第11区	柱穴状ピット出土遺物(2)	20	第42区	遺構外出土土器実測図(2)	65
第12区	第01号環状配石遺構実測図	21	第43区	遺構外出土土器実測図(3)	66
第13区	立石遺構実測区	22	第44区	遺構外出土土器実測図(4)	67
第14区	焼土遺構実測区	22	第45区	遺構外出土土器実測図(5)	68
第15区	Tピット実測区	23	第46区	遺構外出土土器実測図(6)	69
第16区	Tピット出土遺物(1)	24	第47区	遺構外出土土器実測図(7)	69
第17区	Tピット出土遺物(2)	25	第48区	遺構外出土土器拓影図(1)	70
第18区	フラスコ状土壌実測区(1)	26	第49区	遺構外出土土器拓影図(2)	71
第19区	フラスコ状土壌実測区(2)	29	第50区	遺構外出土土器拓影図(3)	72
第20区	フラスコ状土壌実測区(3)	31	第51区	遺構外出土土器拓影図(4)	73
第21区	フラスコ状土壌実測区(4)	33	第52区	遺構外出土土器拓影図(5)	74
第22区	フラスコ状土壌実測区(5)	36	第53区	遺構外出土土器拓影図(6)	75
第23区	フラスコ状土壌出土遺物(1)	37	第54区	遺構外出土土器拓影図(7)	76
第24区	フラスコ状土壌出土遺物(2)	38	第55区	遺構外出土土器拓影図(8)	77
第25区	フラスコ状土壌出土遺物(3)	39	第56区	遺構外出土土器拓影図(9)	79
第26区	フラスコ状土壌出土遺物(4)	40	第57区	石器出土状況	80
第27区	フラスコ状土壌出土遺物(5)	41	第58区	遺構外出土土器実測図(1)	83
第28区	フラスコ状土壌出土遺物(6)	42	第59区	遺構外出土土器実測図(2)	84
第29区	土壌実測図(1)	44	第60区	遺構外出土土器実測図(3)	85
第30区	土壌実測図(2)	46	第61区	遺構外出土土器実測図(4)	86
第31区	土壌実測図(3)	48	第62区	遺構外出土土器実測図(5)	87

第63図	遺構外出土石器実測図(6)	88	第78図	遺構外出土土製品拓影図(1)	103
第64図	遺構外出土石器実測図(7)	89	第79図	遺構外出土土製品拓影図(2)	104
第65図	遺構外出土石器実測図(8)	90	第80図	遺構外出土土製品拓影図(3)	105
第66図	遺構外出土石器実測図(9)	91	第81図	石製品出土状況	106
第67図	遺構外出土石器実測図(10)	92	第82図	遺構外出土石製品実測図(1)	107
第68図	遺構外出土石器実測図(11)	93	第83図	遺構外出土石製品実測図(2)	108
第69図	遺構外出土石器実測図(12)	94	第84図	遺構外出土石製品実測図(3)	109
第70図	遺構外出土石器実測図(13)	95	第85図	遺構外出土石製品実測図(4)	110
第71図	遺構外出土石器実測図(14)	96	第86図	遺構外出土石製品実測図(5)	111
第72図	遺構外出土石器実測図(15)	97	第87図	建物跡軸長方向	114
第73図	遺構外出土石器実測図(16)	98	第88図	楕円形土壌長軸方向	114
第74図	土製品出土状況	99	第89図	建物跡の軸長規模	114
第75図	遺構外出土土製品実測図(1)	100	第90図	万座環状列石と建物跡相関図	115
第76図	遺構外出土土製品実測図(2)	101	第91図	萬座環状列石と土壌位置図	117
第77図	遺構外出土土製品実測図(3)	102			

### 写真図版目次

巻頭	大海環状列石航空写真		P L 8	出土石器(1)	131
P L 1	調査区全景	124	P L 9	出土石器(2)	132
P L 2	調査区全景(終了)	125	P L 10	出土石器(3)・出土石器(1)	133
P L 3	調査区全景・柱穴状ビット	126	P L 11	出土石器(2)	134
P L 4	配石遺構・Tビット	127	P L 12	出土石器(3)	135
P L 5	フラスコ状土壌	128	P L 13	出土石器(4)・出土土製品(1)	136
P L 6	フラスコ状土壌・土壌	129	P L 14	出土土製品(2)	137
P L 7	土壌・基本層序	130	P L 15	出土土製品	138

### 表目次

第1表	建物跡一覧	14	第4表	万座環状組石墓群構成(1)	116
第2表	柱穴状ビット一覧表(1)	17	第5表	万座環状組石墓群構成(2)	116
第3表	柱穴状ビット一覧表(2)	18			

# 第I章 遺跡の環境

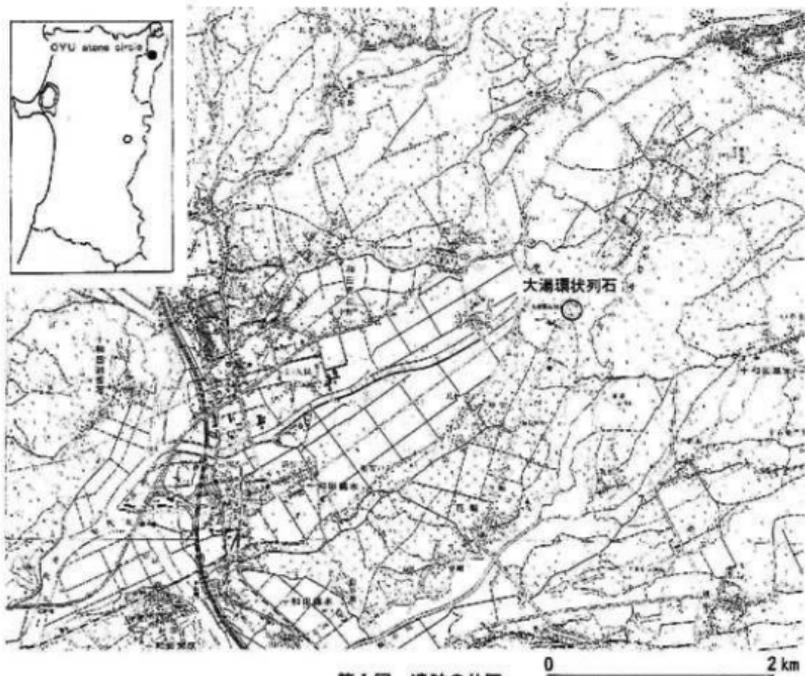
## 1. 遺跡の位置と環境

鹿角市は秋田県の北東端に位置し、北に十和田湖、南には八幡平と豊かな自然に囲まれている。市内には米代川を本流とし、それへ流れ込む支流が数多くみられる。それらの河川の侵食作用や十和田湖噴火時の火砕流などによって形成された段丘、舌状台地が市内のいたるところに目につく。この段丘・台地上には多くの遺跡が分布し、現在416ヶ所を数えている。特別史跡大湯環状列石もその一つで、大湯川と豊真木沢川の侵食によって形成された、南西方向に緩やかに延びた舌状台地の一番狭くなっている部分に位置している。遺跡の標高は180mを測る。

特別史跡大湯環状列石は、秋田県鹿角市十和田大湯字万座、字野中堂、字一本木後口に所在し、JR花輪線十和田南駅の北東3.5km、東北縦貫自動車道十和田ICの北東3.7kmの地点にあたる。

本年度は万座環状列石の南側隣接地に調査区を設定した。

(花海 義人)



第1図 遺跡の位置

## 2. 遺跡の層序

基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、Ⅰa層は旧耕作土である。また、Ⅰo層は昭和17、26～27年の万座環状石段掘時の排土である。

第Ⅱ層は大湯浮石層で、調査区ほぼ全域において見られるが、耕作により攪乱を受けている部分もある。色調、粒子の粗細、浮石の含有量から3層に細分される。Ⅱa層はにぶい黄褐色のシルト質の火山灰層、Ⅱb層は径0.2～5cmの明黄褐色浮石で構成される。Ⅱc層は黒色土中に浮石粒が多量混入している層である。

第Ⅲ層は大湯浮石層下から地山直上の黒褐色土層までの層で、色調、堅さ、粗密度、混入物の含有量等から4層(Ⅲa～Ⅲd)に細分される。Ⅲa層は黒色土で混入物はほとんどみられず、堅くしまっている。Ⅲb層も黒色土で混入物をほとんど含まないが、粗密度と堅さからⅢa層とは分けられる。Ⅲc層は黒褐色土でチョコレート色に近い色調である。Ⅲd層は黒褐色土で下位火山灰を少量含んでいる。本調査区においては、本層が遺構確認面である。

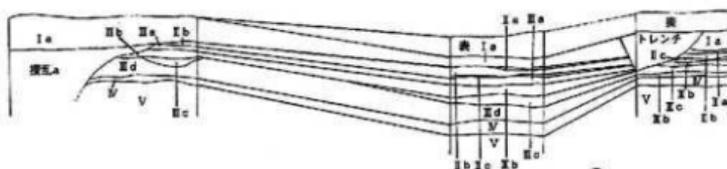
なお、B-80グリッド付近の攪乱は、昭和初期に行われた耕地整理時によるものである。

第Ⅳ層は地山(下位火山灰)直上の層で、黒褐色土である。やや粘性があり、しまりのある層である。

第Ⅴ層は中ヶ野火山灰と呼ばれる黄褐色の火山灰層である。本報告書において下位火山灰、地山と表現しているのがこの層である。なお、柱穴状ピットや土壇等はこの層まで掘り込んでいるものもあり、特に掘り込みの深いフラスコ状土壇、Tピット等は、本層下の灰白色火山灰層(シラス)をも掘り込んでいる。なお、調査区北西部から西部にかけては、本層まで耕作による攪乱をうけている部分もみられる。また、ZM-84グリッド、遺構配置図中の大穴周辺は昭和27年に調査が行われた地域で、Ⅴ層上面まで掘り下げられていた。(花海 義人)

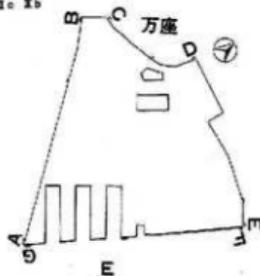
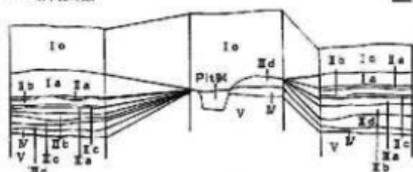
A H: 180.8m

B

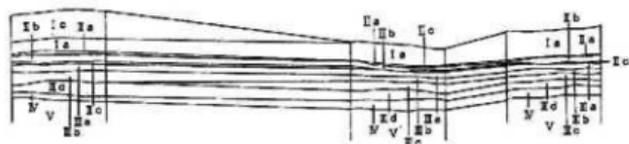


C H: 181.6m

D

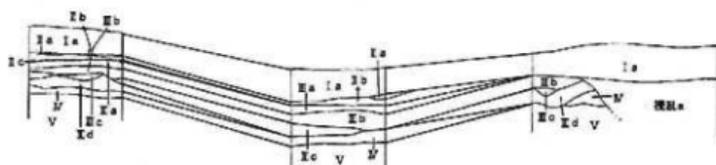


D H: 180.8m



F H: 180.8m

G



※ 土層柱状図は S: 1/60  
柱状図間は S: 1/1200

- IaW 黒褐色土 (10YR2/3) 昭和17. 26~27年築製土
- IaW 黒色土 (10YR3/2) 耕作土
- IaW 濃い黄褐色土 (10YR5/4) シルト質火山灰、堅くしまる
- IbW 明黄褐色浮石 (10YR5/4) 径0.2~5cmの浮石状
- IcW 黒色土 (10YR2/1) 浮石粒多量混入
- IcW 黒色土 (10YR2/1) シルト質、堅くしまる
- IcW 黒色土 (10YR2/1) 地に粒少量混入、ややしまる
- IcW 黒褐色土 (10YR2/3) チョコレート色に近い色調、地山粒少量混入
- IcW 黒褐色土 (10YR2/3) 地山粒混入、やや軟弱
- V 黒褐色土 (10YR3/2) 地山
- V 黄褐色土 (10YR5/6) 地山
- 深坑A 昭和初期の終地整理時の水跡跡

第2図 調査区基本層序図

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 調査要項

1. 遺跡名 特別史跡大湯環状列石
2. 調査目的 これまでの万座環状列石隣接地(D<sub>1</sub>区～D<sub>6</sub>区)の発掘調査により確認されている建物跡、フラスコ状土壌等の遺構の分布状況、列石と同遺構との位置関係と新旧関係の確認を目的に発掘調査し、史跡整備のための基礎資料とする。
3. 調査地 D<sub>7</sub>区 秋田県鹿角市十和田大湯字万座27番地
4. 発掘面積 3,176㎡
5. 調査期間  
調査準備 平成7年4月5日～4月7日  
発掘調査 平成7年4月10日～9月6日  
整理・報告書作成 平成7年10月2日～平成8年3月29日
6. 調査主体者 鹿角市教育委員会
7. 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課  
主任 藤井安正 主事 花海義人
8. 調査参加者  
調査指導員 熊谷太郎(秋田県教育庁文化課 学芸主事)  
調査員 成田典彦(小坂町立十和田小中学校 教頭)  
鎌田健一(秋田県立十和田高等学校 教諭)  
三ヶ田俊明(小坂町立小坂小学校 教諭)  
調査補助員 柳沢和仁、大森寿子  
発掘作業員 苗代沢ノブ、宮沢トミエ、柳沢勝江、柳沢ヤス、松宮カチ  
宮沢カヨ、柳沢恵美子、千葉ヨリ、佐藤良子、兎沢サツ子  
柳沢ミネ、木村千鶴江、高村サツ、柳館愛子、安村ヨコ  
木村イヨ、黒川一子  
整理作業員 田中栄子、福島美紀子、黒沢文子、石川千春、児玉公子
9. 生涯学習課  
課長 田中正美  
主幹課長補佐 齊藤登子  
課長補佐 奈良勝哉

主 査 秋元 信夫  
主 任 藤井 安正  
主 事 佐海 義人

#### 10. 協力機関

文化庁記念物課、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター

## 2. 調査の方法

調査区内のグリッド設定については、第1次調査以来のN-49-Wを基準線とする5m単位とし、万座環状列石内の基準杭より延長した。杭番号はアルファベットと算用数字を組み合わせて、西側の杭を以てグリッドの名称とした。

作業の効率化を図るため、調査区D<sub>6</sub>区および本調査区西側に設定した土層観察用トレンチの基本層序をもとに、表土除去については重機を導入した。なお、土砂置場の確保のため調査期間前半に県道側を、後半に万座環状列石隣接地の調査を行うこととした。

遺物包含層・遺構確認面であるⅢ層以下については手掘りによる分層発掘とし、極力上層での遺構確認に努めた。確認された遺構については、種類別・発見順に01番より付した。

本調査は、遺構の分布状況を把握することに主眼を置いたことから、遺構の精査を半截するに留め、遺構の保存も考慮した。

遺構の実測は簡易遣り方測量を用い、1/20で図化した。遺物の取り上げは、各グリッド、各層ごとに一括して取り上げたが、一物体・復元可能土器や土製品・石製品については、出土地点を記録するように努めた。

写真撮影には、2台のカメラを使用し、調査各段階・遺物出土状況を白黒、リバーサルフィルムに取めた。

(藤井 安正)

## 3. 調査の経過

特別史跡大湯環状列石第12次発掘調査は平成7年4月10日より開始し、全調査を終了したのは9月6日である。以下、調査日誌に基づいてその経過を述べる。

4月10日、作業員への作業内容と事務説明のあと作業を開始する。同日より重機を導入して調査区南部より表土除去、これを追うように遺物包含層の除去を開始する。調査区南部では遺物・遺構の出土・確認がほとんど無いまま、5月上旬に至る。調査面積が広がるにつれ遺物の出土量、確認遺構も多くなる。5月12日の1号土壇の精査をはじめに確認遺構については随時、半截・土層断面図作成、写真撮影を行う。5月後半には軽形土製品、土偶、耳飾り等の製品類が多数出土する。6月上旬には調査前半の作業もほぼ終了し、後半への準備を整える。



第3図 かつた地区と周辺地の地形



6月2日には、文化庁記念物課岡村道雄調査官が鹿角市出土文化財管理センター視察のおり現地を訪れた。6月14日より、再度重機を導入して、前半部分の埋め戻しと表土除去に取りかかる。後半の作業は調査区東側より開始し、開始と共に多量の遺物、土壌・フラスコ状土壌・Tピットが相次いで確認され、随時精査に入る。6月末には調査も北側（万座環状列石隣接地）に及び昨年その一部を確認していた第603号環状配石遺構を再確認する。7月中旬には遺構数も増え、確認数40基を超える。7月下旬には万座環状列石の隣接地の遺構確認作業も進み、夥しいほどの遺構が確認された。8月3日・4日には文化庁記念物課本中真調査官、秋田県教育庁文化課熊谷学芸主事の現地指導をいただいた。8月中旬には遺構未確認部分は調査区西端部のみとなり、確認遺構の精査とその作業に全力を注ぐ。

9月6日まで、遺構の精査、記録を終了し、本年度の現地での調査をすべて終えた。

なお、9月15日には現地説明会を行い、県内外より多数の参加者があった。（藤井 安正）

### 第三章 検出遺構と出土遺物

D<sub>7</sub>区において、確認された縄文時代の遺構は、建物跡7棟、柱穴状ピット83個、環状配石遺構1基、立石遺構2基、焼土遺構5基、Tピット6基、フラスコ状土壌40基、土壌54基である。なお、第01号環状配石遺構については、D<sub>6</sub>区(平成6年度調査)でその一部を確認している。

#### 1. 建物跡と柱穴状ピット

D<sub>7</sub>区からは113個の柱穴状ピットが確認された。そのほとんどは万座環状列石の南側隣接地である。これらピットは基本層序第Ⅲd層でその輪郭を確認することができ、その規模は径17cm～98cm、深さ18cm～135cmを測る。柱痕が確認されたものや、その規則的な配列からこれらの多くが独立柱建物跡の柱穴と考えられる。ここでは柱配列を明確にできた7棟についてその概要を記述する。

なお、発掘調査は万座環状列石を取り囲むフェンス際までであった。万座外帯からフェンスまでは約4m程あり、この隙間に多くの柱穴状ピットが眠っているものと判断される。これを考慮すると今回確認された以外にも数棟の建物跡が存在するものと判断される。なお、柱配置を示さない柱穴状ピットからも縄文後期前葉の土器破片、石器(石匙、搔器、敲石、凹石)、石製品(石刻)が出土している。

##### 第01号建物跡(第5図)

D<sub>7</sub>区北端のZ1・ZJ-90・91グリッドに位置する。Ⅲd層上面で確認した。01号環状配石遺構、89・90・94号土壌と重複し、その新旧関係は89・90・94号土壌→本遺構→01号環状配石である。ピット27・40・(1020)・(1038)を柱穴とする4本柱の建物跡で、長辺3.80m、短辺2.50mを測り、長軸方向はW-Eである。柱穴の規模は大きく、掘り方径75cm～113cm、深さ83cm～130cmを測る。

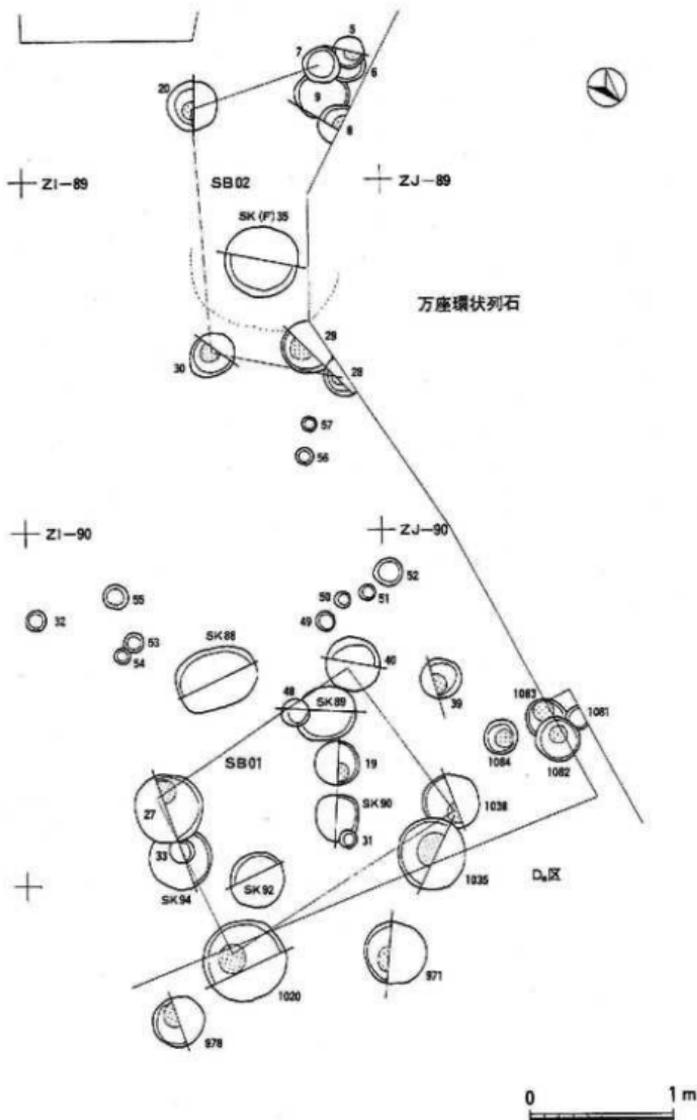
本遺構Pit1020より縄文後期中葉の土器破片が出土している。

##### 第02号建物跡(第5図、10図8・9)

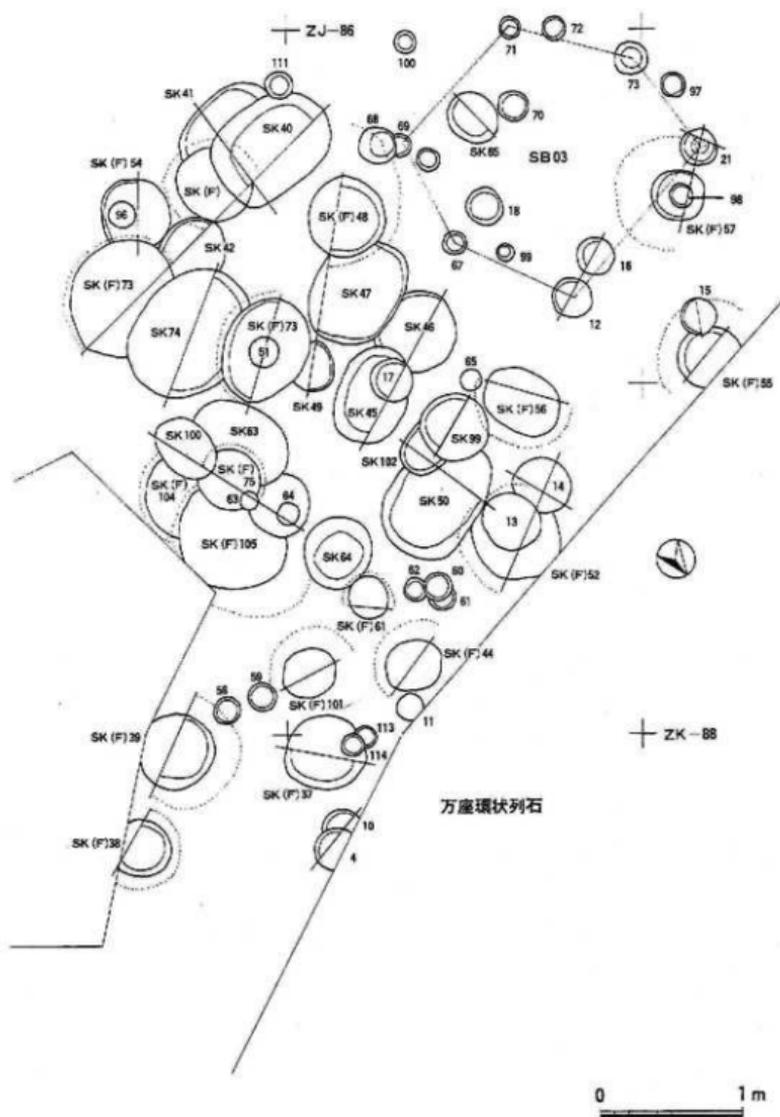
D<sub>7</sub>区北側のZ1・ZJ-88・89グリッドに位置する。Ⅲd層上面で確認した。35号フラスコ状土壌と重複し、その新旧関係は不明。建物跡の一部はフェンス内にあると思われる。

ピット7・20・28・30とフェンス内に位置する2個を柱穴とする6本柱の建物跡で、長辺3.48m・張り出し部軸長4.50m、柱痕径21cm～30cmを測り、軸長方向はN-37°Eである。柱穴の規模は、掘り方径55cm～74cm、深さ85cm～120cmを測る。

本遺構ピットより縄文後期の土器破片が出土した。



第5图 建物跡実測图(1)



第 6 图 建物跡実測图(2)

#### 第03号建物跡（第6図）

D<sub>7</sub>区北東側のZK・ZL-86グリッドに位置する。Ⅲd層上面で確認した。57号フラスコ状土塊・65号土塊と重複し、その新旧関係は不明である。

ビット12・21・67・69・71・72を柱穴とする6本柱の建物跡で、長辺3.28m、短辺2.80m、張り出し部軸長3.60mを測り、軸長方向はN-80°-Eである。柱穴の規模は小さく、掘り方径28cm～55cm、深さ54cm～55cmを測る。

本遺構ビットより遺物は出土しなかった。

#### 第04号建物跡（第7区、11図7）

D<sub>7</sub>区北東側のZL-85グリッドに位置する。Ⅲd層上面で確認した。71号・109号フラスコ状土塊と重複し、その新旧関係は本遺構が新しい。

ビット22・41・43・115を柱穴とする4本柱の建物跡で、長辺2.85m、短辺2.50mを測り、長軸方向N-88°-Eである。柱穴の規模は掘り方径41cm～46cm、深さ84cm～105cmを測る。

本遺構ビットより縄文後期の土器細破片、磨製石斧が出土した。

#### 第05号建物跡（第7区）

D<sub>7</sub>区北東側のZL-85・86グリッドに位置する。Ⅲd層上面で確認した。93号土塊と重複し、その新旧関係は本遺構が新しい。

ビット36・47・75・87・88・95を柱とする6本柱の建物跡で、長辺2.30m、短辺2.10m、張り出し部軸長3.60mを測り、軸長方向はN-88°-Eである。柱穴の規模は掘り方径32cm～49cm、深さ78cm～95cm、柱径20cm～26cmを測る。

本遺構ビットより遺物は出土しなかった。

#### 第06号建物跡（第7区、10図21）

D<sub>7</sub>区北東側のZM-84・85グリッドに位置する。Ⅲd層上面で確認した。07号建物跡、84号・85号土塊と重複し、その新旧関係は84号土塊→85号土塊→本遺構→07号建物跡である。

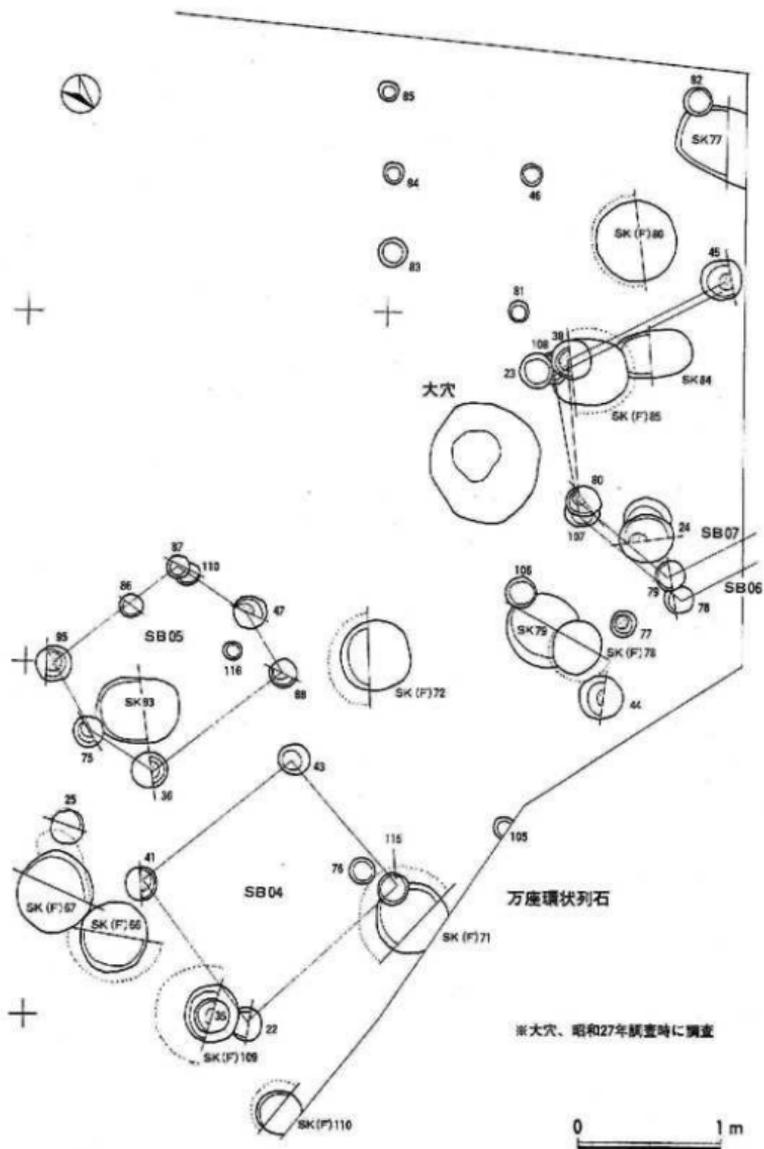
ビット38・45・79・80を柱とする4本柱と調査区外に位置する2本の柱を含む建物跡で、短辺3.40mを測る。張り出し部軸長は凡そE-10°-Sである。柱穴の規模は掘り方径30cm～58cm、深さ75cm～110cm、柱径21cm～30cmを測る。

本遺構ビットより縄文後期前葉の土器破片が出土した。

#### 第07号建物跡（第7区）

D<sub>7</sub>区北東側のZM-84・85グリッドに位置する。Ⅲd層上面で確認した。06号建物跡、84号・85号土塊と重複し、その新旧関係は84号土塊→85号土塊→本遺構→07号建物跡である。

ビット45・78・107・108を柱とする4本と調査区外に位置する2本の柱を含む建物跡で、短辺3.80mを測る。張り出し部軸長は凡そE-10°-Sである。柱穴の規模は掘り方径40cm～58cm、

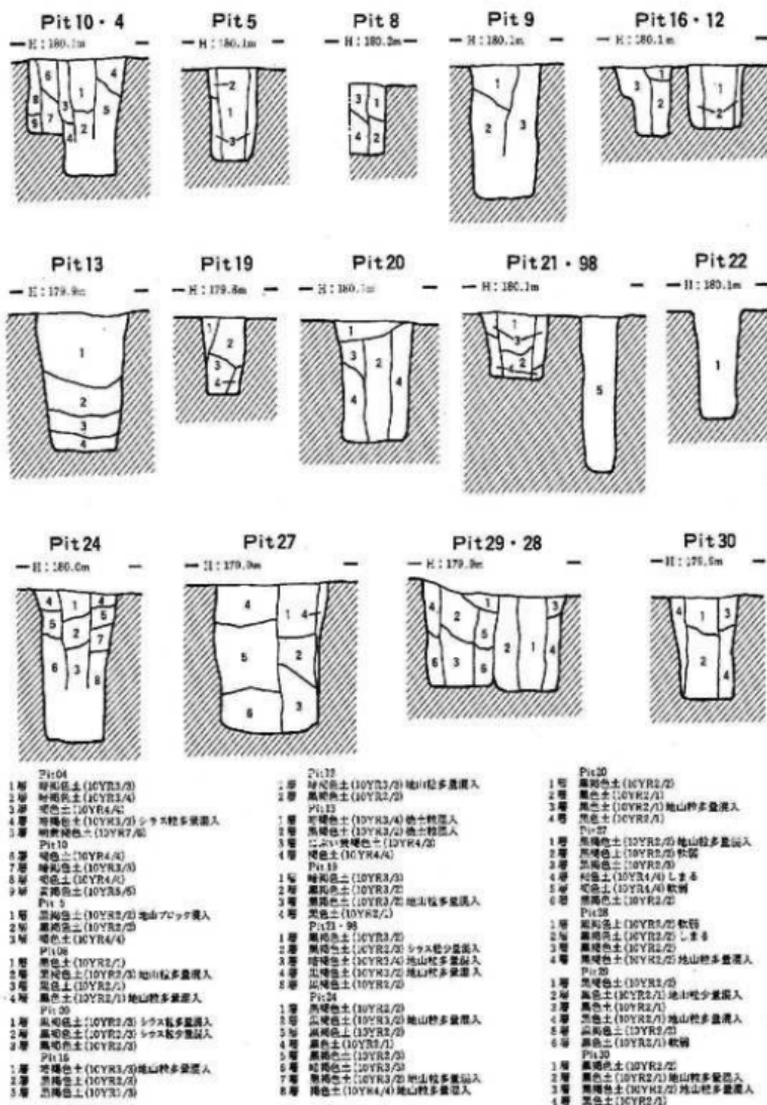


第7図 建物跡実測図(3)

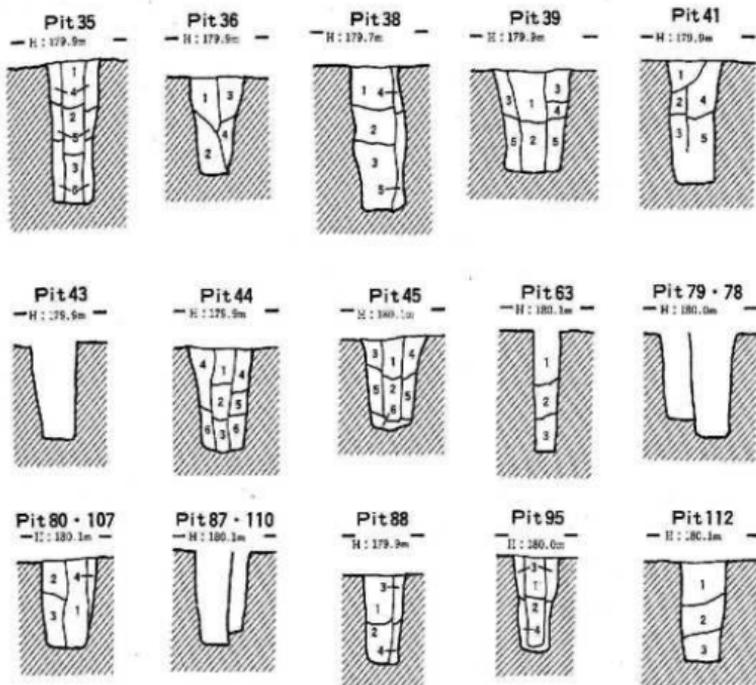
第1表 建物跡一覧表

※張り出し部をもつプランのうち、張り出し部軸長が長さより長いものは張り出し部軸方向を長軸方向とした。  
 ※新旧関係はヨ一線で表記。表記のないものは新旧不明。  
 ※△のついているものは第11次地震調査時の追加跡、柱70%である。

建物跡 No.	階数	柱穴数	柱			表座の長さ(m)	裏座の長さ(m)	張り出し部軸長 (m)	長軸方向	新旧関係
			番号	規模、長さ(m)	柱間隔					
SB01	I	4	Pa 27	38×36, 130	34	3.30(Pa1100-Pa1030)	2.50(Pa1100-Pa 40)		W-E	SB01-SX520 SK80-90-04-SB01
			Pa 49	75×75, 130		3.30(Pa 27-Pa 40)	2.49(Pa1100-Pa 27)			
			△Pa1100	113×113, 100						
			△Pa1100	70×70, 83						
SB02	II	6	Pr 7	○×○, 120		3.48(Pa 29-Pa 30)		4.30(Pa 7-Pa20)	N-37-E	SKP05
			Pr 26	70×60, 110	21					
			Pr 28	55×○, 85	23					
			Pr 30	74×60, 90	30					
			Pr x							
			Pr 7							
SB03	I	5	Pa 11	55×33, 55		1.80(Pa 12-Pa 21)	3.15(Pa 21-Pa 71)	3.60(Pa67-Pa72)	N-87-E	SKP27 SK65
			Pa 2	49×49, 100	23	2.30(Pa 60-Pa 71)	3.28(Pa 31-Pa 60)			
			Pa 67	33×30, ○						
			Pa 69	31×○, ○						
			Pa 71	28×28, ○						
			Pa 72	32×31, ○						
SB04	I	4	Pa 22	44×44, 95		2.85(Pa 22-Pa 115)	2.50(Pa 22-Pa 41)		N-88-E	SKP19-SB04 -SKP00-Pa35
			Pa 41	48×42, 100	33	2.70(Pa 41-Pa 43)	2.33(Pa 43-Pa115)			
			Pa 43	41×40, 51						
			Pa 115	43×40, 100						
SB05	II	6	Pa 36	48×47, 95	23	2.30(Pa 36-Pa 80)	2.10(Pa 37-Pa 80)		N-88-E	SK80-SB06
			Pa 47	48×46, 79	24	2.20(Pa 37-Pa 93)	2.10(Pa 36-Pa 95)	2.75(Pa47-Pa75)		
			Pa 75	41×40, 90	30					
			Pa 87	23×23, 85						
			Pa 88	39×36, 78	21					
			Pa 95	47×46, 87	26					
SB06	II	5	Pa 38	58×37, 110	30		3.40(Pa 75-Pa 30)		E-10'-S	SK84-SK85-SB06 -SB07
			Pa 45	58×36, 100	22					
			Pa 79	39×○, 75						
			Pa 80	42×40, 80	21					
			Pa x							
Pa 7										
SB07	I	5	Pa 45	58×56, 100	22		3.80(Pa 78-Pa100)		E-10'-S	SK84-SK85-SB06 -SB07
			Pa 78	40×40, 90						
			Pa 107	○×○, 75						
			Pa 108	44×○, 78						
			Pa x							
Pa 7										



第8図 柱穴状ビット断面図(1)



- Pit 35**  
H: 179.9m
- 1層 黒色土(10YR2/1)炭化物混入
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 3層 黒色土(10YR2/1)
  - 4層 黒褐色土(10YR3/3)炭化物混入
  - 5層 黒褐色土(10YR2/2)炭化物混入
  - 6層 黒色土(10YR2/1)

- Pit 36**  
H: 179.9m
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 3層 黒褐色土(10YR2/2)地山粒多量混入
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)地山粒多量混入

- Pit 38**  
H: 179.7m
- 1層 黒褐色土(10YR3/3)
  - 2層 黒褐色土(10YR3/2)シラス粒多量混入
  - 3層 黒色土(10YR2/1)
  - 4層 褐色土(10YR3/3)地山粒多量混入

- Pit 39**  
H: 179.9m
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2)地山粒少量混入
  - 3層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)地山粒多量混入
  - 5層 褐色土(10YR4/4)

- Pit 41**  
H: 179.9m
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 2層 黒褐色土(10YR3/1)
  - 3層 黒褐色土(10YR3/2)
  - 4層 暗褐色土(10YR3/3)
  - 5層 黒色土(10YR2/1)

- Pit 44**  
H: 179.5m
- 1層 黒褐色土(10YR3/1)
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 3層 黒色土(10YR2/1)
  - 4層 黒褐色土(10YR3/2)粘質土混入
  - 5層 灰褐色土(10YR4/2)
  - 6層 黒褐色土(10YR2/2)地山粒多量混入

- Pit 45**  
H: 180.1m
- 1層 黒褐色土(10YR3/2)炭化物混入
  - 2層 暗褐色土(10YR2/2)
  - 3層 におい黄褐色(10YR4/3)
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 5層 黒色土(10YR2/1)
  - 6層 暗褐色土(10YR3/2)

- Pit 63**  
H: 180.1m
- 1層 におい黄褐色(10YR4/3)
  - 2層 黒褐色土(10YR3/2)
  - 3層 黒褐色土(10YR3/2)

- Pit 79-78**  
H: 180.0m
- 1層 暗褐色土(10YR2/2)地山粒多量混入
  - 2層 暗褐色土(10YR2/2)
  - 3層 黒褐色土(10YR3/1)
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)

- Pit 80-107**  
H: 180.1m
- 1層 暗褐色土(10YR2/2)地山粒多量混入
  - 2層 黒色土(10YR1.7/1)
  - 3層 黒色土(10YR2/1)
  - 4層 黒色土(10YR1.7/1)地山粒少量混入

- Pit 87-110**  
H: 180.1m
- 1層 暗褐色土(10YR2/2)
  - 2層 黒色土(10YR2/2)
  - 3層 黒褐色土(10YR3/2)
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)地山粒多量混入

- Pit 88**  
H: 179.9m
- 1層 暗褐色土(10YR3/2)炭化物混入
  - 2層 暗褐色土(10YR2/2)
  - 3層 におい黄褐色(10YR4/3)
  - 4層 暗褐色土(10YR2/2)
  - 5層 黒色土(10YR2/1)
  - 6層 暗褐色土(10YR3/2)

- Pit 95**  
H: 180.0m
- 1層 暗褐色土(10YR3/2)
  - 2層 黒色土(10YR2/2)
  - 3層 暗褐色土(10YR3/2)
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)地山粒多量混入

- Pit 112**  
H: 180.1m
- 1層 黒色土(10YR3/1)
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 3層 暗褐色土(10YR2/2)地山粒混入

0 1 m

第9図 柱穴状ピット断面図(2)

第2表 D<sub>7</sub>区柱穴状ビット一覧表(新旧関係は旧→新で標記。記号のないものは新旧不明)  
(P<sub>16</sub>971以降は第11次発掘調査時に確認したもの)

ビット No.	ドリッド	長径×短径・深さ (cm)	重 複 関 係	ビット No.	ドリッド	長径×短径・深さ (cm)	重 複 関 係
1	ZD-92	48×46・35		39	ZK-90	58×54・90	
2	ZD-92	35×34・41		40	ZJ-90	75×75・120	P <sub>16</sub> 49→SK353
3	ZH-91	28×25・45	SK714→P <sub>16</sub> 3	41	ZL-85	48×45・105	
4	ZK-88	80×O・100	P <sub>16</sub> 10→P <sub>16</sub> 3	42	ZI-89	21×20・35	
5	ZJ-88	42×42・125	P <sub>16</sub> 7→9→6→5	43	ZL-85	41×40・84	
6	ZJ-88	48×O・130	P <sub>16</sub> 7→9→6→5	44	ZM-85	59×58・90	
7	ZJ-88	O×O・120	P <sub>16</sub> 7→9→6→5	45	ZM-83	58×55・100	
8	ZJ-88	56×55・75	P <sub>16</sub> 9→8	46	ZM-83	29×27・80	
9	ZJ-88	75×68・115	P <sub>16</sub> 9→8	47	ZL-84	48×45・79	
10	ZK-88	O×O・65	P <sub>16</sub> 10→4	48	ZJ-90	27×26・42	SK29→P <sub>16</sub> 48
11	ZK-87	40×36・22	SK7944→P <sub>16</sub> 11	49	ZJ-90	25×24・30	
12	ZK-86	35×33・55		50	ZJ-90	26×20・18	
13	ZK-87	82×80・130		51	ZJ-90	40×40・85	
14	ZK-87	41×O・60	SK7939→P <sub>16</sub> 14	52	ZK-90	40×36・70	
15	ZL-86	51×45・90	SK7935→P <sub>16</sub> 15	53	ZJ-90	27×24・25	P <sub>16</sub> 54→53
16	ZK-86	52×52・60		54	ZJ-90	30×30・20	P <sub>16</sub> 54→53
17	ZK-86	64×37・O		55	ZJ-90	34×30・22	
18	ZK-86	50×30・58		56	ZJ-89	22×20・25	
19	ZJ-90	40×38・70		57	ZJ-89	35×30・57	
20	ZJ-88	70×69・110		58	ZJ-88	40×35・80	
21	ZL-88	49×49・108		59	ZJ-88	40×38・	
22	ZL-86	44×44・95	SK79→P <sub>16</sub> 22	60	ZK-87	38×36・70	
23	ZM-84	51×46・72	P <sub>16</sub> 108→P <sub>16</sub> 23・38	61	ZK-87	35×	35
24	ZM-84	76×75・135		62	ZK-87	30×29・48	
25	ZL-85	50×42・66	SK79→P <sub>16</sub> 25	63	ZJ-87	28×25・40	SK62-55→P <sub>16</sub> 63
26	欠番			64	ZJ-87	22×	SK62→P <sub>16</sub> 64
27	ZJ-90	96×96・120	SK94→P <sub>16</sub> 29→33→SK(8)3	65	ZK-87	28×22・35	
28	ZJ-85	55×	85	66	欠番		
29	ZJ-85	78×75・80		67	ZK-86	33×30・	
30	ZJ-85	74×60・90		68	ZK-86	51×44・	P <sub>16</sub> 69→68
31	ZJ-90	24×24・33	SK90→P <sub>16</sub> 31	69	ZK-86	31×	P <sub>16</sub> 66→68
32	ZJ-90	27×25・27		70	ZK-86	40×40・	
33	ZJ-90	28×	80	71	ZK-86	35×35・	
34	ZI-89	30×28・35		72	ZK-86	32×31・	
35	ZL-85	48×45・130	SK79→P <sub>16</sub> 35	73	ZK-86	48×45・67	
36	ZL-85	45×47・95		74	ZK-85	37×35・38	
37	ZI-89	25×25・20		75	ZL-85	41×40・90	SK90→P <sub>16</sub> 75
38	ZH-84	58×57・110	P <sub>16</sub> 108→23・38→SK90→38	76	ZL-85	25×34・58	SK791→P <sub>16</sub> 76

第3表 D<sub>7</sub>区柱穴状ビット一覧表

(新旧関係は旧→新で表記。記号のないものは新旧不明)  
(Pr971以降は第11次発掘調査時に確認したもの)

ビット No	グリッド	長さ×幅径・深さ (cm)	重複関係	ビット No	グリッド	長さ×幅径・深さ (cm)	重複関係
77	ZM-84	38×34・63		106	ZM-84	40×40・60	SK75→Pr106
78	ZM-84	40×45・90	Pr75→78	107	ZM-84	○×○・75	Pr107→Pr80
79	ZM-84	39×○・75	Pr75→78	108	ZM-84	44×○・78	Pr108→Pr23, 38
80	ZM-84	40×40・83	Pr107→80	109	ZL-84	36×36・41	
81	ZM-83	30×26・61		110	ZL-84	34×○・74	Pr110→Pr87
82	ZM-83	38×37・○	SK77→Pr82	111	ZK-86	36×36・○	SK46→Pr111
83	ZM-83	40×26・33		112	ZJ-86	40×39・88	SK73→Pr112
84	ZL-83	26×26・○		113	ZK-88	29×○・34	Pr113→Pr114
85	ZL-83	28×26・○		114	ZK-89	31×30・40	SK75→Pr114
86	ZL-84	32×36・53		115	ZL-85	43×40・100	
87	ZL-84	32×31・85	Pr110→87	116	ZL-84	23×24・34	
88	ZL-85	39×36・78					
89	ZJ-86	36×33・○		971	ZK-91	85×85・109	
90	ZI-88	25×25・35		978	ZJ-91	72×69・95	
91	ZI-88	30×18・15		1002	ZJ-91	23×21・37	
92	欠番			1020	ZK-90	113×112・100	
93	ZI-88	21×20・23		1025	ZK-90	113×112・100	Pr1028→Pr1035
94	ZI-88	17×17・33		1028	ZK-90	79×72・83	Pr1028→Pr1035
95	ZL-84	47×46・85		1078	ZK-91	23×22・31	
96	ZJ-86	38×36・○	SK754→Pr96	1081	ZK-90	20×○・50	
97	ZL-86	32×31・25		1082	ZK-90	61×33・80	
98	ZL-86	32×33・128	SK757→Pr98	1083	ZK-90	55×○・103	Pr1083→Pr1084
99	ZK-86	23×22・○		1084	ZK-90	○×43・79	Pr1083→Pr1084
100	ZK-86	30×30・○					
101	ZI-86	48×46・25					
102	ZI-88	39×20・40	SK91→Pr102				
103	ZI-88	20×18・20					
104	ZI-88	19×18・15					
105	ZM-85	30×30・30					

深さ75cm～100cmを測る。

本遺構ビットより遺物は出土しなかった。

(藤井 安正)

## 2. 配石遺構

### (1) 環状配石遺構

#### 第01号環状配石遺構 (第12図)

万竇環状列石南南東側に隣接するZJ・ZK-90・91グリッドに位置し、Ⅲc層上面で確認した。D<sub>6</sub>区調査で確認した第603号環状配石遺構と同一のものである。01号建物跡、89・90・94

号土壌と重複し、本遺構がいずれの遺構より新しい。

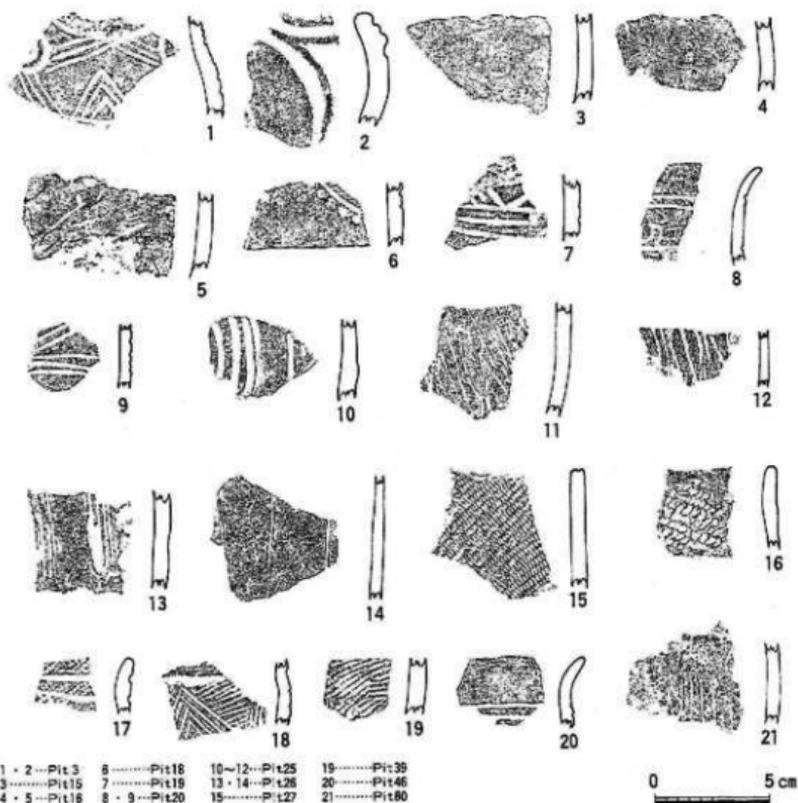
環帯は2列並べを基本とし、環帯部径4.60m、環帯幅0.4mを測る。張り出し部は確認できなかった。また、焼土は確認されなかった。

遺構に使用される石は20cm～56cmの大きさで、その石質は石英閃緑玢岩が大半を占め、安山岩、緑色凝灰岩、石英安山岩である。

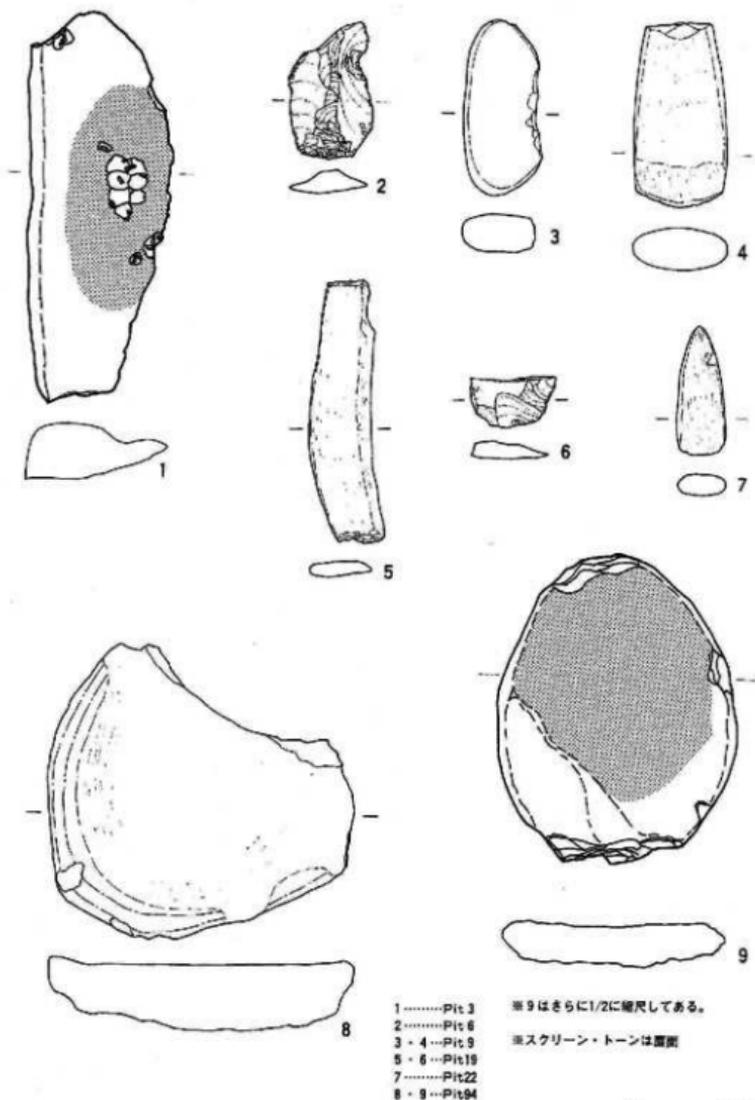
## (2) 立石遺構

### 第02号立石遺構 (第13図)

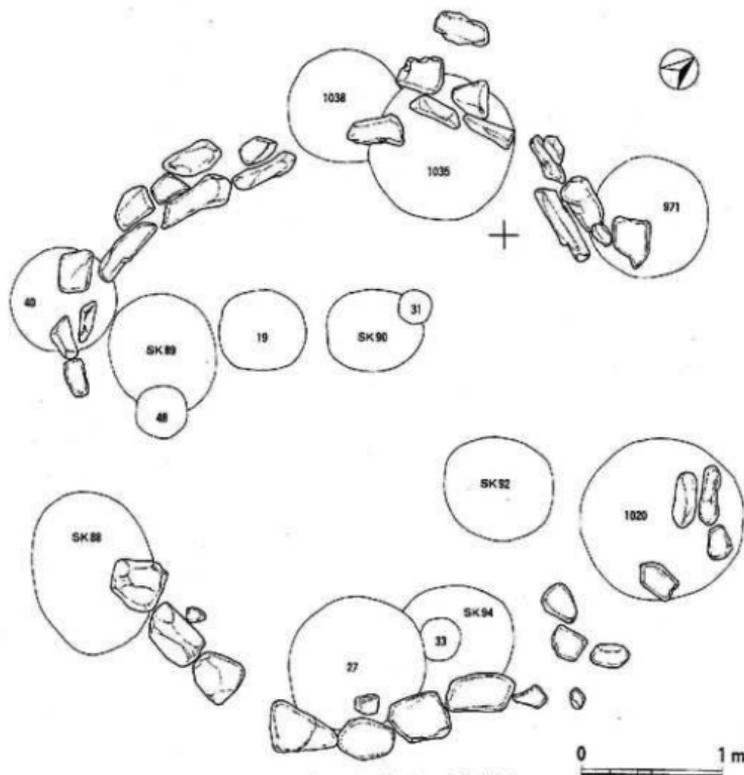
D<sub>7</sub>区東部のZ A-93グリッド、万座・野中堂環状列石のほぼ中間に位置する。Ⅲd層上面で



第10図 柱穴状ピット出土遺物(1)



第11図 柱穴状ビット出土遺物(2)



第12図 第01号環状配石遺構実測図

確認した。

長さ38cm、幅34cmの石を、長軸55cm×幅36cm、深さ32cmの小ピットに垂直に立て、土壌底部付近には根固め石が数個入れられている。

遺物は出土しなかった。構築時期は周辺の出土遺物から後期前葉と考えられる。

#### 第04号立石遺構 (第13図)

D<sub>2</sub>区北西部のZ I-87グリッド、遺構集中範囲の外郭部分に位置する。IV層上面で確認した。土壌とも言うべきピット中央に、長さ72cm×厚さ54cmの大型の礫をやや斜めに設置している。ピットは円形を呈し径120cm、深さ44cmを測る。

遺物は出土しなかった。構築時期は周辺の出土遺物から後期前葉と考えられる。

(藤井 安正)

### 3. 焼土遺構

#### 第01号焼土遺構 (第14図)

調査区東部Z E-90グリッド、III d層上面で確認した。32号フラスコ状土壌が西側に隣接する。焼土は楕円形を呈し、その規模は53cm×42cmを測る。

#### 第02号焼土遺構 (第14図)

調査区東部Z E-91グリッド、III d層上面で確認した。16号・32号フラスコ状土壌の中央に位置する。

焼土は不整形を呈し、その規模は60cm×38cmを測る。

#### 第03号焼土遺構 (第14図)

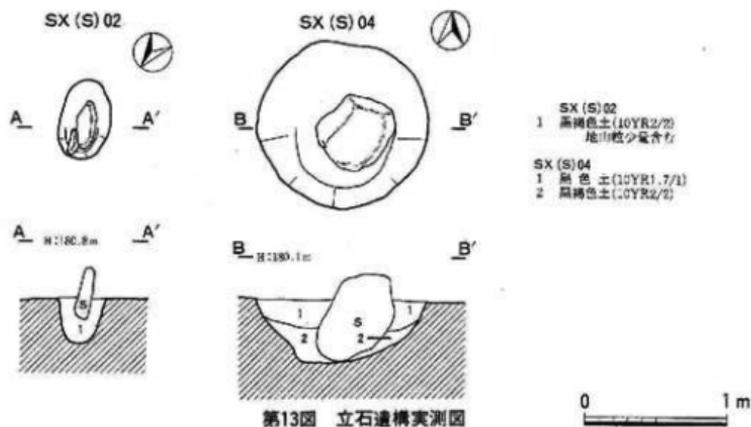
調査区東部Z G-91グリッド、III d層上面で確認した。22号土壌の東側に隣接する。

焼土は円形を呈し、その規模は径56cm×53cmを測る。

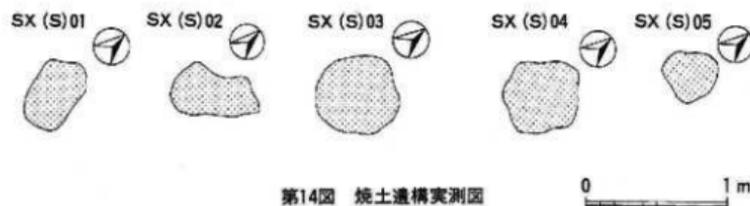
#### 第04号焼土遺構 (第14図)

調査区東部Z H-91グリッド、III d層上面で確認した。21号土壌の北東側に隣接する。

焼土は略方形を呈し、その規模は53cm×50cmを測る。



第13図 立石遺構実測図



第14図 焼土遺構実測図

第05号焼土遺構 (第14図)

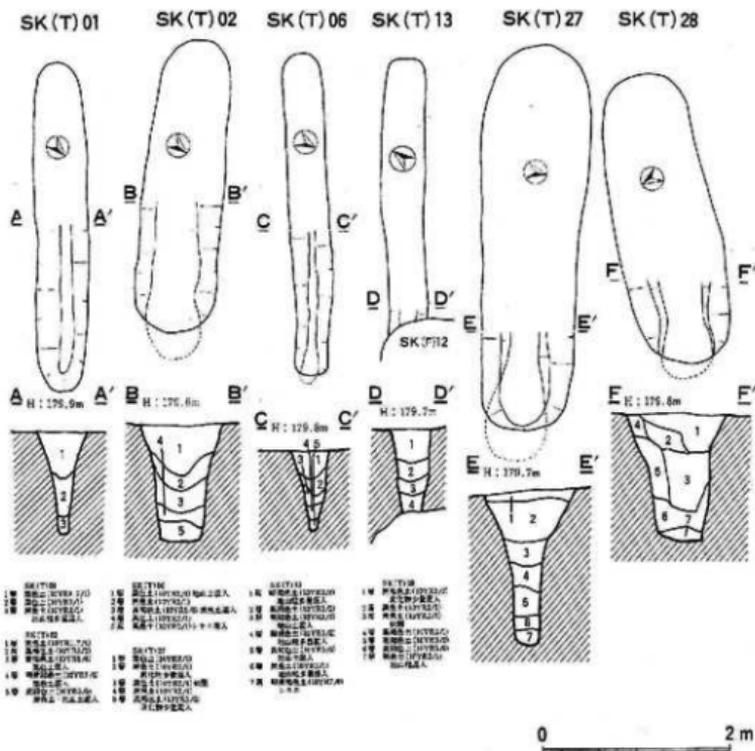
調査区中央より北側のZ I-87グリッド、Ⅲd層上面で確認した。焼土は不整形を呈し、その規模は38cm×36cmを測る。  
(柳沢 和仁)

4. 土 塚

(1) Tピット

第01号Tピット (第15図、16図1~3)

調査区南東側のA-90グリッド、Ⅲd層上面で確認した。規模は長軸351cm×短軸55cm、深さ110cmを測る。長軸方向はN-46°-Eである。堆積土は3層に分層され、自然堆積と判断される。ピット内より、縄文後期前葉の土器破片が出土した。第16図1は後期中葉の土器でピット上



第15図 Tピット実測図

面からの出土である。

#### 第02号Tピット (第15区)

調査区南東側のZ B-90グリッド、IV層上面で確認した。規模は長軸317cm×短軸87cm、深さ126cmを測る。長軸方向はN-63°-Eである。長軸断面はいわゆる「フラスコ状」となる。堆積土は5層に分層され自然堆積と判断される。

ピット内より遺物は出土しなかった。

構築時期は、周辺出土遺物より縄文後期前葉と考えられる。

#### 第06号Tピット (第15区、16区4-6、17区1-4)

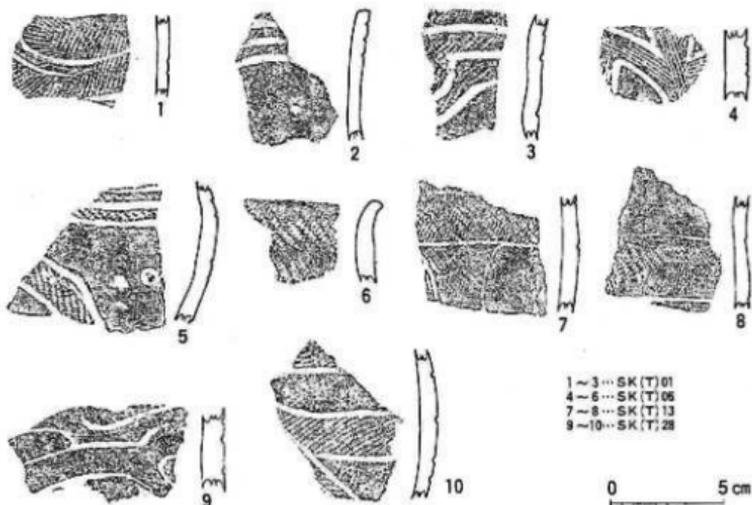
調査区東側のZ D-91グリッド、III d層上面で確認した。規模は長軸346cm×短軸43cm、深さ88cmを測る。長軸方向はN-64°-Eである。長軸断面はいわゆる「フラスコ状」となる。堆積土は5層に分層され、自然堆積と判断される。

ピット内より、縄文後期前葉の土器破片が出土した。

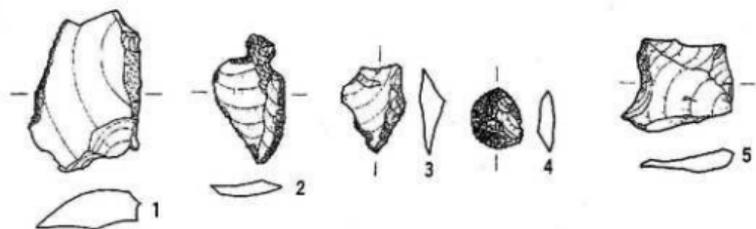
#### 第13号Tピット (第15区、16区7-8、17区5-6)

調査区東側のZ F-91グリッド、III d層上面で確認した。12号フラスコ状土壇と重複し、本ピットが古い規模は長軸300cm以上×短軸40cm、深さ100cm以上を測る。長軸方向はN-53°-Eである。堆積土は4層に分層され、自然堆積と判断される。

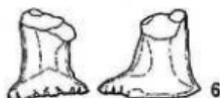
ピット内より縄文後期前葉の土器破片が出土した。



第16図 Tピット出土遺物(1)



SK(T)06……1~4  
SK(T)13……5、6



第17図 Tビット出土遺物(2)

0 5cm

#### 第27号Tビット (第15図)

調査区東側のZF-90・91、ZG-90グリッド、Ⅲd層上面で確認した。本ビット周辺には多数の土塊等が隣接している。規模は長軸414cm×短軸104cm、深さ164cmを測る。長軸方向はN-78°-Eである。堆積土は7層に分層され、自然堆積と判断される。長軸断面はいわゆる「フラスコ状」、短軸断面はロート状となる。

ビット内より遺物は出土しなかった。

標葉時期は、周辺出土遺物より縄文後期前葉と考えられる。

#### 第28号Tビット (第15図、16図9・10)

調査区北東部のZG・ZH-90グリッド、Ⅲd層上面で確認した。本ビット周辺には多数の土塊等が隣接する。規模は長軸314cm×短軸111cm、深さ137cmを測る。長軸方向はN-64°-Wである。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積と判断される。長軸断面はいわゆる「フラスコ状」となる。

ビット内より縄文後期前葉の土器破片が出土した。

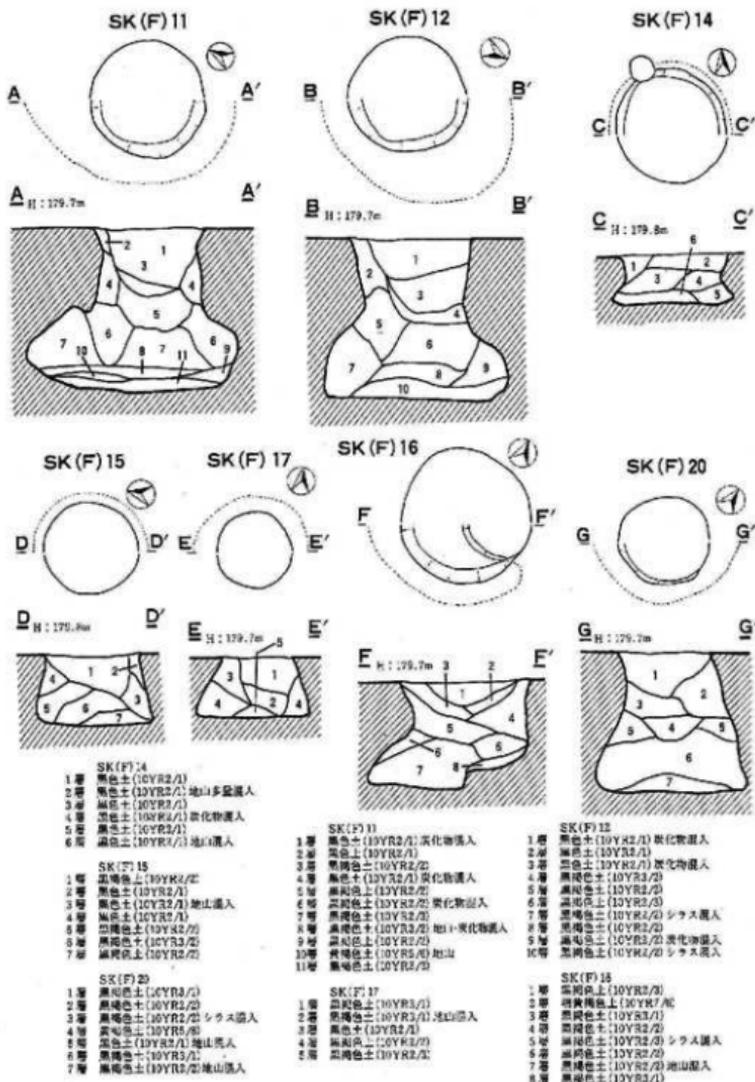
(柳沢 和仁)

#### (2) フラスコ状土塊

##### 第11号フラスコ状土塊 (第18図、23図1~3、第25図1~6)

調査区北東部ZF、ZG-91グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部は124×124cmの円形である。底部は鍋底状で径が226cm、深さは176cmである。堆積土は11ブロックに区分され、人為堆積である。堆積土中より炭化物(トネの木)の混入がみられた。

土塊内より縄文時代後期前葉の壺形土器1個体(外面に赤色顔料を塗付)、深鉢形土器2個体、



0 2 m

第18図 フラスコ状土壌実測図(1)

土器破片243点の他、搔器1点、石錘1点、磨石1点、剥片5点、鏝形土製品1点、土器片利用土製品1点、軽石製石斧1点の出土があった。

**第12号フラスコ状土壌** (第18図、23図4、第25図7～9、第27図1～7)

調査区北東部ZF-91グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径は126×122cm、底部径は200cmで、深さは168cmである。堆積土は10ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の深鉢形土器1個体、土器破片150点の他、搔器6点、敲石1点、磨石1点、剥片9点、土器片利用土製品1点の出土があった。

**第14号フラスコ状土壌** (第18図)

調査区北部ZH-91グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径は116×120cm、底部径は128cmで、深さは50cmと比較的浅い方である。ピット3と重複し、本遺構が古い。堆積土は10ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片16点、剥片14点が出土した。

**第15号フラスコ状土壌** (第18図、第25図10～12)

調査区北部ZH-91グリッド・Ⅲd層上面での確認である。口縁部径は100×100cm、底部径は120cmで、深さは74cmである。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片18点、剥片1点が出土した。

**第16号フラスコ状土壌** (第18図、第25図13～15)

調査区北東部ZE-91グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径は146×138cmで、底径は174cmを測る。底面は二段構造となっており、西側の高い面までの深さは90cm、東側の低い面までの深さは112cmである。堆積土は8ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片23点、剥片1点が出土した。

**第17号フラスコ状土壌** (第18図、第25図16)

調査区北部ZI-91グリッド・Ⅲd層上面での確認である。口縁部径は82×80cm、底部径は120cmで、深さは64cmと比較的浅い。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片19点、剥片1点が出土した。

**第18号フラスコ状土壌** (第25図17、第27図10～12)

調査区北部ZH-90、91グリッド・Ⅲd層上面での確認である。口縁部径は146cmで、底部径は154cmである。深さは80cmを測る。19号土壌、21号土壌と重複し、本遺構は19号土壌より新しく21号土壌より古い。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片54点、石錘1点、敲石1点、剥片1点、土器片利用土製品1点の出土があった。

**第20号フラスコ状土壌** (第18図、第25図18、19)

調査区北部ZH-91グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径は100×92cmを測り、底部径は156cm、深さは150cmである。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片51点、剥片1点の出土があった。

**第23号フラスコ状土壌** (第19図、第25図21～23、第27図13～16)

調査区北部Z1-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径120×116cm、底部径148cmで、深さは130cmである。堆積土は9ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片73点、播器1点、剥片2点、土偶の足部分1点、土器片利用土製品1点の出土があった。

**第25号フラスコ状土壌** (第19図、27図17)

調査区北部Z1、ZJ-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径は74cm、底部径94を測り、深さは68cmである。26号土壌と重複し、本遺構が古い。堆積土は3層に区分され、自然堆積と考えられる。

土壌内出土遺物は縄文時代後期前葉の土器破片2点と播器1点である。

**第32号フラスコ状土壌** (第19図)

調査区北部ZE-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径190×172cm、底部径は210cmで、深さは172cmである。堆積土は10ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は、縄文時代後期と考えられる。

**第35号フラスコ状土壌** (第19図)

調査区北部ZJ-89グリッド・Ⅲd層上面での確認である。口縁部径は128×120cm、底部径174cmで、深さは146cmを測る。堆積土は15ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、構築時期は確認面および周辺出土遺物より、縄文時代後期と考えられる。

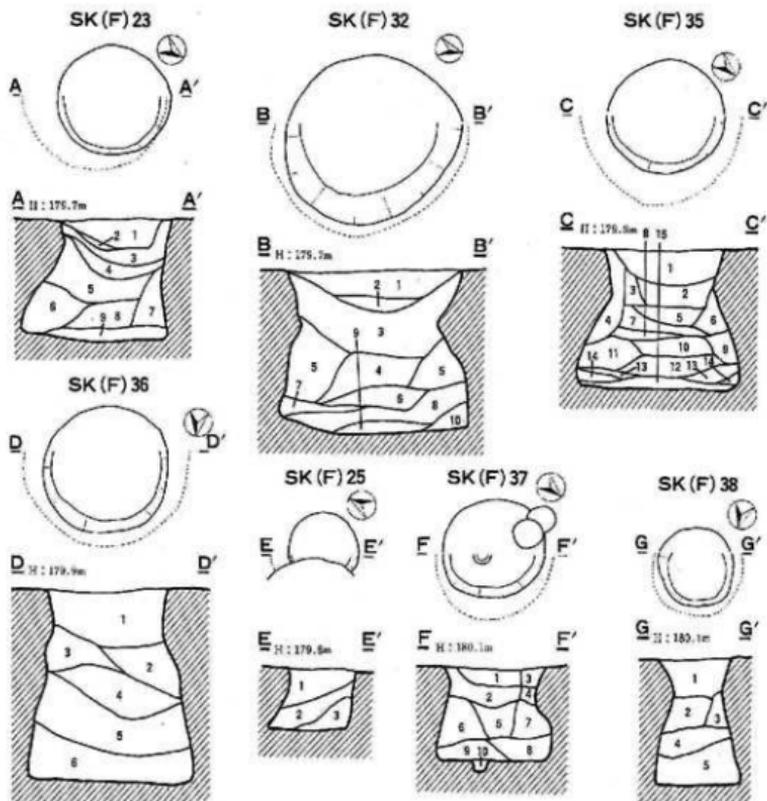
**第36号フラスコ状土壌** (第19図、第23図5～7、第25図24～26、第27図18～22)

調査区北部ZH-89グリッド・Ⅲd層上面での確認である。口縁部径は140×134cm、底部径178cmで、深さは176cmを測る。堆積土は6層に区分され、自然堆積と判断される。

土壌内より深鉢形土器1個体、浅鉢形土器2個体、縄文時代後期前葉と後期中葉の土器破片138点の他、播器1点、石錘1点、凹石1点(磨石としても使用されている)、磨石1点、剥片2点、土器片利用土製品1点の出土があった。

**第37号フラスコ状土壌** (第19図、第26図27)

調査区北西部ZK-88グリッド・Ⅳ層上面で確認した。口縁部径は108×108cm、底部の径は128cmで、深さは102cmを測る。底部中央には径18cm、底面からの深さが14cmのビットが確認さ



- SK(F) 23
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 2層 褐色土(10YR4/4) 明黄褐色土混入
  - 3層 黒色土(10YR2/1)
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 5層 黒褐色土(10YR2/2) 地山混入
  - 6層 黒色土(10YR2/1)
  - 7層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 8層 黒色土(10YR2/1) 褐色土混入
  - 9層 黒色土(10YR2/1)

- SK(F) 26
- 1層 黒色土(10YR1.7/1)
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2) シラス混入
  - 3層 黒色土(10YR2/1) 炭化物混入
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 5層 黒色土(10YR2/1) 地山混入
  - 6層 黒色土(10YR2/1)

- SK(F) 25
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2) 地山混入
  - 3層 黒色土(10YR2/1)

- SK(F) 32
- 1層 暗黄褐色土(10YR7/6)
  - 2層 暗褐色土(10YR2/2)
  - 3層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2) 地山混入
  - 5層 黒褐色土(10YR2/2) 地山・シラス混入
  - 6層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 7層 黒褐色土(10YR2/2) 地山混入
  - 8層 灰黄褐色土(10YR6/2)
  - 9層 灰黄褐色土(10YR5/2)
  - 10層 灰黄褐色土(10YR7/6)

- SK(F) 37
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 2層 暗褐色土(10YR3/2) 地山多量混入
  - 3層 黒褐色土(10YR2/2) シラス混入
  - 4層 黒色土(10YR2/1)
  - 5層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 6層 黒色土(10YR2/1) シラス多量混入
  - 7層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 8層 黒色土(10YR2/1)
  - 9層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 10層 黒色土(10YR2/1)

- SK(F) 35
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 3層 褐色土(10YR4/4)
  - 4層 黒色土(10YR2/1)
  - 5層 黒褐色土(10YR2/2) シラス混入
  - 6層 黒褐色土(10YR2/2) 地山混入
  - 7層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 8層 黒褐色土(10YR2/2) シラス混入
  - 9層 黒褐色土(10YR2/2) 地山混入
  - 10層 黒色土(10YR2/1)
  - 11層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 12層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 13層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 14層 黒褐色土(10YR2/2) シラス混入
  - 15層 黒褐色土(10YR2/2)

- SK(F) 38
- 1層 黒褐色土(10YR2/2) 地山多量混入
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2) 地山混入
  - 3層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 5層 黒色土(10YR2/1)

第19図 フラスコ状土壌実測図(2)

れた。113、114号ピットと重複し、本遺構はいずれよりも古い。堆積土は10ブロックに区分され、人為堆積である。

土城内出土遺物は縄文時代後期前葉の土器破片7点である。

**第38号フラスコ状土壌** (第19図、第26図28・29)

調査区北西部Z J-88グリッド・IV層上面で確認した。口縁部径は86×80cm、底部径は96cmで、深さは134cmを測る。堆積土は10ブロックに分けられ、人為堆積である。

土城内より縄文時代後期前葉の土器破片10点が出土した。

**第39号フラスコ状土壌** (第20図、第26図30、第28図23)

調査区北西部Z J-88グリッド・IV層上面で確認した。口縁部径は110×110cm、底部径は116cmで、深さは144cmを測る。東側壁面部分が大きく張り出している。堆積土は13ブロックに分けられ、人為堆積である。

土城内より縄文時代後期前葉の土器破片30点、掻器1点、石皿1点が出土した。

**第40号フラスコ状土壌** (第30図)

調査区北西部Z I、Z J-86グリッド・Ⅲd層下面で確認した。口縁部径は164×148cm、底部径190cm、深さは166cmである。41号土壌、63号フラスコ土壌、111号ピットと重複し、本遺構は41号土壌、63号フラスコ状土壌より新しく、111号ピットより古い。堆積土は5層に区分され、人為堆積である。

土城内より縄文時代後期前葉の土器破片16点が出土した。

**第44号フラスコ状土壌** (第20図、第26図31)

調査区北西部Z K-87グリッド・IV層上面で確認した。口縁部径は92×80cm、底部径160cmで、深さは106cmを測る。底部中央には径24cm、底面からの深さが12cmのピットが確認された。堆積土は11ブロックに分けられ、人為堆積である。

土城内より縄文時代後期前葉の土器破片7点、剥片1点が出土した。

**第48号フラスコ状土壌** (第31図、第23図8)

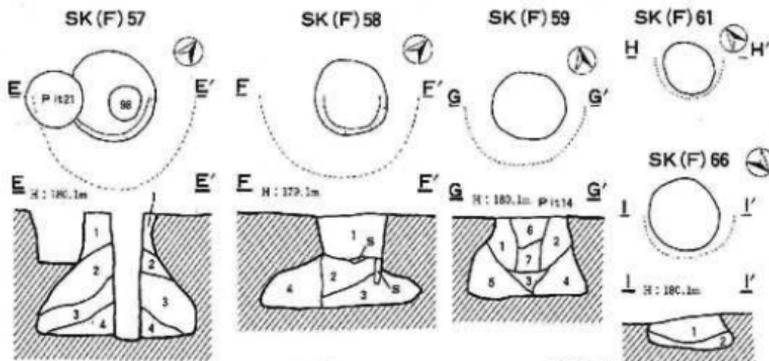
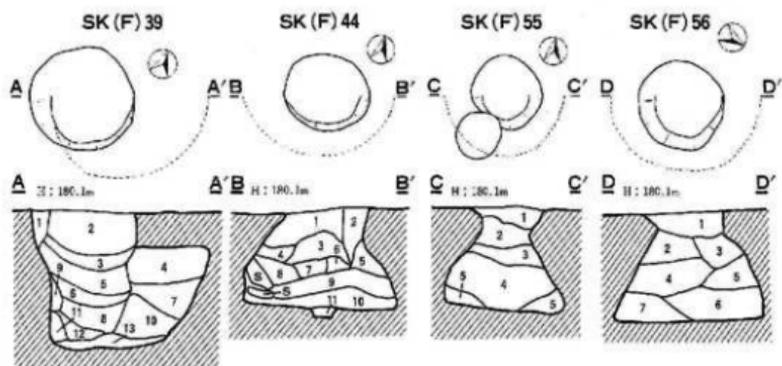
調査区北東部Z K-86グリッド・IV層上面で確認した。口縁部径は120×116cm、底部径は188cmで、深さは176cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。

土城内より縄文時代後期前葉の浅鉢形土器1個体、土器破片27点の出土があった。

**第52号フラスコ状土壌** (第31図)

調査区北西部Z K-87グリッド・IV層上面で確認した。51号土壌、13、14号ピットと重複し、本遺構は51号土壌、13、14号ピットのいずれよりも古い。重複のため口縁部径及び底径は不明である。深さは118cmを測る。残存する堆積土は4ブロックに分けられ、人為堆積である。

土城内より縄文時代後期前葉の土器破片22点が出土した。



- SK (F) 39
- 1層 黒褐色土 (10YR2/8)
  - 2層 黒褐色土 (2.5YR3/3) シラス混入
  - 3層 黒褐色土 (10YR3/2)
  - 4層 黒褐色土 (10YR3/2) 地山多量混入
  - 5層 黒褐色土 (10YR2/3)
  - 6層 黒褐色土 (10YR2/1)
  - 7層 黒褐色土 (10YR5/6)
  - 8層 黒褐色土 (10YR2/2)
  - 9層 暗黄褐色土 (10YR7/6)
  - 10層 暗褐色土 (10YR3/3) 地山多量混入
  - 11層 暗褐色土 (10YR2/3)
  - 12層 暗褐色土 (10YR3/3)
  - 13層 黒褐色土 (10YR2/2)

- SK (F) 57
- 1層 黒褐色土 (2.5YR2/2)
  - 2層 黒褐色土 (10YR3/2) 地山多量混入
  - 3層 黒褐色土 (10YR2/2) 地山多量混入
  - 4層 暗褐色土 (10YR2/2) 地山多量混入

- SK (F) 44
- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)
  - 2層 黒褐色土 (2.5YR3/2)
  - 3層 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物多量混入
  - 4層 黒褐色土 (2.5YR3/2)
  - 5層 黒褐色土 (10YR2/2) 地山多量混入
  - 6層 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物混入
  - 7層 黒褐色土 (10YR2/2)
  - 8層 黒褐色土 (10YR2/2) 地山多量混入
  - 9層 黒褐色土 (10YR2/2)
  - 10層 黒色土 (10YR2/1)
  - 11層 黒色土 (10YR2/1)

- SK (F) 58
- 1層 黒色土 (2.5YR3/1)
  - 2層 黒褐色土 (10YR3/2) 地山多量混入
  - 3層 黒褐色土 (10YR2/2)
  - 4層 黒褐色土 (10YR2/2)

- SK (F) 66
- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)
  - 2層 黒褐色土 (10YR3/2) 地山多量混入

- SK (F) 55
- 1層 暗褐色土 (10YR3/3)
  - 2層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物多量混入
  - 3層 黒褐色土 (10YR3/1)
  - 4層 黒褐色土 (10YR2/2) 地山多量混入
  - 5層 黒褐色土 (10YR2/3)

- SK (F) 56
- 1層 暗褐色土 (10YR3/3)
  - 2層 黒褐色土 (10YR2/2)
  - 3層 暗褐色土 (2.5YR3/3) 地山多量混入
  - 4層 暗褐色土 (2.5YR2/2) 炭化物混入
  - 5層 黒褐色土 (10YR3/2)
  - 6層 黒色土 (10YR2/1) 炭化物混入
  - 7層 黒褐色土 (10YR2/2)

- SK (F) 59
- 1層 黒色土 (10YR1.7/1)
  - 2層 黒色土 (10YR1.7/1)
  - 3層 黒褐色土 (10YR2/2)
  - 4層 黒褐色土 (10YR3/2)
  - 5層 黒褐色土 (10YR1.7/1)
  - 6層 黒褐色土 (10YR3/2)

0 2m

第20図 フラスコ状土壌実測図(3)

**第55号フラスコ状土壙** (第20区、第26図32、第28図24・26)

調査区北西部 Z L-86 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。口縁部径は70×76cm、底部径130cmで、深さは108cmを測る。115号ピットと重複し、本遺構が古い。堆積土は11ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壙内より縄文時代後期前葉の土器破片36点、凹石(磨石としても使用されている)1点、耳飾り1点が出土した。

**第56号フラスコ状土壙** (第20区、第26図33、第28図27)

調査区北西部 Z L-86、87 グリッド・Ⅳ層上面で確認した。口縁部径は90×90cm、底部径は160cmで、深さは114cmである。堆積土は7ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壙内より縄文時代後期前葉の土器破片55点、播器1点の出土があった。

**第57号フラスコ状土壙** (第20区、第26図34・35、第28図28)

調査区北西部 Z L-86 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。口縁部径は98×98cm、底部径170cmで、深さは130cmである。21号、98号ピットと重複し、本遺構はいずれより古い。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内出土遺物は縄文時代後期前葉の上層破片36点、鐔形土製品1点である。

**第58号フラスコ状土壙** (第20区、第26区36-38、第28図29)

調査区北西部 Z J-85、86 グリッド・Ⅲd 層下面で確認した。口縁部径は76×70cm、底部径は160cmで、深さは100cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文時代後期前葉の土器破片66点、石匙1点の出土があった。

**第59号フラスコ状土壙** (第20区)

調査区北西部 Z K-87 グリッド・Ⅳ層上面で確認した。口縁部径は78×70cm、底部径126cmで、深さは84cmである。14号ピットと重複し、本遺構が古い。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は、縄文時代後期と考えられる。

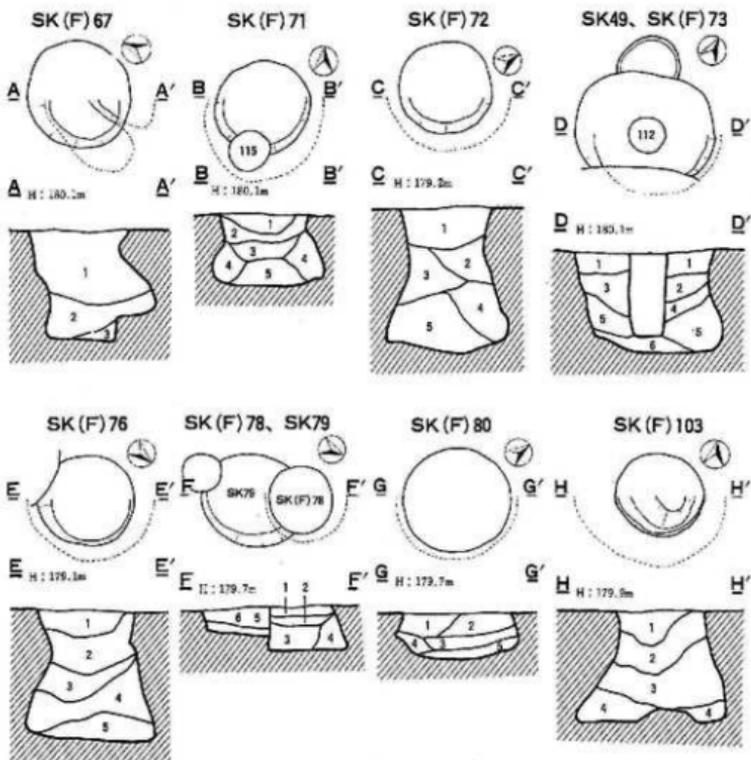
**第61号フラスコ状土壙** (第20区)

調査区北西部 Z K-87 グリッド・Ⅳ層上面で確認した。口縁部径は56×50cm、底部径は72cmである。

土壙内より縄文時代後期前葉の土器破片13点の出土があった。

**第63号フラスコ状土壙** (第30区)

調査区北西部 Z J-87 グリッド・Ⅳ層上面で確認した。40号フラスコ、41号土壙と重複し、本遺構は41号土壙より新しく、40号フラスコより古い。口縁部径、底部径の詳細は不明である。



- SK(F) 67  
 1層 黒褐色土 (10YR2/2)  
 2層 黒色土 (10YR2/1)  
 3層 黒色土 (10YR2/1) シラス混入

- SK(F) 73  
 1層 黒褐色土 (10YR2/2)  
 2層 におい黄褐色土 (10YR4/3)  
 3層 黒褐色土 (10YR2/2)  
 4層 黒色土 (10YR2/1)  
 5層 黒褐色土 (10YR2/2) 地山混入  
 6層 赤褐色土 (10YR2/2)

- SK(F) 80  
 1層 赤色土 (10YR2/1)  
 2層 赤色土 (10YR2/1) 炭化物混入  
 3層 赤色土 (10YR2/1)  
 4層 赤色土 (10YR2/1) 炭化物混入  
 5層 赤褐色土 (10YR2/2)

- SK(F) 71  
 1層 赤色土 (10YR2/1)  
 2層 赤色土 (10YR1.7/1) 炭化物混入  
 3層 赤色土 (10YR1.7/1)  
 4層 赤褐色土 (10YR2/2) 焼土混入  
 5層 赤褐色土 (10YR2/2)  
 6層 赤色土 (10YR1.7/1)

- SK(F) 76  
 1層 赤褐色土 (10YR2/3)  
 2層 赤褐色土 (10YR2/2) 地山多量混入  
 3層 赤褐色土 (10YR2/3)  
 4層 赤褐色土 (10YR2/2) 焼土混入  
 5層 赤褐色土 (10YR3/1)

- SK(F) 103  
 1層 赤色土 (10YR2/1)  
 2層 赤色土 (10YR1.7/1) 炭化物混入  
 3層 赤色土 (10YR1.7/1)  
 4層 黒褐色土 (10YR2/2) シラス多量混入

- SK(F) 72  
 1層 赤褐色土 (10YR2/2)  
 2層 赤色土 (10YR2/1)  
 3層 赤色土 (10YR1.7/1)  
 4層 赤色土 (10YR1.7/2) 軟弱  
 5層 赤色土 (10YR1.7/1) シラス混入

- SK(F) 78 - SK79  
 1層 赤褐色土 (10YR2/1)  
 2層 赤褐色土 (10YR2/1)  
 3層 赤褐色土 (10YR2/1) 炭化物混入  
 4層 赤褐色土 (10YR2/2) 地山多量混入  
 5層 赤褐色土 (10YR2/1) 地山多量混入  
 6層 赤褐色土 (10YR2/1)

0 2m

第21図 フラスコ状土坑実測図(4)

が、深さは150cmである。残存する堆積土は5ブロックに分けられ、人為堆積と考えられる。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器片8点が出土した。

**第66号フラスコ状土壌** (第20図、第26図39)

調査区北西部Z K、Z L-85グリッド・IV層上面で確認した。口縁部径は78×76cm、底部径は90cmで、深さは38cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片14点、剥片1点が出土した。

**第67号フラスコ状土壌** (第21図、第26図40、第28図30)

調査区北西部Z K、Z L-85グリッド・IV層上面で確認した。口縁部径は114×110cm、底部径は112cmを測る。底面は二段構造で、西側の低い面までの深さは114cmで、高い面までの深さは90cmである。76号フラスコ状土壌と重複し、本遺構が新しい。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内出土遺物は縄文時代後期前葉の土器破片10点、播器1点である。

**第71号フラスコ状土壌** (第21図、第28図31)

調査区北西部Z L、Z M-85グリッド・III層上面で確認した。口縁部径は104×96cm、底部径は114cmで、深さは76cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内出土遺物は縄文時代後期前葉の土器破片12点、剥片1点である。

**第72号フラスコ状土壌** (第21図、第26図41・42)

調査区北西部Z L、Z M-84、85グリッド・III層上面で確認した。口縁部径は100×98cm、底部径は130cmを測り、深さは156cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片38点、剥片1点の出土があった。

**第73号フラスコ状土壌** (第21図、第28図32)

調査区北西部Z J、Z K-86、87グリッド・III層上面で確認した。口縁部径は148cmで、底部径は156cmを測り、深さは106cmである。49号土壌、112号ピットと重複し、本遺構49号土壌より新しく、112号ピットより古い。堆積土は6ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の深鉢形土器1個体と大型の凹石とみられるものが1点出土した。

**第75号フラスコ状土壌** (第22図、第23図9、第26図43)

調査区北西部のZ J-87グリッド・IV層上面での確認である。105号フラスコ状土壌、62号土壌、63号土壌、100号土壌、63号ピットと重複し、本遺構は105号フラスコ状土壌、62号土壌、63号土壌より新しく、100号土壌、63号ピットよりは古い。口縁部径は不明であるが、底部径は160cmで、深さは180cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片30点、播器1点、剥片1点が出土した。

**第76号フラスコ状土壌** (第21図、第26図44・45)

調査区北西端のZL-85グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径は104cm×96cm、底部径は136cm、深さは140cmである。67号フラスコ状土壌と重複し、本遺構が古い。堆積土は5ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片31点、剥片1点の出土があった。

#### 第78号フラスコ状土壌 (第21図)

調査区北西端のZM-84グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径は74×68cmで、底部径は88cmを測り、深さは48cmである。79号土壌と重複し、本遺構が新しい。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より、構築時期は縄文時代後期と考えられる。

#### 第80号フラスコ状土壌 (第21図、第26図46)

調査区北西端のZM-83グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径は116×112cm、底部径130cm、深さは48cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片7点が出土した。

#### 第103号フラスコ状土壌 (第21図、第26図47、第28図33)

調査区北西部のZ1-86、87グリッド・Ⅲd層下面での確認である。口縁部径は96×90cmで、底面は大きな起伏をもち、底径は164cmを測り、深さは120cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片13点、土器片利用土製品1点の出土があった。

#### 第105号フラスコ状土壌 (第22図)

調査区北西部のZJ-87グリッド・Ⅳ層上面での確認である。75号フラスコ状土壌、62号土壌、100号土壌、ピットと重複し、本遺構はいずれの遺構より古い。深さは92cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内出土遺物は、縄文時代後期前葉の深鉢形土器1個体、土器破片243点、播点9点、三脚土製品1点、土器片利用土製品2点である。45は土器破片を研磨して成形してある。

#### 第108号フラスコ状土壌 (第22図、第24図11、第26図50・51、第28図46・47)

調査区北東部のZF-89、グリッド・Ⅲd層上面で確認した。口縁部径は140×140cmで、底部径は184cmで、深さは168cmである。堆積土は6ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の深鉢形土器1個体、土器破片76点、播器1点、土器片利用土製品1点が出土した。

#### 第109号フラスコ状土壌 (第22図)

調査区北西部のZL-85、86グリッド・Ⅲd層下面での確認である。口縁部径は80×76cmで、

底部径は136cmを測り、深さは140cmである。35号ピットと重複し、本遺構が古い。堆積土は3ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、構築時期は周辺出土遺物および確認面より、縄文時代後期と考えられる。

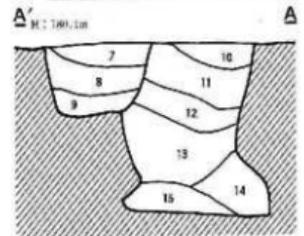
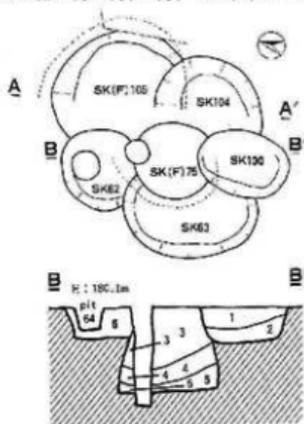
### 第110号フラスコ状土壌 (第22図)

調査区北西部の乙L-86グリッド・Ⅲd層下面での確認である。口縁部径は66×64cmで、底部径は74cmを測り、深さは66cmと小規模なフラスコ状土壌である。堆積土は4ブロックに分けられ、人為堆積である。

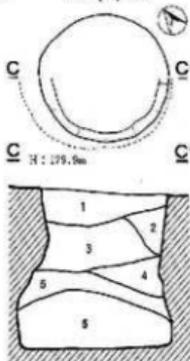
土壌内より遺物は出土しなかったが、構築時期は周辺出土遺物および確認面より、縄文時代後期と考えられる。

(花海 義人)

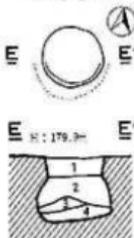
SK62・63・100・104 SK(F)75・105



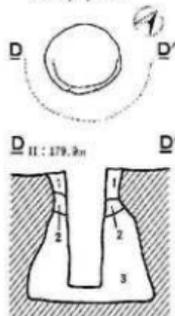
SK(F)108



SK(F)110



SK(F)109



- SK62・63・100・104・SK(F)75・108
- 1層 土壌(黄褐色土) (10YR6/3)
  - 2層 暗褐色土 (10YR3/3)
  - 3層 土壌(黄褐色土) (10YR6/3)
  - 4層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 5層 土壌(黄褐色土) (10YR6/3)
  - 6層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 7層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 8層 土壌(10YR6/3)
  - 9層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 10層 土壌(10YR6/3)
  - 11層 土壌(黄褐色土) (10YR6/3)
  - 12層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 13層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 14層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 15層 黄褐色土 (10YR6/3)

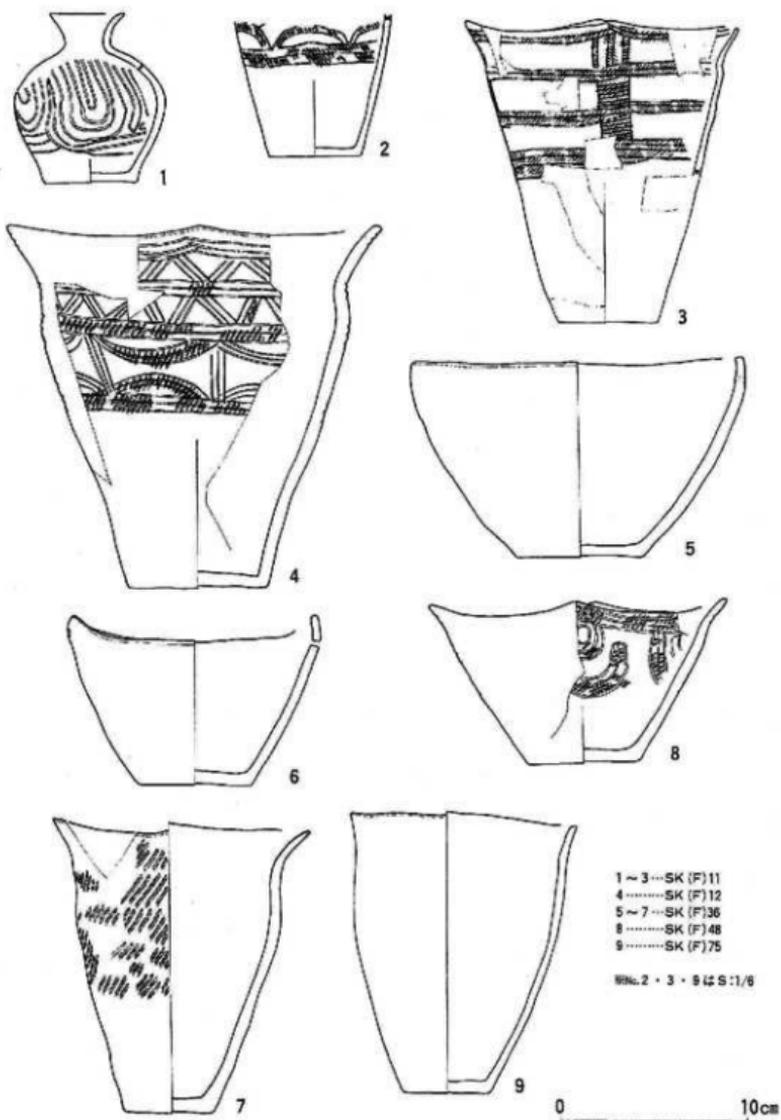
- SK(F)75
- 1層 土壌(10YR6/3)
  - 2層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 3層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 4層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 5層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 6層 黄褐色土 (10YR6/3)

- SK(F)108
- 1層 土壌(10YR6/3)
  - 2層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 3層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 4層 黄褐色土 (10YR6/3)

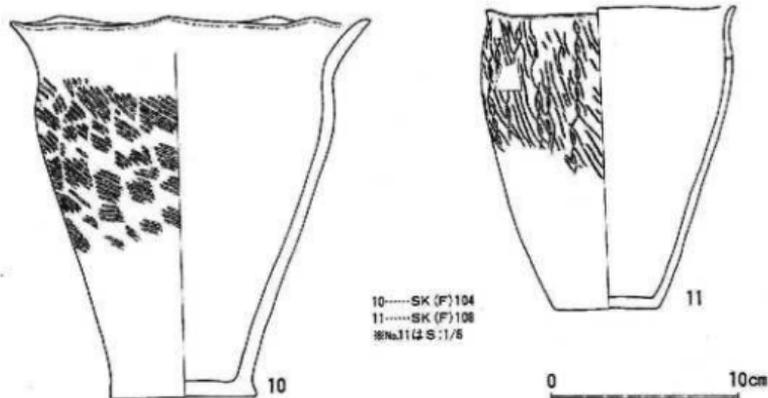
- SK(F)110
- 1層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 2層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 3層 黄褐色土 (10YR6/3)
  - 4層 黄褐色土 (10YR6/3)

第22図 フラスコ状土壌実測図(5)

0 2m



第23図 フラスコ状土壺出土遺物(1)



第24図 フラスコ状土壙出土遺物(2)

### (3) 土 壙

#### 第03号土壙 (第29図)

調査区南部のZD・ZE-82グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は114×76cmの楕円形で、長軸方向はN-62°E、深さは40cmを測る。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より遺物は出土しなかったが確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

#### 第04号土壙 (第29図)

調査区南部のZD-82グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面プランは110×64cmの楕円形で、長軸方向はN-26°E、深さは14cmを測る。堆積土は地山が混入した黒色土の単一層で、人為堆積である。

土壙内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

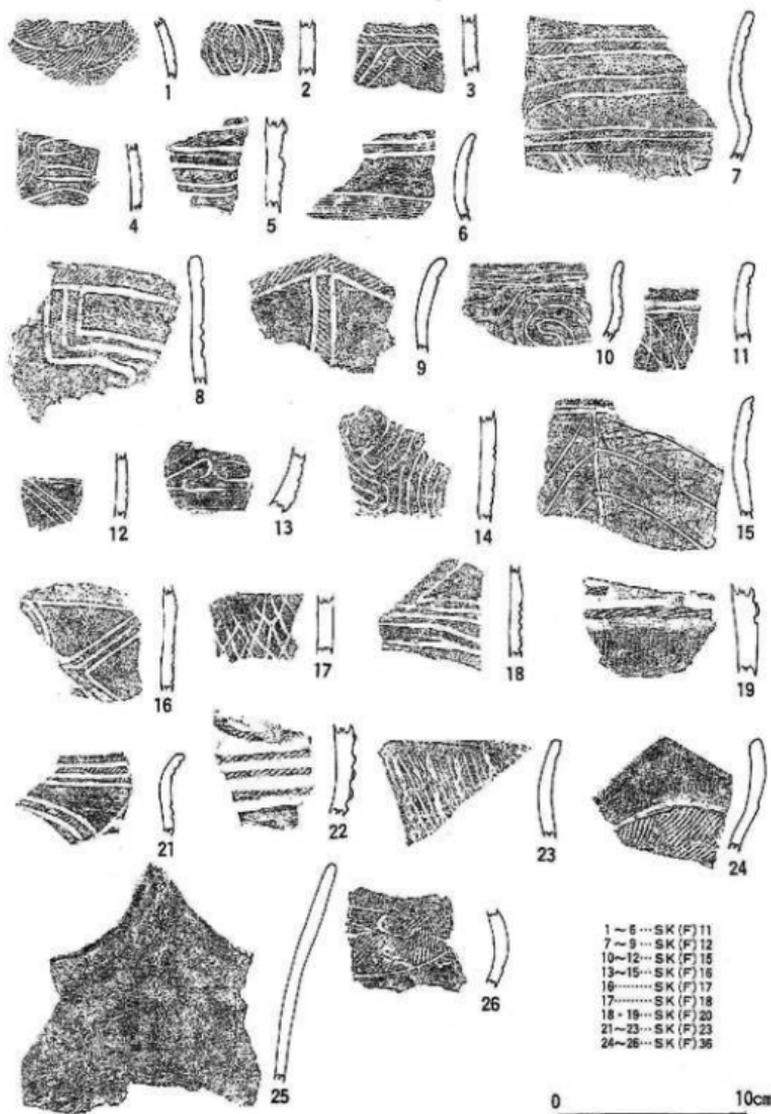
#### 第05号土壙 (第29区、35図1)

調査区東部のZC-93グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第8号土壙と重複、本遺構が新しい。平面形は150×122cmの楕円形で、長軸方向はN-49°W、深さは28cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

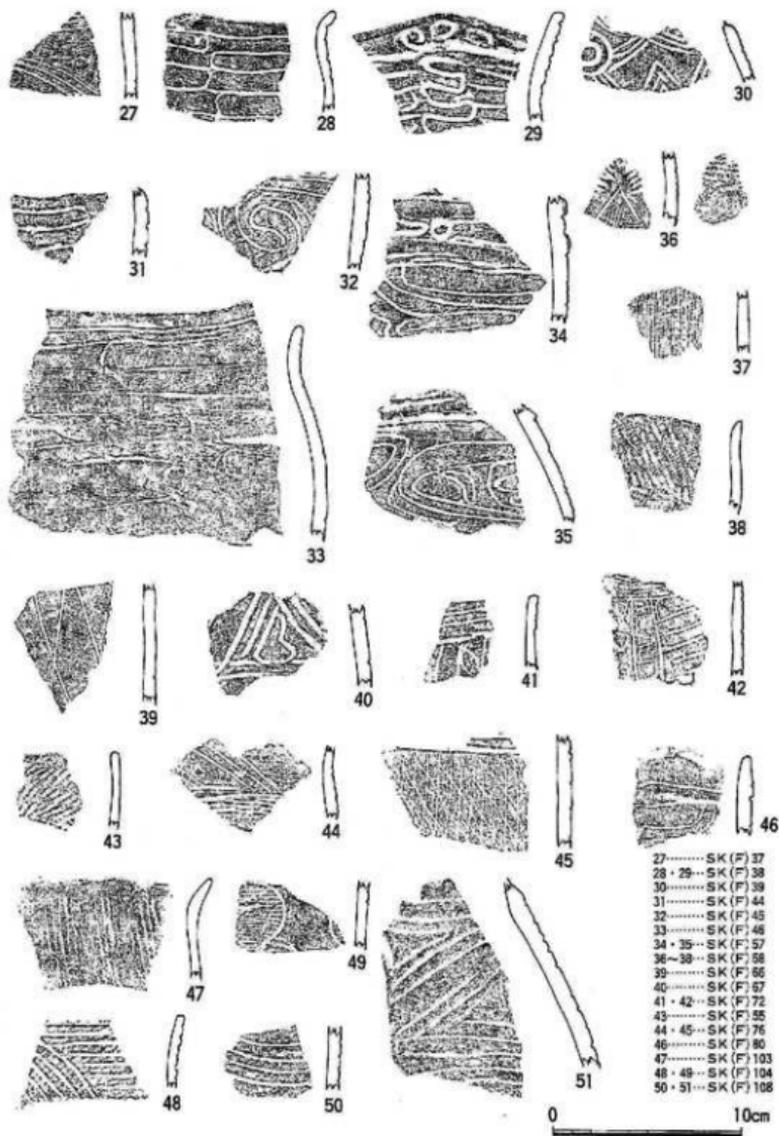
土壙内より縄文時代後期の土器破片5点の出土があった。

#### 第07号土壙 (第29区、35図2、37図1)

調査区東部のZC-92グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は156×114cmの楕円形で、

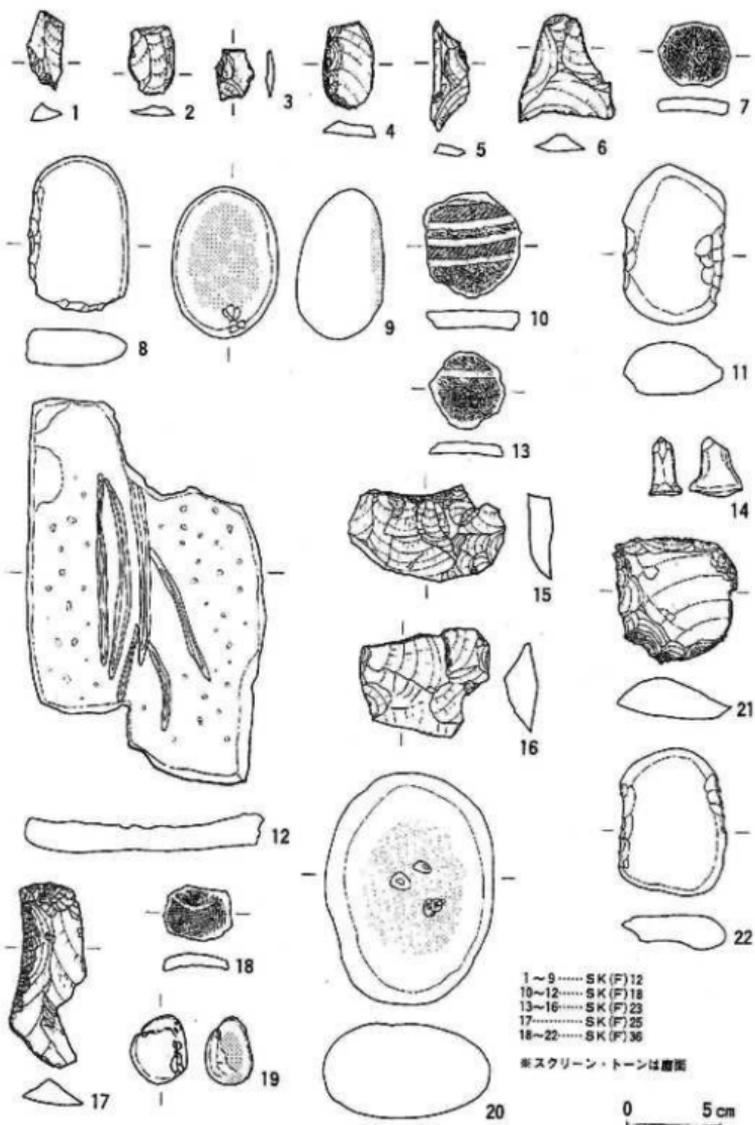


第25図 フラスコ状土壘出土遺物(3)

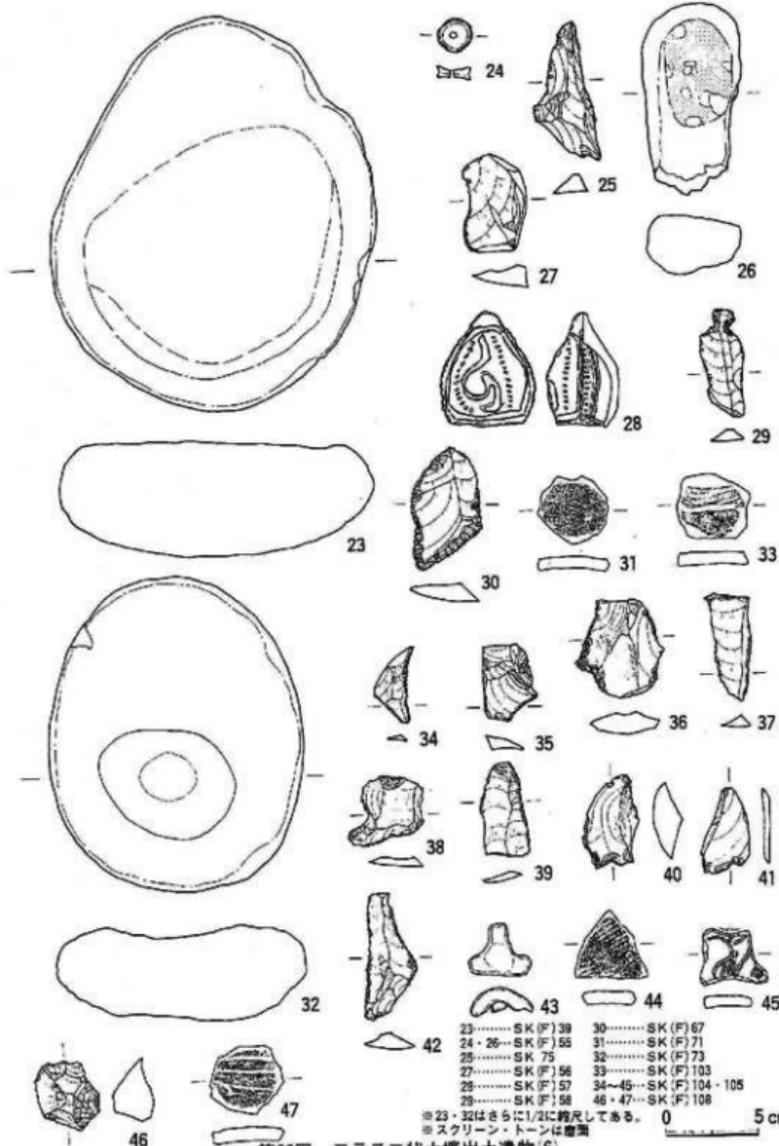


- 27.....SK (F) 37
- 28 + 29...SK (F) 38
- 30.....SK (F) 39
- 31.....SK (F) 44
- 32.....SK (F) 45
- 33.....SK (F) 48
- 34 + 35...SK (F) 57
- 36~38...SK (F) 58
- 39.....SK (F) 66
- 40.....SK (F) 67
- 41 + 42...SK (F) 72
- 43.....SK (F) 95
- 44 + 45...SK (F) 76
- 46.....SK (F) 80
- 47.....SK (F) 103
- 48 + 49...SK (F) 104
- 50 + 51...SK (F) 108

第26図 フラスコ状土横出土遺物(4)



第27図 フラスコ状土壌出土遺物(5)



第28図 フラスコ状土壙出土遺物(6)

長軸方向はN-32°-W、深さは56cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片22点、搔器1点の出土があった。

#### 第08号土壌 (第29図)

調査区東部のZ C-93グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第5号土壌と重複、本遺構が古い。平面形は第5号土壌との重複により不明である。長軸方向はN-49°-W、深さは28cmを測る。残存する堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第09号土壌 (第29区、35図3)

調査区東部のZ A-92、93グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は88×84cmの円形で、底面は二段構造で、深さは浅い面が72cm、深い面が102cmを測る。堆積土は9ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片27点の出土があった。

#### 第10号土壌 (第29図)

調査区中央部のZ D-87グリッド・Ⅲd層上面での確認である。平面形は130×128cmの円形、深さは136cmを測る。堆積土は10ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第19号土壌 (第29図、35図4～6、37図8・9)

調査区北部のZ H-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第18号フラスコ状土壌と重複し、本遺構が古い。第18号フラスコ状土壌との重複により長軸は不明であるが、短軸が136cmの楕円形と考えられ、長軸方向はN-88°-E、深さは42cmを測る。残存する堆積土は5ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片66点、石鏃1点、搔器1点の出土があった。

#### 第21号土壌 (第29図、35図8～12、34図1、37図10～15)

調査区北部のZ G、Z H-91グリッド・Ⅲd層上面での確認である。第18号フラスコ状土壌および第22号土壌と重複、第18号フラスコ状土壌より本遺構が新しく、第22号土壌より本遺構が古い。短軸が196cmの楕円形と考えられ、長軸方向はN-61°-Eと推定され、深さは48cmを測る。残存する堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の深鉢形土器1点、土器破片374点、石鏃1点、搔器3点、石皿1点、凹石1点、剥片3点の出土があった。

#### 第22号土壌 (第29図、35図8～12、34図1、37図10～15)



調査区北部のZ G、Z H-91グリッド・Ⅲd層上面確認した。第21号土壌と重複、本遺構が新しい。平面形は186×136cmの楕円形で、長軸方向はN-75°-Wで、深さは36cmを測る。堆積土は黒褐色土の単一層で、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片7点、凹石1点の出土があった。

#### 第24号土壌（第30図、第35図13・14）

調査区北部のZ I、Z J-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第26号土壌と重複、本遺構が新しい。平面形は142×138cmの円形、深さは42cmを測る。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片12点の出土があった。

#### 第26号土壌（第30図、37図17・18）

調査区北部のZ I、Z J-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第24号土壌と重複、本遺構が古い。径が120cmの円形プランである。底面北側に落ち込みがあり、深い部分が158cmで、浅い部分は138cmを測る。残存する堆積土は10ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片45点、搔器（アスファルト付）1点、剥片4点の出土があった。

#### 第29号土壌（第30図、第34図2・3、第35図17~19、第38図19・20）

調査区北東部のZ G-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は186×168cmの楕円形、長軸方向はN-38°-E、深さは28cmを測る。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の壺形土器1点、深鉢形土器1点、土器砂片73点、搔器1点、石皿1点、剥片2点の出土があった。

#### 第30号土壌（第30図、第35図20）

調査区北東部のZ G-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は88×82cmの円形で、深さは30cmを測る。堆積土は黒褐色土の単一層で、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片7点の出土があった。

#### 第31号土壌（第30図、第35図21、第38図21）

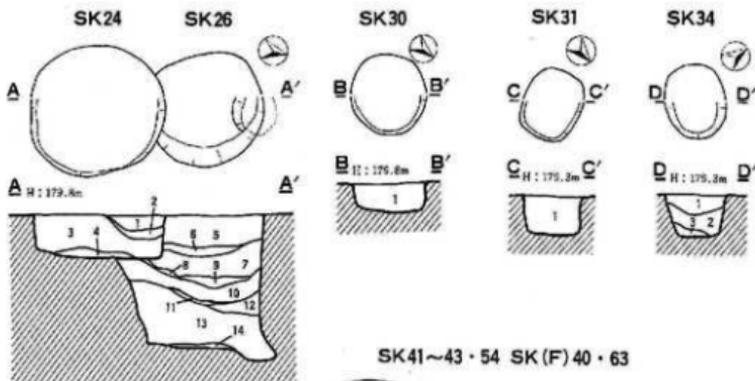
調査区北東部Z F-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は76×64cmの円形、深さは42cmを測る。堆積土は黒色土の単一層で、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片3点、搔器1点の出土があった。

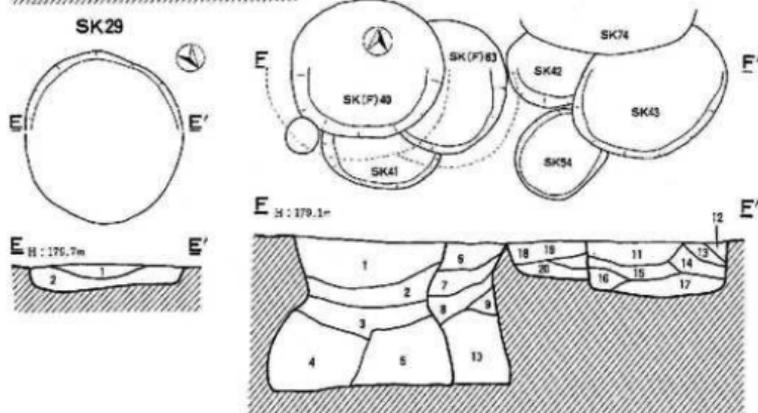
#### 第34号土壌（第30図、第35図22）

調査区北東部Z G-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は80×66cmの円形、深さは46cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片7点の出土があった。



SK41~43・54 SK(F)40・63



- SK24・26
- 1層 黒褐色土(10YR3/1)
  - 2層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 3層 黒褐色土(10YR3/1)
  - 4層 黒色土(10YR2/1)
  - 5層 黒色土(10YR2/1)
  - 6層 黒褐色土(10YR3/2)
  - 7層 黒色土(10YR2/1)

- 8層 暗赤褐色土(10YR3/3)
- 9層 黒褐色土(10YR3/2)
- 10層 褐色土(10YR2/1)
- 11層 黒褐色土(10YR2/2)
- 12層 無色土(10YR2/1)
- 13層 無色土(10YR2/1) 粘土質
- 14層 無色土(10YR2/1)
- 14層 無色土(10YR2/1) シラス混入

- SK25
- 1層 黒褐色土(10YR3/2)
  - 2層 黒褐色土(10YR3/2)
- SK30
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)

- SK31
- 1層 黒色土(10YR2/1)
- SK34
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 2層 黒色土(10YR2/1)
  - 3層 赤褐色土(10YR2/2)

- SK(F)40・63, SK42・43
- 1層 濃い黄褐色土(10YR6/3)
  - 2層 黒褐色土(10YR3/2)
  - 3層 灰黄褐色土(10YR4/2)
  - 4層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 5層 黒色土(10YR2/1)
  - 6層 濃い黄褐色土(10YR4/3)
  - 7層 暗褐色土(10YR3/3)
  - 8層 暗褐色土(10YR3/4)
  - 9層 無色土(10YR2/1)
  - 10層 黄褐色土(10YR3/6)

- 11層 黒褐色土(10YR2/2)
- 12層 黄褐色土(10YR5/5)
- 13層 黒褐色土(10YR3/2)
- 14層 明黄褐色土(10YR5/6)
- 15層 黒褐色土(10YR2/2)
- 16層 黒褐色土(10YR3/2)
- 17層 黒色土(10YR2/1)
- 18層 褐色土(10YR4/4)
- 19層 褐色土(10YR4/6)
- 20層 黒褐色土(10YR2/2)

- SK45・46
- 1層 黒褐色土(10YR2/3) シラス混入
  - 2層 黒褐色土(10YR2/3)
  - 3層 黒褐色土(10YR2/2)
  - 4層 暗褐色土(10YR3/3)
  - 5層 暗褐色土(10YR3/1)
  - 6層 黒色土(10YR2/1)
  - 7層 暗褐色土(10YR2/3) シラス混入

0 2m

第30図 土壌実測図(2)

#### 第41号土壌 (第30図)

調査区北西部 Z J-86 グリッド・IV 層上位で確認した。第40号フラスコ状土壌および第63号フラスコ状土壌と重複、本遺構が一番古い。平面形は第40号フラスコ状土壌および第63号フラスコ状土壌との重複により不明である。確認されるプランから長軸方向は N-89° E と推定される。深さ、堆積土等は不明である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第42号土壌 (第30図)

調査区北西部 Z J-86 グリッド・IV 層上面で確認した。第43号土壌および第74号土壌と重複、本遺構がいずれより古い。確認されるプランから長軸方向は N-24° E と推定され、深さは42 cm を測る。残存する堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第43号土壌 (第30図)

調査区北西部 Z J-86 グリッド・IV 層上面で確認した。第42号土壌、第54号土壌、第74号土壌と重複、第42号土壌および第54号土壌より本遺構が新しく、第74号土壌より本遺構が古い。平面形は第74号土壌との重複により短軸は不明であるが、長軸は174 cm を測る。長軸方向は N-35° E、深さは58 cm である。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第45号土壌 (第31図、第34図5)

調査区北西部 Z K-86、87 グリッド・IV 層上面で確認した。第46号土壌、第47号土壌、ビット17と重複、本遺構が一番古い。短軸が96 cm の楕円形と考えられ、長軸方向は N-65° E と推定される。深さは30 cm を測る。残存する堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

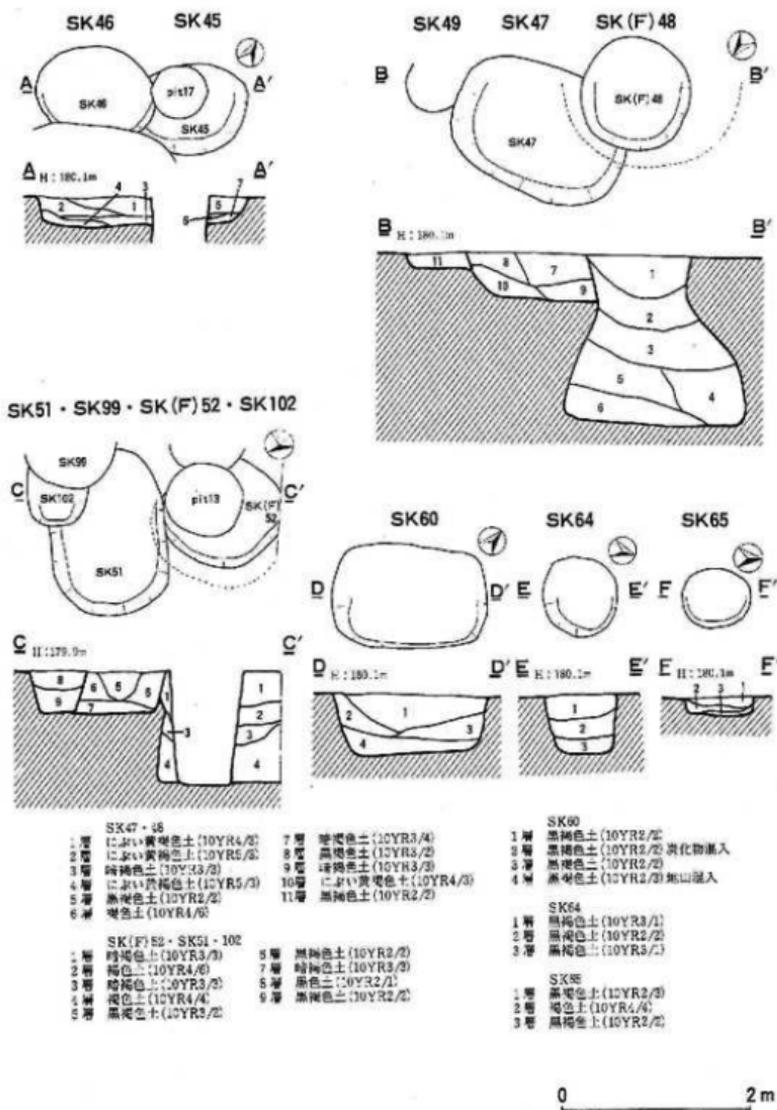
土壌内より縄文時代後期前葉の壺形土器1点が出土した。

#### 第46号土壌 (第31図、第35図23・24)

調査区北西部 Z K-86、87 グリッド・IV 層上面で確認した。第45号土壌、第47号土壌、ビット17と重複し、本遺構は第45号土壌より新しく、第47号土壌およびビット17より古い。平面形は長軸が130 cm の楕円形と考えられ、長軸方向は N-80° E、深さは32 cm を測る。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片19点の出土があった。

#### 第47号土壌 (第31図、第35図23、24)



第31図 土壌実測区3)

調査区北西部 Z K-86 グリッド・IV 層上面で確認した。第45号土壌、第46号土壌、第48号フラスコ状土壌、第49号土壌と重複し、本遺構は第45号土壌、第46号土壌、第49号土壌より新しく第48号フラスコ状土壌より古い。平面形は188×138cmの楕円形で、長軸方向は N-81° E、深さは48cmを測る。残存する堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の深鉢形土器1点、土器破片31点、凹石1点の出土があった。

#### 第49号土壌 (第31図)

調査区北西部 Z K-86、87 グリッド・IV 層上面で確認した。第47号土壌と重複、本遺構が古い。平面形は径が60cmの円形プランで、深さは16cmを測る。堆積土は黒褐色土の単一層で、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第51号土壌 (第31図、第38図39)

調査区北西部の Z K-87 グリッド・IV 層上面で確認した。第99号土壌、第102号土壌、第52号フラスコ状土壌と重複、本遺構は第52号フラスコ状土壌より新しく、第99号土壌、第102号土壌より古い。平面形は176×122cmの楕円形で、長軸方向は N-78° E、深さは44cmを測る。残存する堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器片利用土製品1点、剥片2点の出土があった。

#### 第54号土壌 (第30図)

調査区北西部の Z J-86 グリッド・IV 層上面で確認した。第43号土壌と重複、本遺構が古い。平面形は、径が90cmの円形プランである。なお、堆積土・深さ等は不明である。

構築時期は、確認面および周辺出土遺物より縄文後期と考えられる。

#### 第60号土壌 (第31図、第35図28・29、第38図24)

調査区北西部の Z I、Z J-86、87 グリッド・IV 層上面で確認した。平面形は164×112cmの楕円形で、長軸方向は N-49° E、深さは64cmを測る。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片18点、石錘1点、剥片2点の出土があった。

#### 第62号土壌 (第22図、30図、35図)

調査区北西部 Z J、Z K-87 グリッド・IV 層上面で確認した。ビット63、ビット64、第63号土壌、第75号フラスコ状土壌と重複、本遺構が一番古い。平面形は、径が88cmの円形プランで深さは32cmを測る。残存する堆積土は、褐色土の単一層で、人為堆積である。

本土壌及び重複する63号土壌より、合計8点の縄文時代後期前葉の土器破片が出土した。

#### 第63号土壌 (第22図)

調査区北西部 Z J-87 グリッド・IV 層上面で確認した。第62号土壌、第75号フラスコ状土壌第100号土壌と重複、本遺構は第62号土壌より新しく、第75号フラスコ状土壌および第100号土壌より古い。確認されるプランから長軸が144cmの楕円形と考えられ、長軸方向は N-12°-W で、深さ、堆積土等は不明である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片が第62号土壌と合わせて8点の出土があった。

#### 第64号土壌 (第31図)

調査区北西部 Z K-87 グリッド・IV 層上面で確認した。平面形は86×80cmの円形、深さは64cmを測る。堆積土は3ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より遺物の出土はなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第65号土壌 (第31図)

調査区北西部 Z K-86・IV 層上面で確認した。平面形は74×64cmの円形で、深さは20cmを測る。堆積土は3ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片12点の出土があった。

#### 第68号土壌

調査区北西部 Z K-84 グリッド・III d 層上面で確認した。平面形は280×128cmの楕円形で、長軸方向は N-77°-E、深さは70cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片186点、播磨3点、剥片2点、土器片利用土製品2点の出土があった。

#### 第69号土壌 (第32図、第36図34・35、第38図30~33・35)

調査区西部 Z I-85 グリッド・III d 層上面で確認した。第107号土壌と重複、本遺構が新しい。平面形は94×84cmの円形、深さは44cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片23点、石鏃1点、播磨3点、凹石1点が出土した。

#### 第70号土壌 (第32図、第36図36・37)

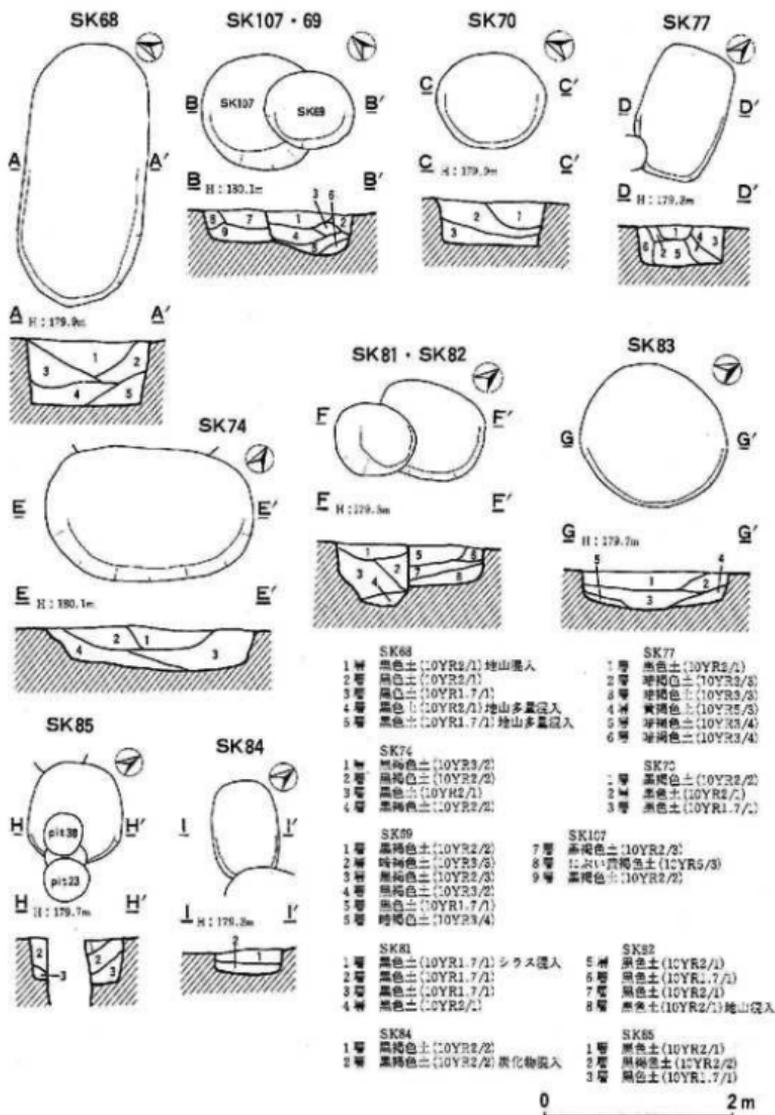
調査区北西 Z K-84 グリッド・III d 層上面で確認した。平面形は118×102cmの楕円形で、長軸方向は N-22°-W、深さは48cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片26点が出土した。

#### 第74号土壌 (第32図、第36図38)

調査区北西部 Z J-86、87 グリッド・IV 層上面で確認した。第42号土壌、第43号土壌、第73号フラスコ状土壌と重複、本遺構がいずれより新しい。平面形は220×140cmの楕円形で、長軸方向は N-61°-E、深さは41cmを測る。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片7点の出土があった。



第32図 土壌実測図(4)

#### 第77号土壌 (第32図)

調査区北西部 Z M-83 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。ビット82と重複、本遺構が古い。平面形は142×92cmの楕円形で、長軸方向は N-25°-E、深さは42cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第79号土壌 (第21図、第36図39)

調査区北西部 Z M-84 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。ビット106および第78号フラスコ状土城と重複、本遺構が一番古い。平面形は、径が100cmの円形プランで、深さは30cmを測る。残存する堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。長軸方向は N-44°-E、深さは68cmである。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片127点、凹石1点、敲石1点、土器片利用土製品1点、削片41点の出土があった。

#### 第87号土壌 (第33図)

調査区北部 Z I-89、90グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。平面形は92×82cmの楕円形で、長軸方向は N-51°-W、深さは20cmを測る。堆積土は黒色土の単一層で、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第88号土壌 (第33図、38図42)

調査区北部 Z J-90グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。平面形は112×82cmの楕円形で、長軸方向は N-57°-W、深さは58cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片31点の出土があった。

#### 第89号土壌 (第33図、38図43)

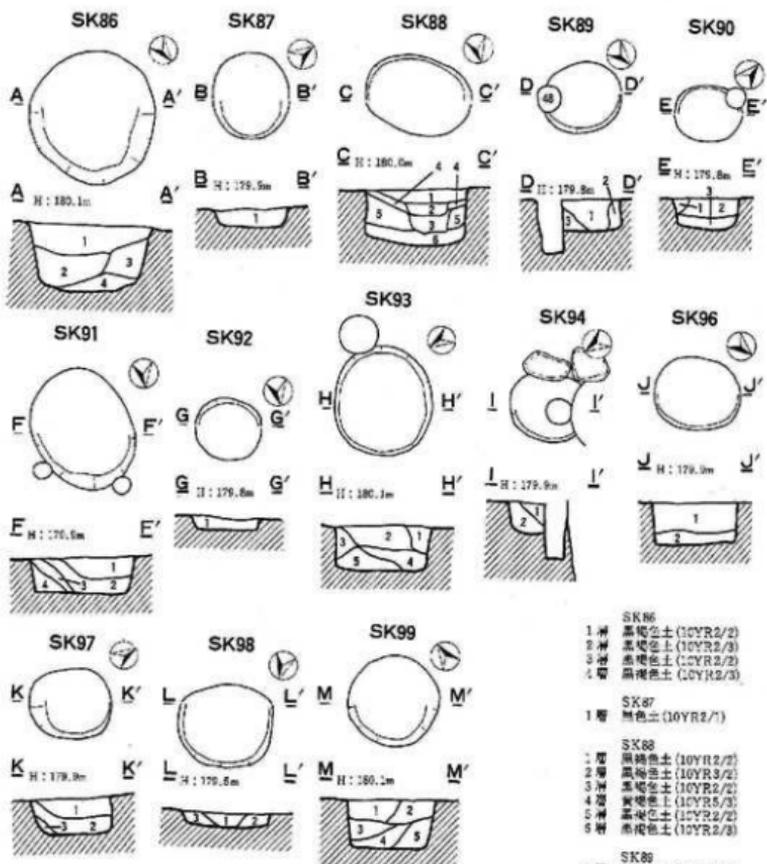
調査区北部 Z J-90グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。ビット48と重複、本遺構が古い。平面形は短軸が74cmの楕円形と考えられ、長軸方向が N-52°-W、深さが34cmを測る。残存する堆積土は3ブロックに分けられ、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片20点が出土した。

#### 第90号土壌 (第33図、36図44)

調査区北部 Z J-90グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。ビット31と重複、本遺構が古い。平面形は72×60cmの楕円形で、長軸方向が N-31°-E、深さが32cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片4点の出土があった。



- SK91  
 1層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 2層 黑褐色土 (10YR2/1)  
 3層 黑褐色土 (10YR2.7/1)  
 4層 黑褐色土 (10YR2/1)
- SK92  
 1層 黑褐色土 (10YR2/2)
- SK97  
 1層 黑褐色土 (10YR2/1)  
 2層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 3層 黑褐色土 (10YR2/1)

- SK95  
 1層 黑褐色土 (10YR2/3)  
 2層 黑褐色土 (10YR1.7/1)  
 3層 黑褐色土 (10YR2/1)  
 4層 黑褐色土 (10YR2/1)  
 5層 黑褐色土 (10YR2/2)
- SK98  
 1層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 2層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 3層 黑褐色土 (10YR2/2)

- SK96  
 1層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 2層 暗褐色土 (10YR3/3)
- SK98  
 1層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 2層 暗褐色土 (10YR3/3)

- SK99  
 1層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 2層 暗褐色土 (10YR3/3)
- SK96  
 1層 黑褐色土 (10YR2/1)  
 2層 暗褐色土 (10YR3/3)  
 3層 暗褐色土 (10YR3/3)  
 4層 暗褐色土 (10YR3/3)  
 5層 暗褐色土 (10YR3/4)

- SK86  
 1層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 2層 黑褐色土 (10YR2/3)  
 3層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 4層 黑褐色土 (10YR2/3)

- SK87  
 1層 黑褐色土 (10YR2/1)

- SK88  
 1層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 2層 黑褐色土 (10YR3/2)  
 3層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 4層 暗褐色土 (10YR5/3)  
 5層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 6層 黑褐色土 (10YR2/3)

- SK89  
 1層 黑褐色土 (10YR2/2)  
 2層 暗褐色土 (10YR3/3)  
 3層 黑褐色土 (10YR2/3)

- SK90  
 1層 暗褐色土 (10YR3/2)  
 2層 黑褐色土 (10YR2/3)  
 3層 黑褐色土 (10YR2/2)

0  2m

第33圖 土壤實測圖(5)

#### 第91号土壌 (第33図)

調査区北部 Z I-88 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。ピット102、ピット103と重複、本遺構がいずれより古い。平面形は130×104cmの楕円形で、長軸方向はN-18°-E、深さは40cmを測る。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第92号土壌 (第33図)

調査区北部 Z J-90、91 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。平面形は72×68cmの円形で、深さは20cmを測る。堆積土は黒褐色土の単一層で、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片6点が出土した。

#### 第81号土壌 (第32図、第38図36)

調査区北西部 Z L-83 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。第82号土壌と重複、本遺構が古い。平面形は、短軸が100cmの楕円形と考えられる。長軸方向はN-58°-E、深さは44cmを測る。残存する堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より第82号と合わせて縄文時代後期前葉の土器破片10点、凹石1点の出土があった。

#### 第82号土壌 (第32図、第38図36)

調査区北西部 Z L-83 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。第81号土壌と重複、本遺構が新しい。平面形は86×78cmの円形、深さは68cmを測る。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より第81号土壌と合わせて縄文時代後期前葉の土器破片10点、凹石1点が出土した。

#### 第83号土壌 (第32図)

調査区北西部 Z K、Z L-83 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。平面形は156×146cmの楕円形、長軸方向はN-71°-E、深さは40cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の土器破片4点の出土があった。

#### 第84号土壌 (第32図)

調査区北西部 Z M-84 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。第85号土壌と重複、本遺構が古い。確認されるプランから短軸が70cmの楕円形と考えられ、長軸方向はN-53°-W、深さは28cmを測る。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

**第85号土壌** (第32区、32図40・41)

調査区北西部Z M-84グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第84号土壌、ビット23、ビット38と重複、本遺構は第84号土壌より新しく、ビット23およびビット38より古い。平面形は短軸98cmの楕円形と考えられ、長軸方向はN-47°-W、深さは48cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

**第86号土壌** (第33区、38図34・37・38)

調査区北西部Z K-85グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は142×134cmの楕円形と考えられる。

**第93号土壌** (第33区)

調査区北西部Z I-85グリッド・Ⅲd層上面で確認した。ビット75と重複、本遺構が古い。平面形は118×102cmの楕円形で、長軸方向はN-56°-W、深さは50cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

**第94号土壌** (第33区)

調査区北部Z J-90グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第27号土壌およびビット33と重複、本遺構がいずれより古い。平面形は短軸が74cmの楕円形と考えられ、長軸方向がN-37°-E、深さは34cmを測る。残存する地積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

**第96号土壌** (第33区)

調査区北西部Z K-84グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は92×78cmの楕円形で、長軸方向はN-38°-W、深さは46cmを測る。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

**第97号土壌** (第33区、第34図6)

調査区北西部Z L-86グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は88×76cmの楕円形で、長軸方向はN-36°-E、深さは40cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文時代後期前葉の深鉢形土器1点の出土があった。

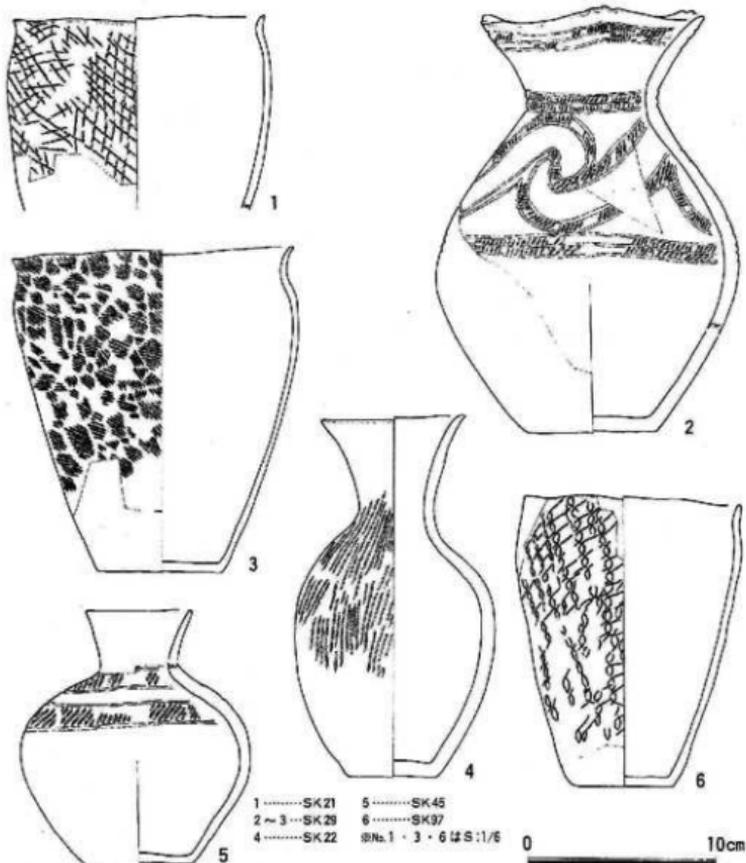
**第98号土壌** (第33区)

調査区北西部Z L-83グリッド・Ⅲd層上面で確認した。平面形は100×88cmの楕円形で、長軸方向はN-73-E、深さは16cmを測る。堆積上は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

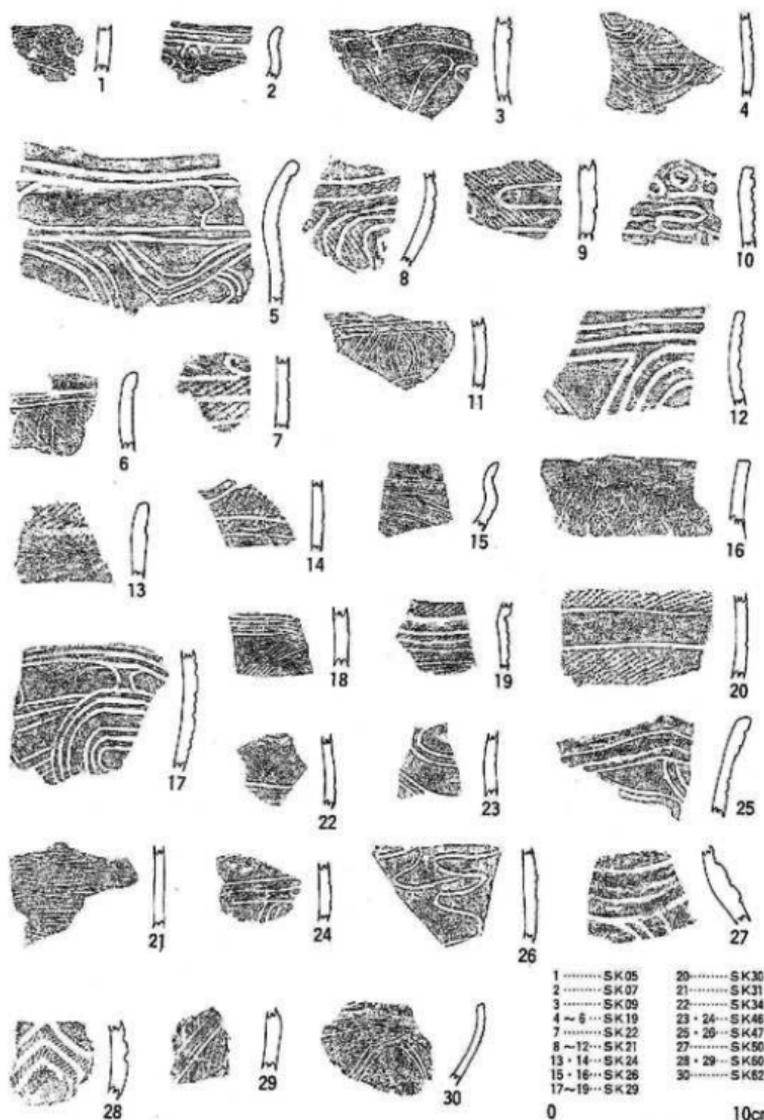
#### 第99号土壌 (第33図)

調査区北西部Z K-87グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第102号土壌、第51号土壌と重複し、本遺構がいずれよりも新しい。平面形は98×96cm円形で、深さは52cmを測る。堆積土は5プロ



1.....SK21    5.....SK45  
 2~3.....SK29    6.....SK97  
 4.....SK22    ※No.1・3・6はS:1/6

第34図 土壌出土遺物(1)



第35回 土壙出土遺物(2)

ックに区分され、人為堆積である。

土城内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第100号土壌 (第22図)

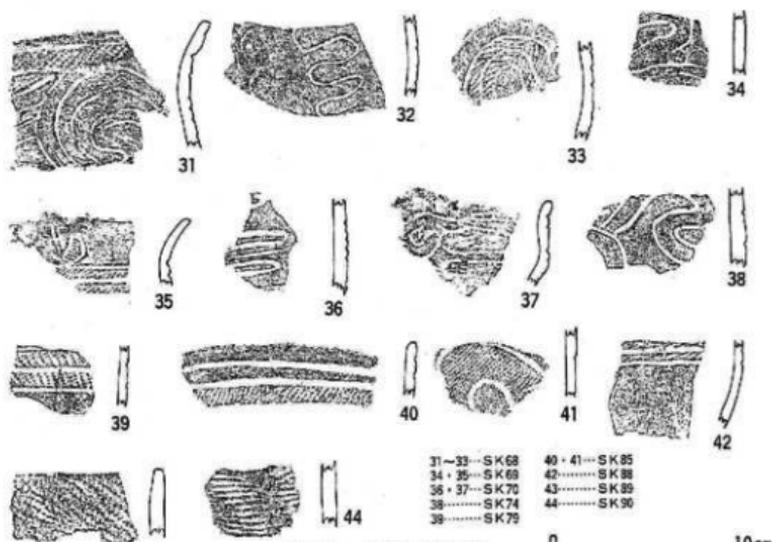
調査区北部 ZJ-88 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。第63号土壌、第105号フラスコ状土壌、第75号フラスコ土壌と重複し、本遺構がいずれよりも新しい。平面形は98×70cmの楕円形で、長軸方向はN-5°-W、深さは38cmを測る。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土城内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

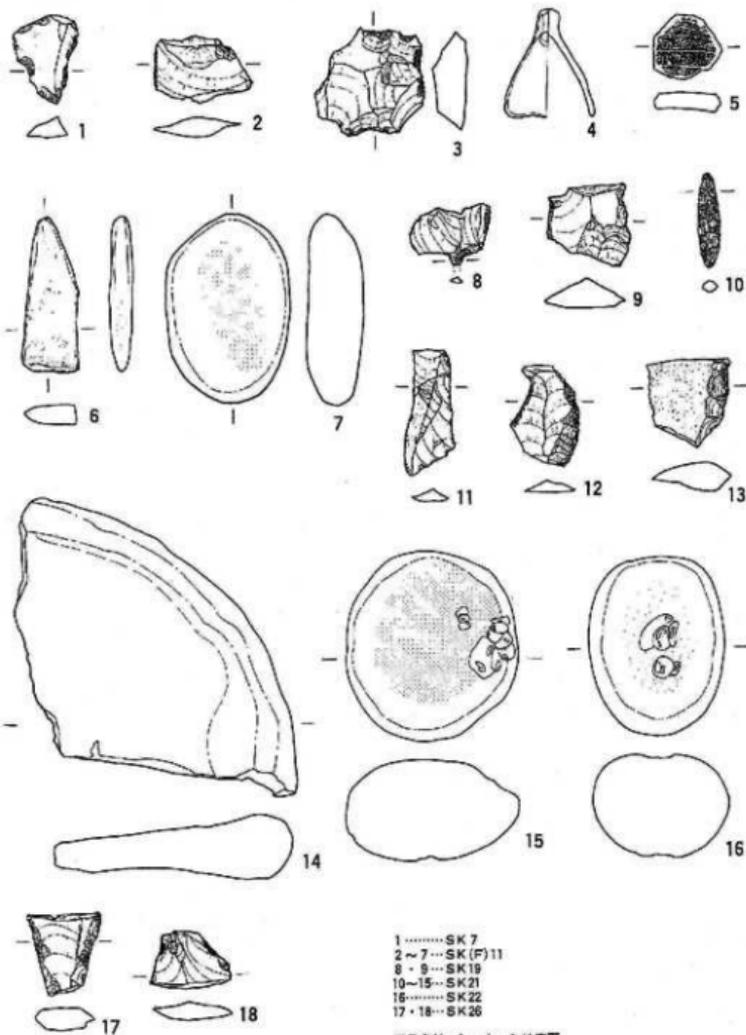
#### 第102号土壌 (第31図)

調査区北西部 ZK-87 グリッド・Ⅲd 層上面で確認した。第51号土壌、第99号土壌と重複し、本遺構は第51号土壌より新しく、第99号土壌よりは古い。平面形は短軸が66cmの楕円形と考えられ、長軸方向はN-86°-E、深さは46cmを測る。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土城内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

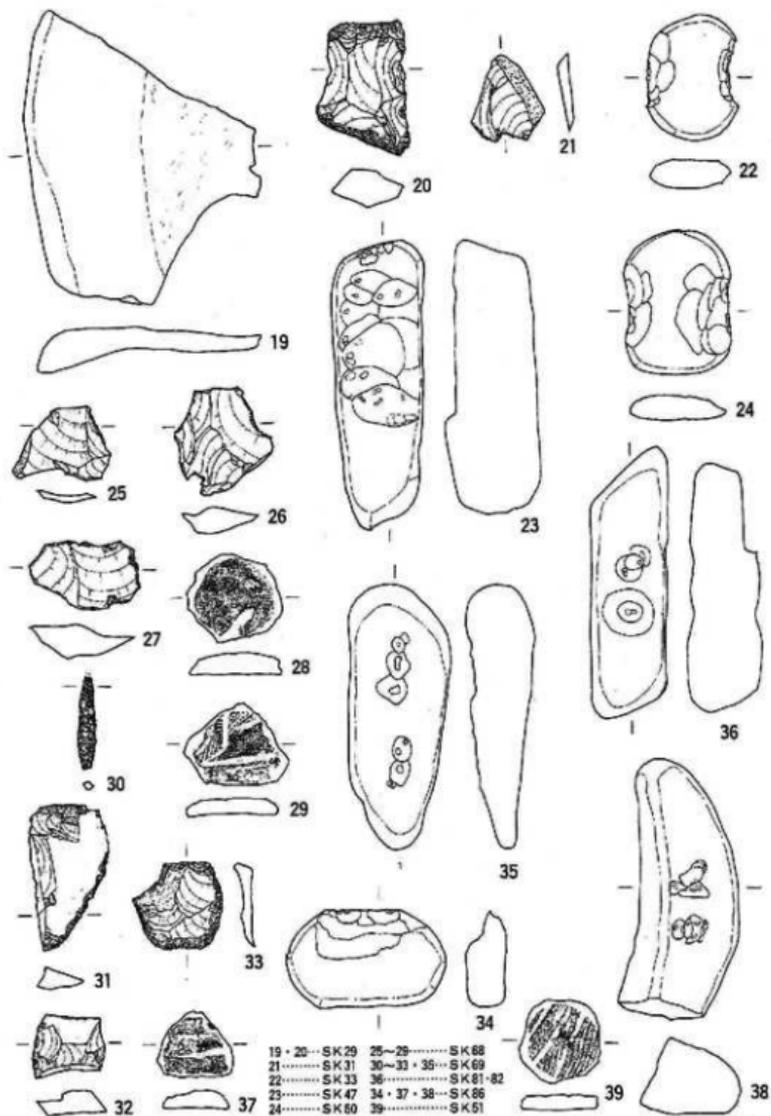


第36図 土壌出土遺物(3)



0 5 cm

第37図 土塚出土遺物(4)



第38图 土藏出土遺物(5)

#### 第104号土壌 (第22図、28図34～35)

調査区北西部ZJ-87グリッド・IV層上面で確認した。第100号土壌、第105号フラスコ状土壌、第75号フラスコ状土壌と重複し、本遺構は第105号フラスコ状土壌より新しく、第100号土壌、第75号フラスコ状土壌よりも古い。平面形は短軸が110cmの楕円形と考えられ、長軸方向はN-60°-E、深さは76cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。土壌内出土遺物は、第105号フラスコ状土壌と合わせて、縄文時代後期前葉の土器破片243点、搔器10点、剥片3点である。

#### 第106号土壌

調査区北西部ZK-84、87グリッド・III d層上面での確認である。平面プランのみの確認のため、平面形、深さ等は不明である。

確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

#### 第107号土壌 (第32図)

調査区北西部ZI-85グリッド・III d層上面での確認である。第69号土壌と重複し、本遺構が古い。平面形は短軸が124cmの楕円形と考えられ、長軸方向はN-44°-E、深さは32cmを測る。残存する堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より遺物は出土しなかったが、確認面および周辺出土遺物より構築時期は縄文後期と考えられる。

(柳沢 和仁)

### 5. 遺構外出土遺物

#### (1) 土器 (第39図～第56図)

D<sub>7</sub>区遺構外からは、62点の完形・復元土器と共にコンテナ(60×39×21cm)98箱の縄文土器破片が出土した。これらの土器は、縄文時代後期前葉の土器がその大半を占めるが、早期土器破片2点、後期中葉土器破片2箱が含まれる。第39図、40図は土器の出土状況を表したもので、万應環状列石中心より48m～72mの同心円内の遺物廃棄域(廃棄域1)と、調査区南東部の県道側に土器(石器・製品も含む)が密集し(廃棄域2)ZB・ZCラインに空白部が生じている。遺物廃棄域ごとの土器片出土量は廃棄域1(第48図～53図)＝90箱、同2(第54図～56図)＝8箱である。

土器の分類についてはこれまでと同様、時期ごとに群別し、文様・施文技法などにより細分した。なお各域で特記事項があるときはその旨を記載する。

#### 第I群土器 早期の土器

##### 1類 貝殻文の土器 (第48図1)



第39図 土器破片出土分布密度



第40図 完形・復元土器出土状況

貝殻腹線文を数段にわたり器面に施文するもので、器形は深鉢と想定される。胎土は精選される。焼成は良好であるが、やや脆い感じを受ける。色調はにぶい褐色を呈する。ZG-90グリッドより出土した。

#### 2類 貝殻沈線文の土器 (第48図2)

沈線と貝殻腹線文を組み合わせて、幾何学文を施文するもので、器形は深鉢形土器と想定される。胎土は精選され、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈する。ZG-85グリッドより出土した。

本群土器は早期中葉に位置付けられるもので、1類は寺の沢式、2類は物見台式に比定される。なお、廃棄域2からは本群土器は出土していない。

### 第II群土器 後期初頭～前葉の土器

#### 1類 地文上に沈線文が施文される土器 (第41図1、48図1～8、54図111～113)

深鉢、壺が主体を占めるものと想定される。文様帯は胴部下半に及び、主文様として弧線文、「S」字文、楕円形文、格子目文が施文される。地文はL・R縄文が多用されるほか、R・L・網目状澁糸文がある。焼成は良好で、色調は橙色、にぶい褐色、灰褐色を呈する。

第41図1は4つの低い山形口縁を有する深鉢で、頸部に施文された沈線によって口縁部・胴部文様帯に区画される。口縁部文様帯は山形口縁の直下に菱形文・貼付文を施し、それらを弧線文・L・R撚糸圧痕文で連結する。胴部は相対する二重の弧線文内にアクセサリー的な文様が付加されている。地文としてL縄文が施文される。焼成は良好、色調はにぶい褐色を呈する。

## 2類 蔭線文・隆沈文の土器（第48図9～12、54図114～116）

深鉢が主体を占めるほか、壺の破片も少量みられる。壺には4つの棒状把手が作られるものもある。破片のみで文様帯の及ぶ範囲は明確でないが深鉢では胴部下半、壺では胴部中程である。深鉢・壺とも主文様として方形文、曲線文がみられるほか幾何学文が施文されるものもある。蔭線文・隆沈文上には単筋の縄文が施文されるものもある。

## 3類 沈線文の土器（第41図2～8、48図13～49図32、54図117～128）

本類は無文研磨された器面上に1～数条の沈線により文様が描かれたものを一括した。なお、隆沈文、蔭線文で文様帯が区画されたものも本類とした。

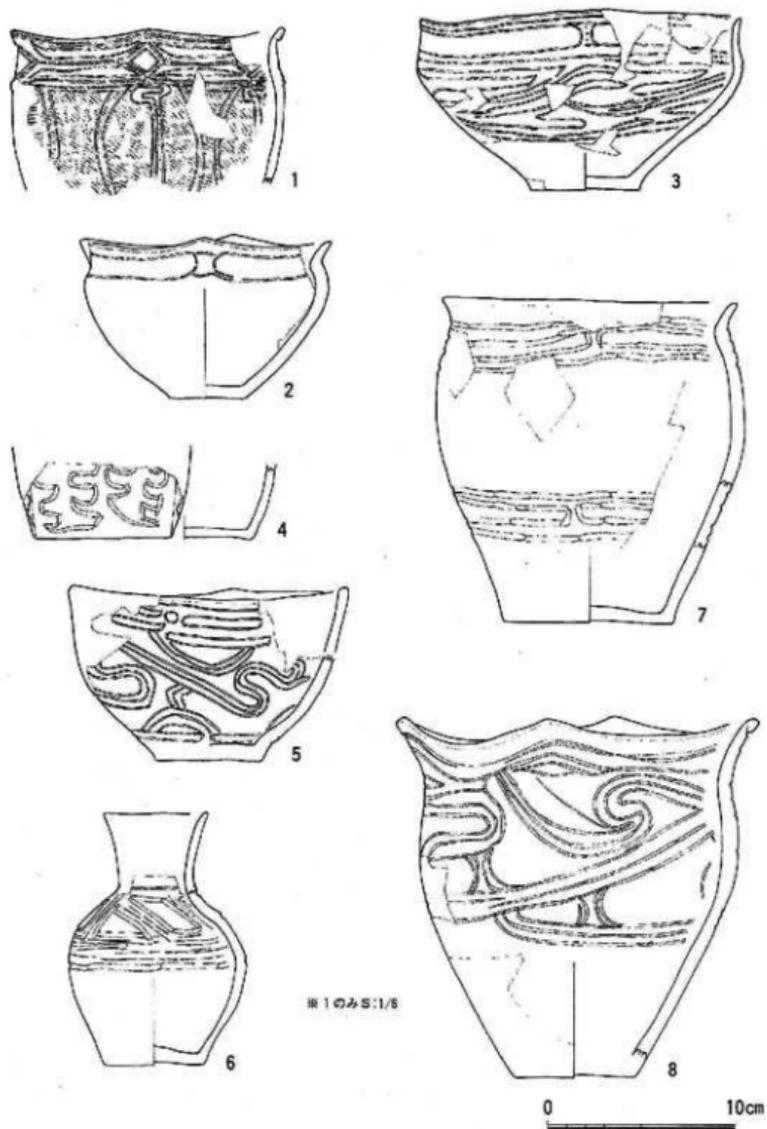
深鉢、鉢、壺が主体となるが壺もみられる。深鉢の文様帯は胴部3/4までおよび、主文様として長方形文（第41図7）、「S」字文、渦巻文、弧線文、入組文（第41図8）が主文様となるほか、幾何学文、花卉状文がみられる。鉢の文様帯は底部付近までおよび、主文様として「S」字文（第41図5）、入組文（第41図3）、長方形文が施文される。壺の文様帯は胴部最長部におよび方形・三角文（第41図6）、渦巻文、入組文が主文様として施文される。第41図4は底部が長方形を呈する土器で、4面に「S」字文（木の葉状）が施文されている。第41図7は縄文施文後に丁寧に磨り消され、無文化されている。いずれも焼成は良好、色調はにぶい黄褐色、浅黄褐色、赤褐色を呈する。

## 4類 幅の狭い帯縄文の土器（第42図、43図、49図33～50図56、54図129～130、55図131～142）

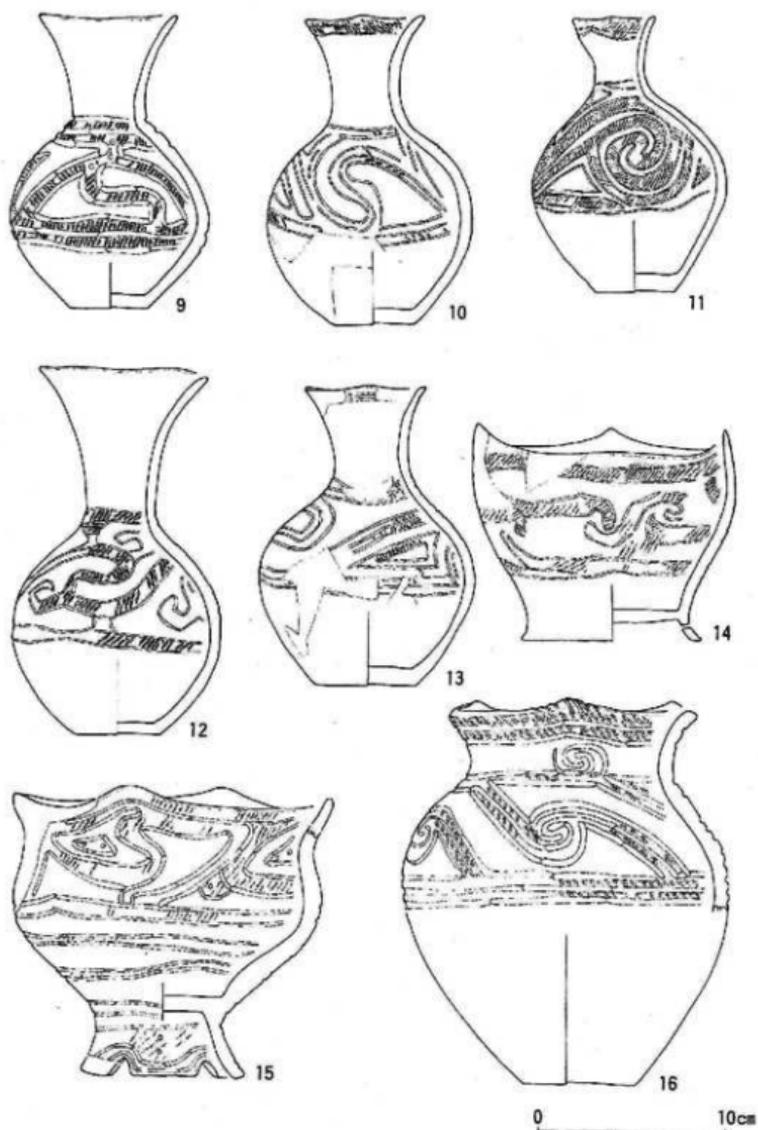
幅1cm程の帯縄文によって文様が描かれるものを一括した。深鉢、鉢・台付鉢・浅鉢、壺・広口壺が主体となるが片口土器もみられる。深鉢は山形口縁部を呈するものが多く、胴部上半に最長部を有する。文様帯は胴部2/3程までおよび、主文様として階段状文（第43図21・22）、入組文、弧線文、楕円形文が施文される。鉢・浅鉢・台付鉢は平口縁、山形口縁を呈し、文様帯は器面全域におよぶ。幼稚な入組文（第42図14）、階段状文（第43図23）、方形文（第43図17）、「S」字文や楕円形文が施文されている。壺・広口壺は平口縁または低い山形口縁を呈し、胴部最長部または最長部よりやや下までおよび、主文様として入組文（第42図11・16）、「S」字文（第42図9・10・12）、弧線文（第42図18・20）、方形文（第42図19）が施文されている。沈線間には無筋・単筋斜縄文が施文される。また、これらの中には花卉状文、幾何学文や刺突文を付加するものもある。いずれも焼成は良好、色調は橙色、にぶい褐色、浅黄褐色等を呈する。

本類には後期初頭～前葉の土器を一括した。1類～4類は東北地方北部の前十腰内Ⅰ式、十腰内Ⅰ式に比定されるものである。いずれの廃棄域においても本群土器の占める割合は高い。

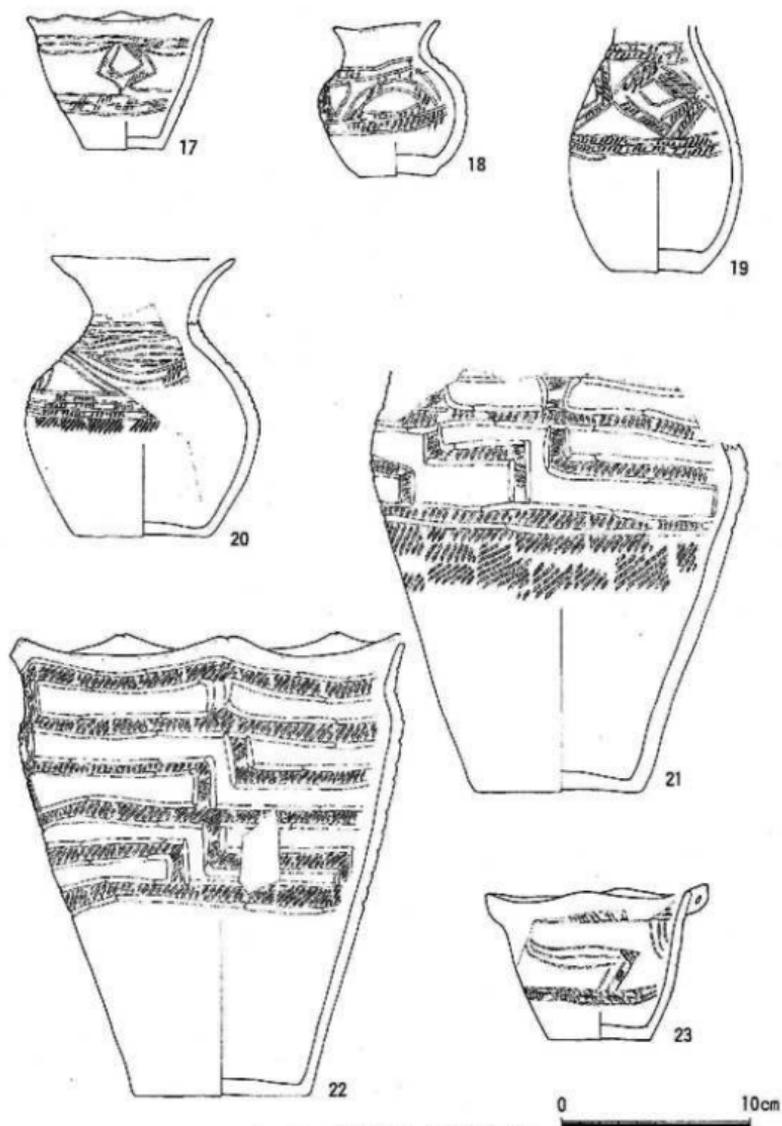
## 第三群土器 後期中葉の土器



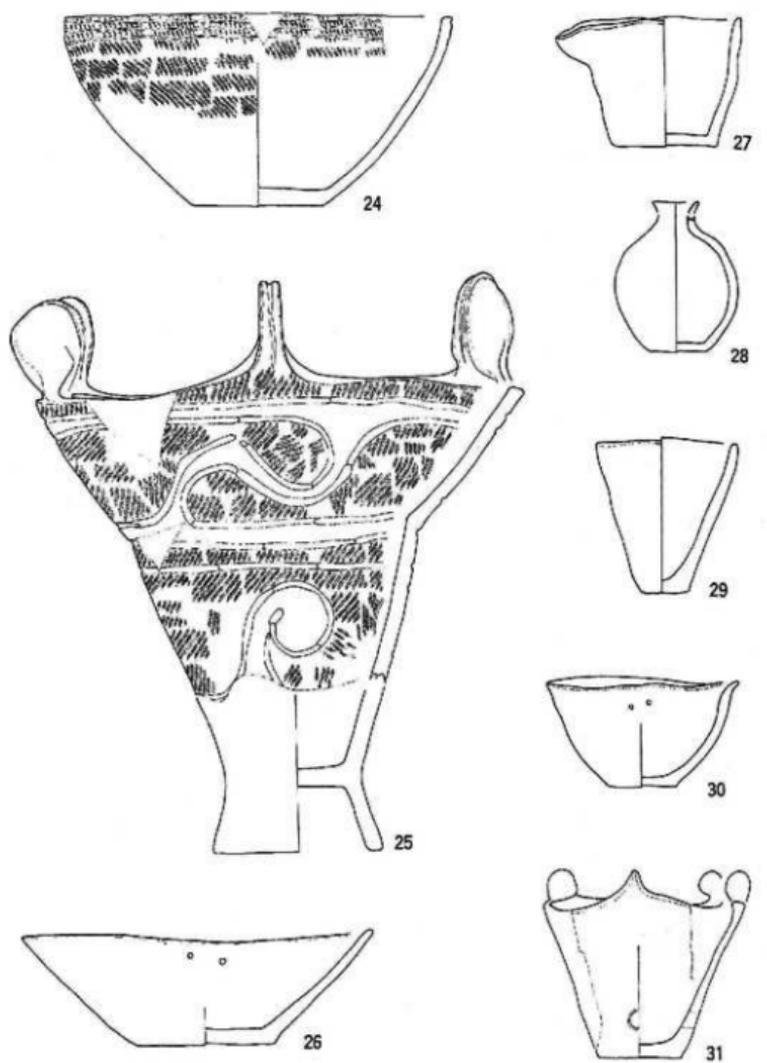
第41図 遺構外出土土器実測図(1)



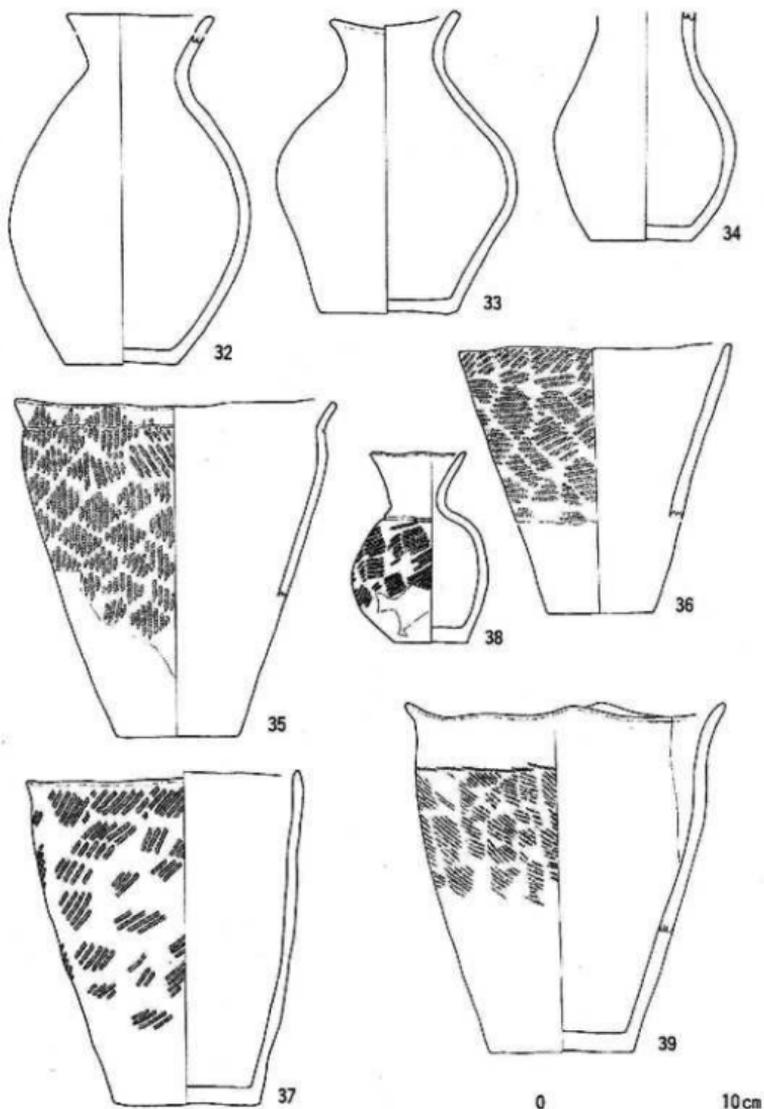
第42图 遼構外出土土器実測图(2)



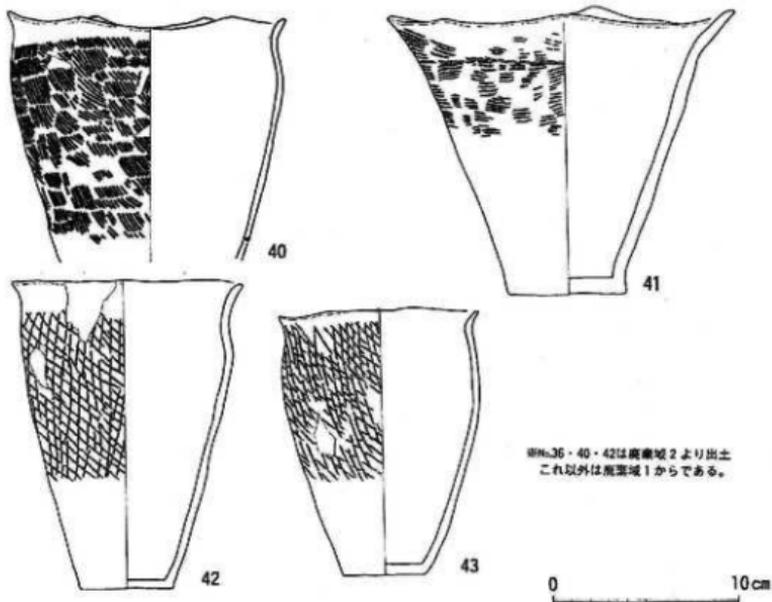
第43图 造構外出土器実測図(3)



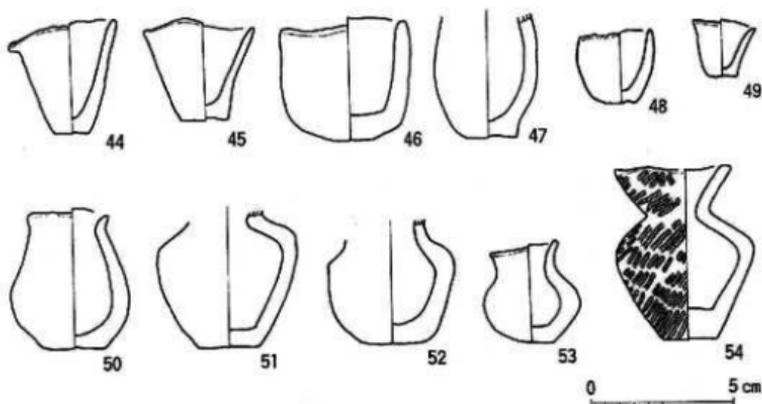
第44图 遗構外出土土器実測図(4)



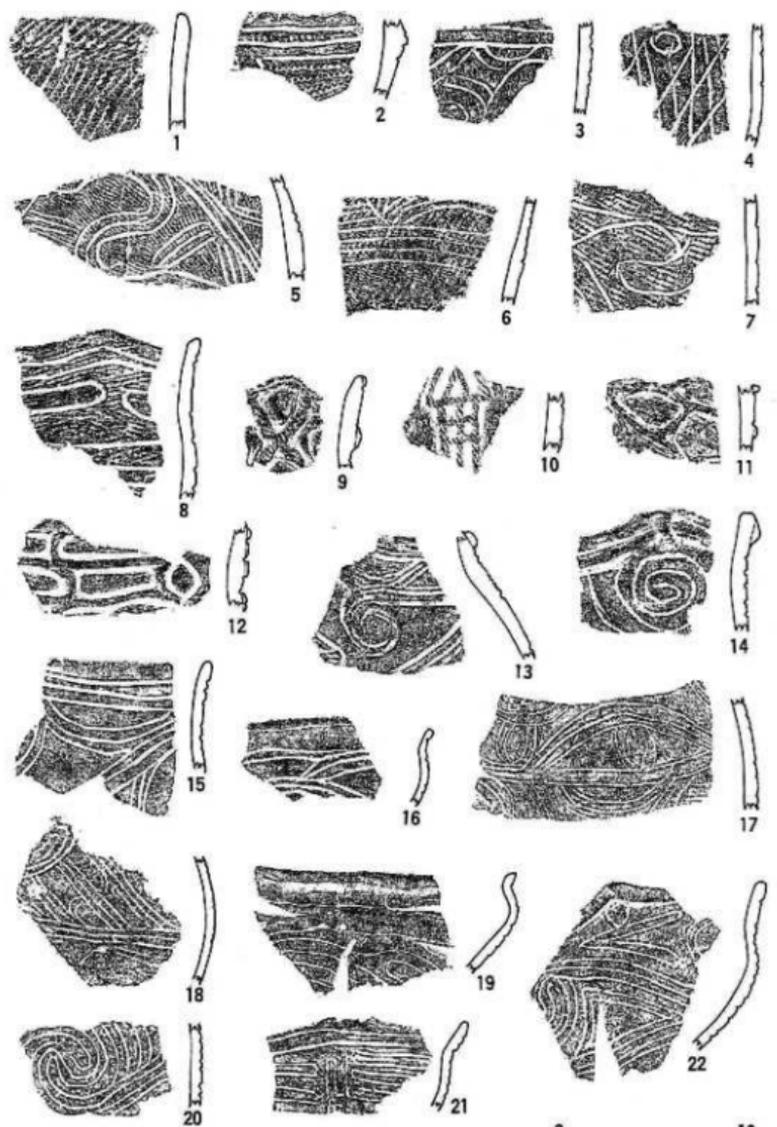
第45図 遺構外出土土器実測図(5)



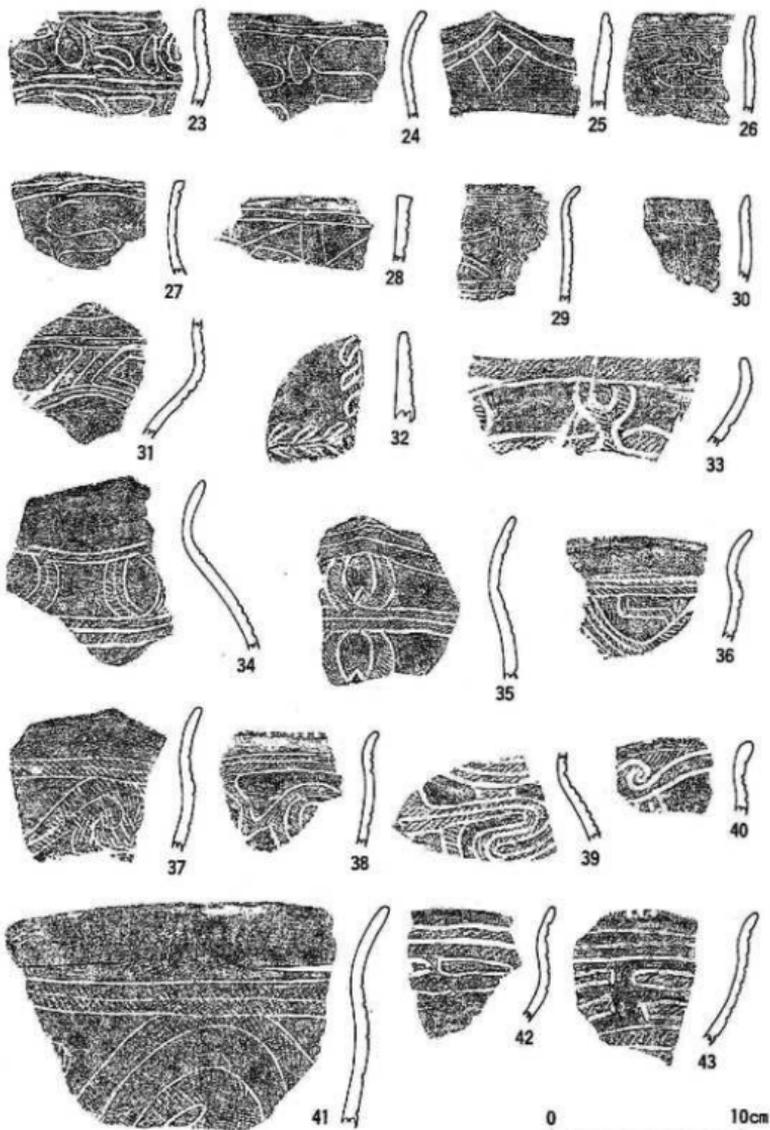
第46図 遺構外出土土器実測図(6)



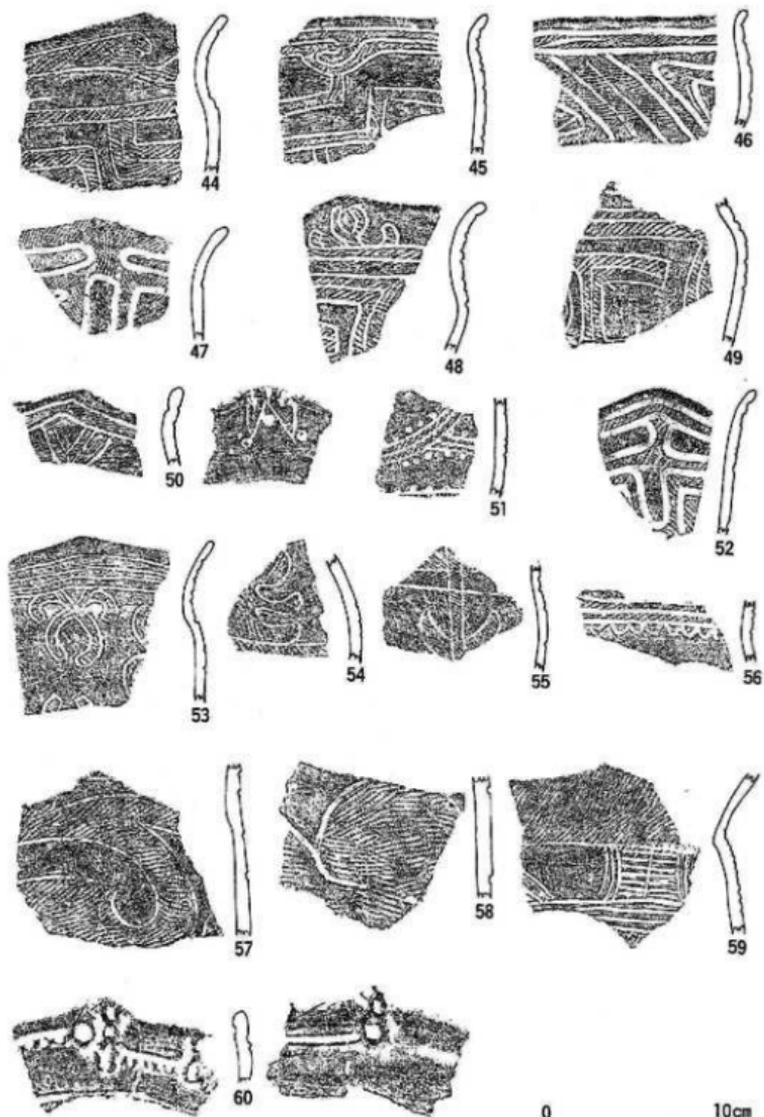
第47図 遺構外出土土器実測図(7)



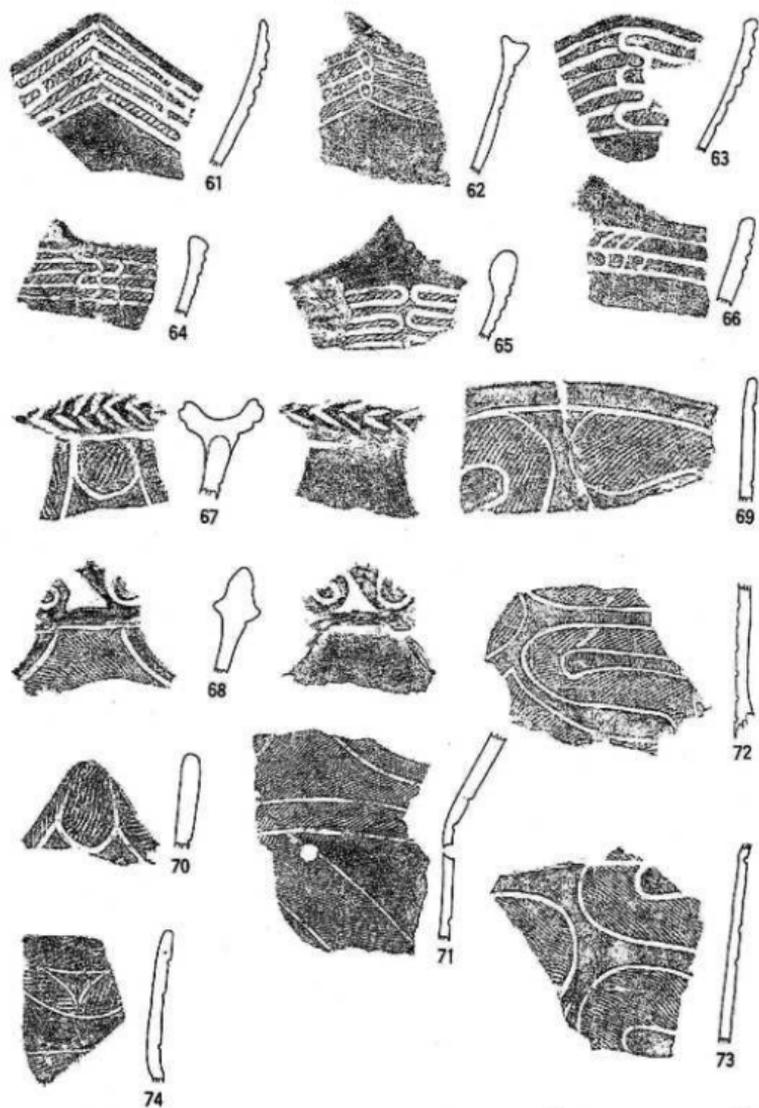
第48图 遗構外出土遺物拓影图(1)



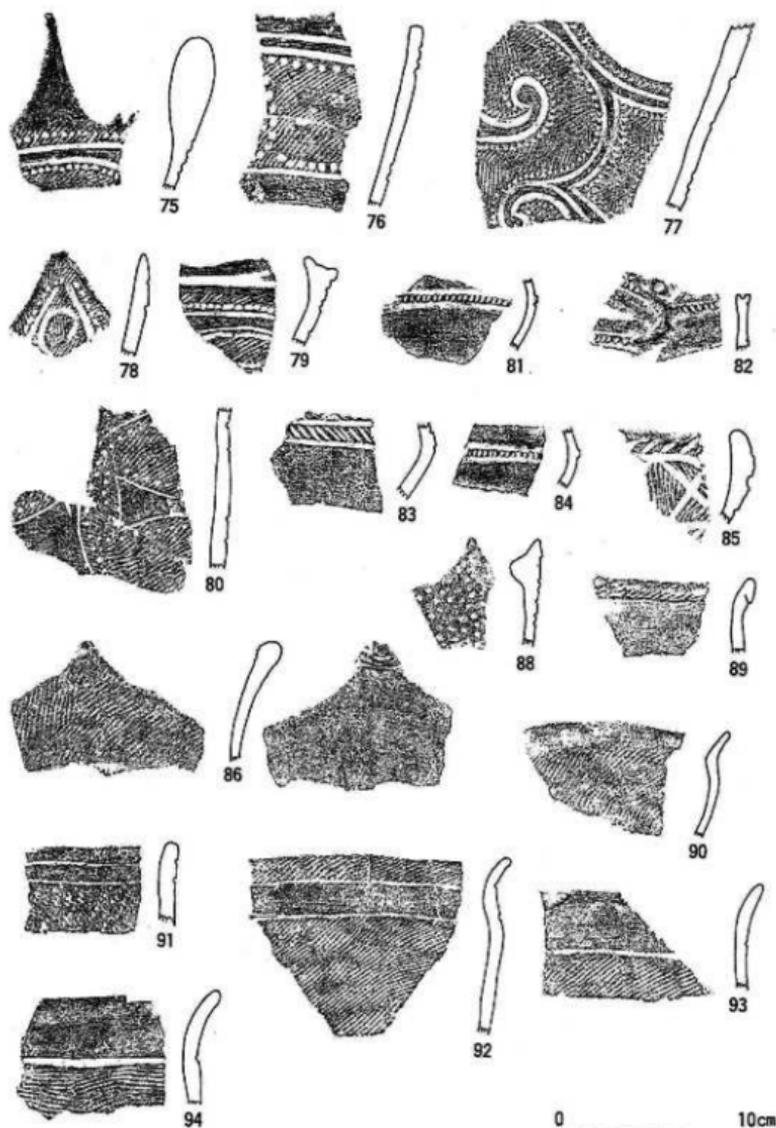
第49圖 遺構外出土遺物拓影圖(2)



第50圖 遺構外出土遺物拓影圖(3)

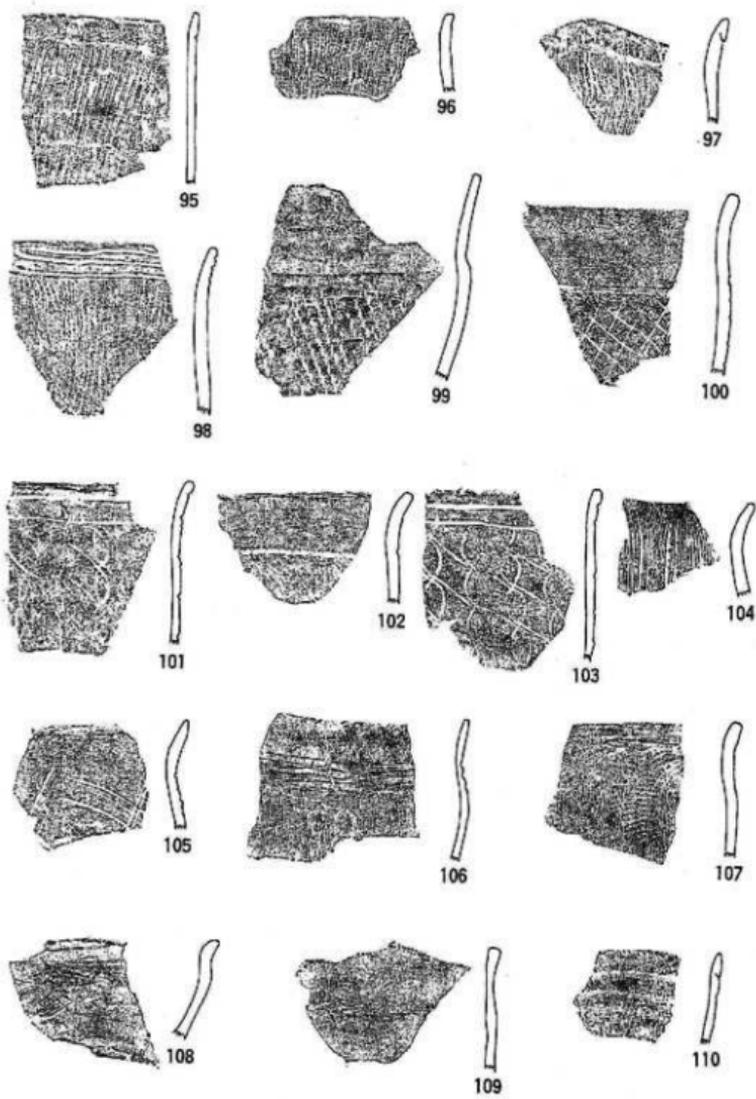


第51图 遼構外出土遺物拓影图(4)



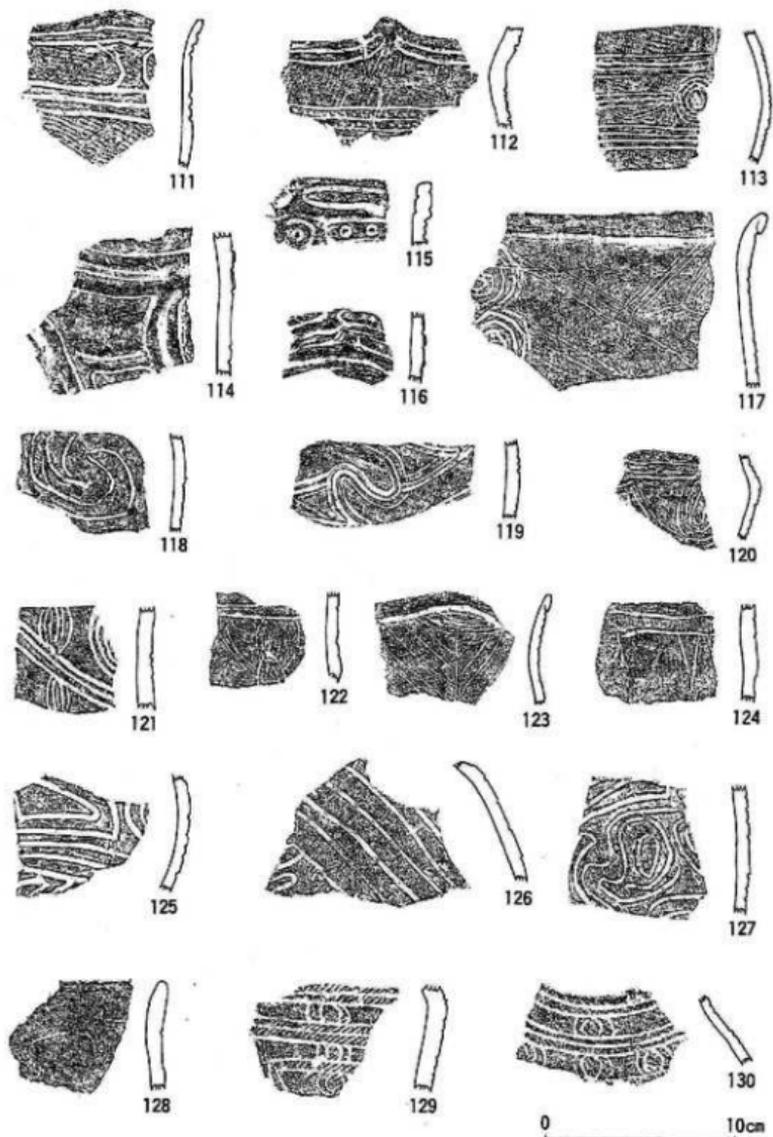
第52图 遺構外出土遺物拓影图(5)

0 10cm

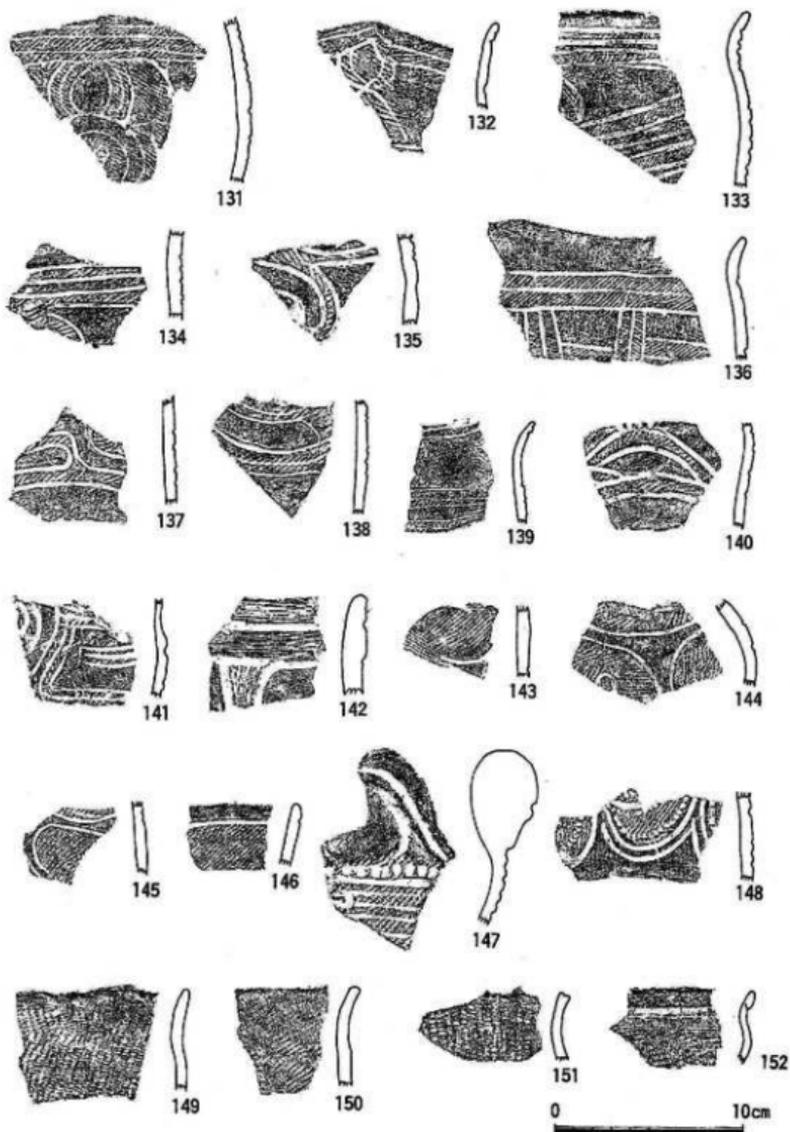


0 10cm

第53圖 遺構外出土遺物拓影圖(6)



第54圖 遺構外出土遺物拓影圖(7)



第55圖 遠構外出土遺物拓影圖(8)

### 1類 幅の広い帯縄文の土器 (第50図57・58)

第Ⅱ群4類と比べ帯縄文の広いものを一括した。文様的是4類の特徴を持ちながらも、後出する土器の器形を持つ。深鉢が主体となるが壺もみられる。深鉢は数個の山形口縁を有し、大きく「く」字状に外反する。主文様として入組文的な文様が多く見受けられる。沈線間にはL R縄文が多用・充填される。焼成は良好、色調は暗赤褐色、にぶい褐色を呈する。

### 2類 平行沈線文の土器 (第44図24、51図61～66、55図147)

文様帯に数条の平行沈線を施した土器を一括した。深鉢が主体で、大きな山形口縁を呈し、口縁部は段を持ち胴部より内湾気味に外斜する。沈線は3～5条が施文され、弧状沈線、刺突文、直線文で連結されている。沈線間には条の細かな単節斜縄文(L R縄文が多用)が充填されるが、第51図66の様は無文のものも存在する。焼成は良好、色調は暗赤褐色、浅黄褐色、灰褐色を呈する。

### 3類 磨消縄文の土器 (第44図25、51図67～74、55図143～146)

曲線的に沈線により磨消縄文が展開するものを一括した。深鉢が主体を占める。口縁・胴部に文様帯を有し、主文様として幾何学文、アメンバー状の文様、連続「S」字文が施文される。沈線間には条の細かな単節斜縄文が充填され、L R縄文が多用される。焼成は良好、色調はにぶい赤褐色、赤褐色を呈する。

第44図25の土器は唯一復元できた当該時期の土器である。台付深鉢で3つの裝飾突起を有する。胴部から内湾気味に外斜し、口唇部は肥大化する。文様帯は口縁・胴部にあり、口縁部文様帯にはアメンバー状の文様が横位方向へ、胴部には波頭状文が展開する。沈線間にはL R縄文が充填される。焼成は極めて良く、色調は暗い赤褐色を呈する。

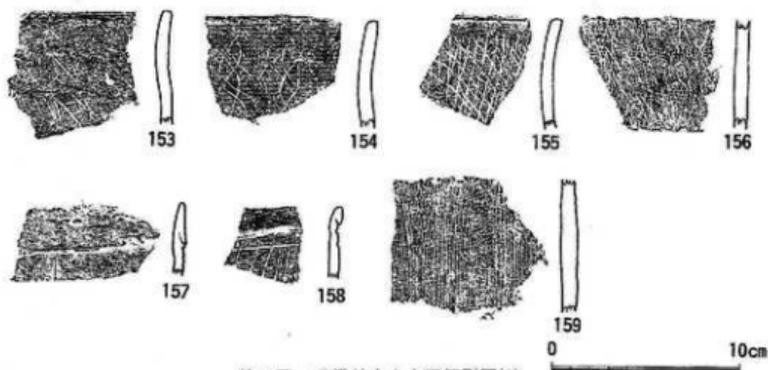
### 4類 磨消縄文に刺突文が付加される土器 (第52図75～80、55図148)

3類土器に類似した文様が展開し、連続した刺突文が付加されたものを一括した。台付深鉢が主体となる。刺突は竹管、棒状工具によるもので円形、三日月形を呈する。器形は大きな裝飾突起を有する台付深鉢が主体となり、口唇部は肥大化する。文様帯は口縁・胴部に区画され、蛇行懸垂文、幾何学文が施文される。沈線間には条の細かなL R縄文が多用される。焼成は良好、色調は赤褐色、鈍い赤褐色、鈍い黄褐色を呈する。

### 5類 沈線文系の土器 (第52図81～85)

単刻線を主文様とするものを一括した。浅鉢又は注口土器が主体となるものと想定される。胴部長張部に隆線を巡らし、その隆線上に単刻線を施すものや、太い沈線間に単刻線を施すもの(第52図85)がある。焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。

本群には後期中葉の土器を一括した。2～4類は東北地方北部の十腰内Ⅱ式、Ⅲ式、同南部



第56図 遺構外出土土器拓影図(9)

の室ヶ峰式に比定されるもので、2類土器は關東地方の加曾利B式の特徴を持っている。1類土器は十腰内Ⅰ式とⅡ式を結ぶものとして、5類は十腰内Ⅱ式、Ⅲ式の範疇に入るものと想定される。なお、廃棄城2より本群土器の出土量は極めて少ない。

#### 第Ⅳ群土器 後期初頭～中葉の土器

本群には、無文、無節・単節縄文、撫糸文、条痕文土器を一括した。数量的には非常に多く、また時期別の細分が困難である。なお、器形等から時期が判明するものについては明記する。

1類 無文の土器 (第44図26～31、45図32～34、47図44～53、53図108～110)

器面が無文研磨された土器を一括した。深鉢、鉢、浅鉢、壺、片口土器、ミニチュア土器がある。いずれも平口縁を呈するが、波状口縁や裝飾突起(第44図31)を有するものもある。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色、浅黄色、灰黄褐色を呈する。なお、第44図31は第Ⅲ群に伴うものである。

2類 縄文が施文される土器 (第45図35～39、46図40～41、47図54、52図89～94、53図149～152)

深鉢、壺、鉢が主体となる。平口縁を呈するものが多いが、低い山形・波状口縁を呈するものもある。

深鉢は口縁部がわずかに外反するものと直線的に立ち上がるものがある。R・L縄文、R縄文が多用され、撫糸文の圧痕を境界文とし口縁部を磨り消すものもある。焼成は良好、色調は灰黄褐色、にぶい赤褐色、黄橙色、浅黄色を呈する。

3類 撫糸文が施文される土器 (第46図42、53図95～103、56図153～156)

単軸結条体回転文、網目状・連鎖状撫糸文が施文されるものを一括した。深鉢、壺が主体となる。深鉢は平口縁を呈するほか、波状折り返し口縁となるものもある。L・Rの原体が使用

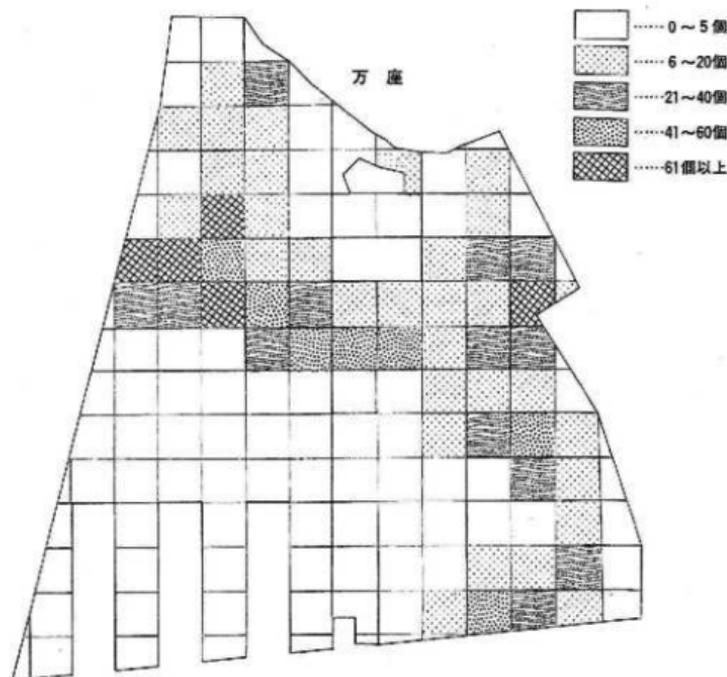
される。頸部に境界文として沈線、燃糸圧痕文が施文され、口縁部が無文となるものもある。焼成は良好、色調は灰黄褐色、黒褐色等を呈する。

#### 4類 条痕文の土器 (第53図104~107、56図157~159)

平口縁を呈する深鉢が主体を占める。条痕の幅にも種類がみられる。条痕は器面に対し縦位、横位、無方向に施文されている。焼成は良好、色調は黒褐色、黄褐色を呈する。(藤井 安正)

### (2) 石器

D<sub>7</sub>区遺構外より出土した石器は多種多様で、その数は剝片石器1,492点、礫石器153点の総計1,645点である。遺物は万座環状列石の中心から48mから72mの範囲内に集中する傾向にある。このことは、これまでの万座環状列石隣接地の調査でも同じ傾向がみられており、遺物がこの範囲内に集中することがほぼ明らかとなったと言える。



第57図 石器出土状況

また、調査区東部のA-91、92付近の出土石器は、野中堂燧状列石に関連するものと考えられる。その数は剥片石器102点、礫石器65点の計167点である。

遺物の大半は遺物包含層Ⅲa～Ⅲb層からの出土である。石器の分類については、形態別に類別細分した。なお、石器出土分布状況は第57図の通りである。

#### 石鏃 (58図、59図、60X図)

形態から2群6類に分類した。石材は硬質頁岩が多く、珪質頁岩、黒色頁岩、赤色頁岩と続く。

1群…有基石鏃で、基部形態から以下のように細別した。重さは0.4～1.9gを測る。

a…平基有基石鏃で19点出土した。剝離調整はていねいである。(1～9、11～19)

b…凹基有基石鏃で8点出土した。基部に挟れをもち、a類に比べ細長いものが多くみられる。剝離調整はていねいである。(10、20～27)

c…凸基有基石鏃で9点出土した。基部がa、b類に比べ突出し、菱形に近い形をしている。剝離調整はていねいである。(28～35)

2群…無基石鏃で、基部形態から以下のように細別した。重さは0.8～58gを測る。

a…凹基石鏃で7点出土した。剝離調整はていねいであるが、自然面や一次剝離面を残すものもみられる。(36～42)

b…円基石鏃で5点出土した。剝離調整はていねいであるが、43は自然面を残し、基部を破損している。(43、45～48)

c…尖基石鏃で5点出土した。剝離調整はていねいで、柳葉形を呈し、基部中央に膨らみをもつ。(44、49～51)

#### 石鏃 (第61図)

形態から3群に分類した。石材は全て硬質頁岩である。

1群…つまみ部と鏃部の境が明確なもので、9点出土した。ていねいな剝離調整によって作り出され、特に鏃部の作りは精巧である。鏃部途中で折れているものや特に55は先端部の著しい厚耗痕が観察される。(52～60)

2群…つまみ部と鏃部の境が明確でないもので、5点出土した。V字状を呈し、鏃部先端に近い程、剝離調整はていねいである。(61～65)

3群…剥片の一部に剝離調整をして、鏃部を作り出しているものである。2点出土した。1群、2群に比べ鏃部は短く、小さいのが特徴である。(66、67)

#### 石匙 (第61図、62図、63図、64図、65図)

形態から2群に分け、つまみ部を上にして主要刃部が作り出される位置から、5類に分類した。石材は硬質頁岩が多く、次に珪質頁岩、黒色頁岩、赤色頁岩と続く。

1群…艇型石匙である。

- a…主要刃部が左、右、先端部、一側縁に作り出されるもので、18点出土した。(61~65)
- b…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、27点出土した。(77~99)
- c…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、8点出土した。(100~107)

2群…横型石匙である。

- a…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、24点出土した。(108~117)
- b…主要刃部が周縁全域に作り出されるもので、11点出土した。(118~121)

### 石直 (第65図、66図)

形態別に2群に分類した。石材は硬質頁岩である。

1群…基部にたいして刃部の幅が広がるもので、頭部が尖る撥状のものである。3点出土した。(122~124)

2群…1群に比べ頭部が尖っておらず、台形状を呈している。1点出土した。(125)

### 攘器 (第66図、67図)

打面を上にして主要刃部の作り出される位置および刃部の形態別に6群に分類した。石材は硬質頁岩が最も多く、次に珪質頁岩、黒色頁岩、赤色頁岩と続き、樹脂状頁岩や黒曜頁岩もみられた。

- 1群…主要刃部が左、右いずれか一側縁に作り出されるもので、526点出土した。
- 2群…主要刃部が先端部に作り出されるもので、134点出土した。(130、131)
- 3群…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、310点出土した。(132、133)
- 4群…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、596点出土した。(134、135)
- 5群…主要刃部が周縁全域に作り出されるもので、44点出土した。(136、137)
- 6群…刃部に抉れをもつもので、132点出土した。

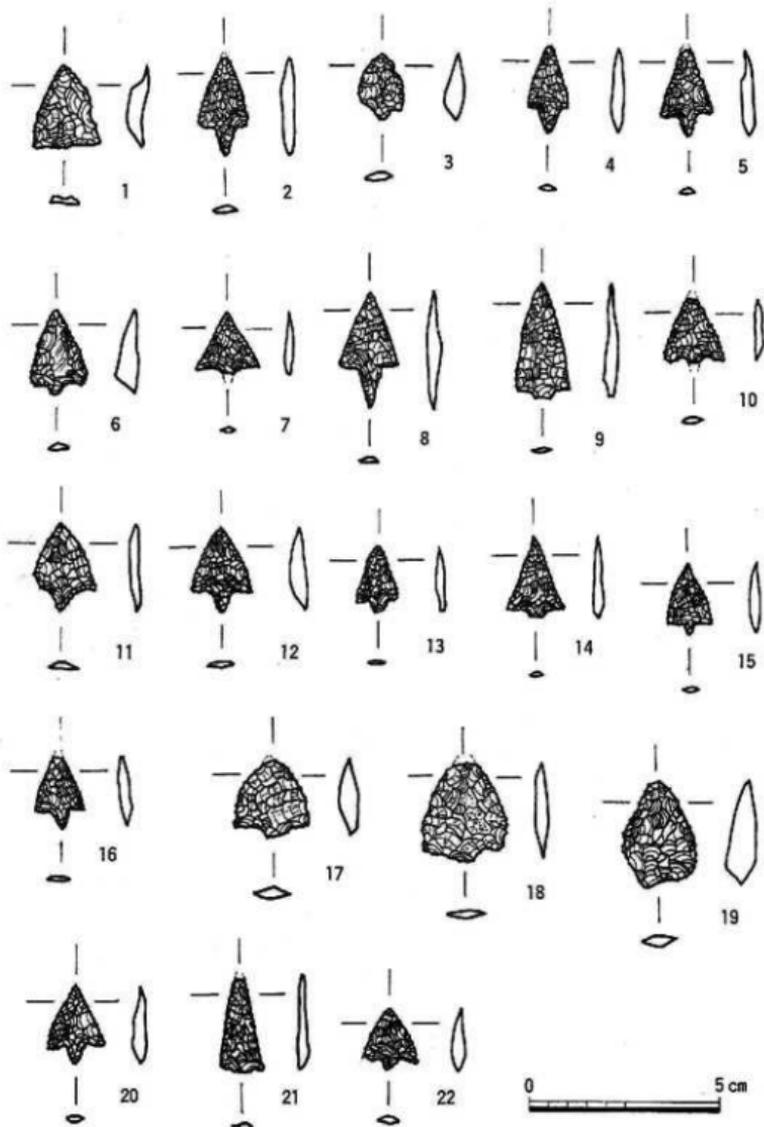
### 三脚石器 (第67図140)

調査区西部のZH-83グリッドから1点のみ出土した。やや粗い刃部調整により剝片を三叉状に加工して作られている。これまでの調査でも1点しか出土例がなく、使用痕もみられないことから、祭祀的要素の強いものとして使用された可能性がある。石材は頁岩である。

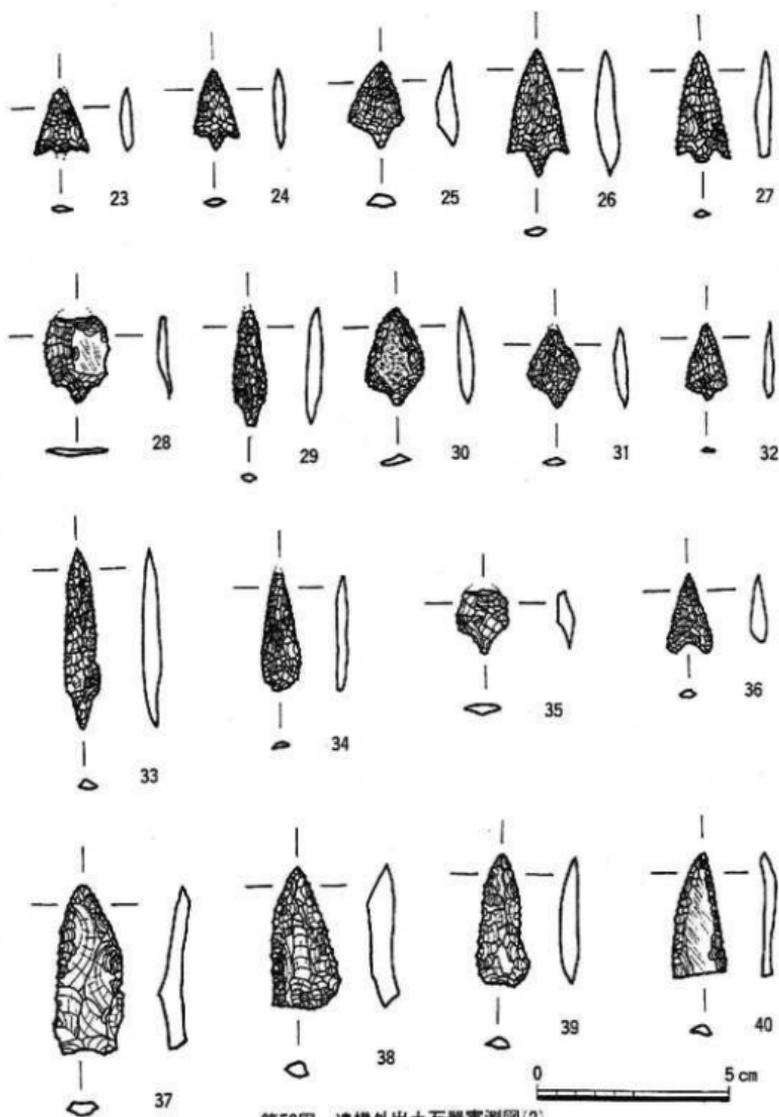
### 石斧 (第67図、68図)

形態別に2群に分類した。

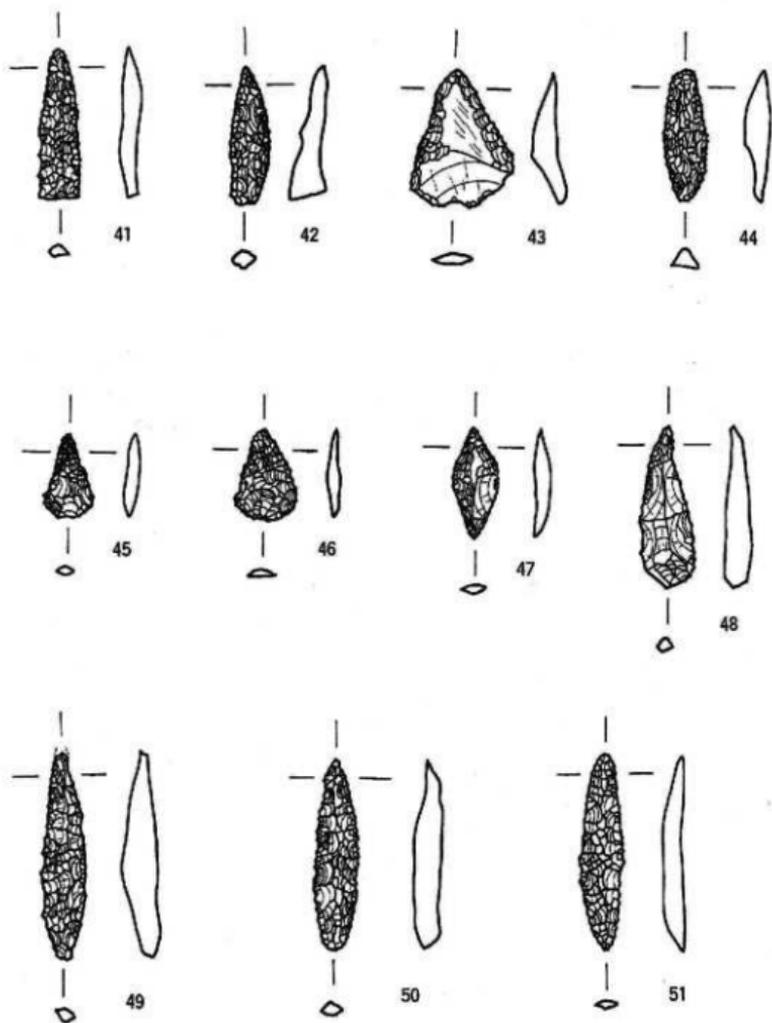
- 1群…打製石斧である。撥型、分銅型のもがあり、刃部には著しい使用痕が観察される。2点出土した。硬質頁岩、緑色凝灰岩である。(138、139)
- 2群…定角式磨製石斧である。25点出土し、そのほとんどに使用痕が観察される。145は刃部が欠損しているが、実用的なものとしては小さいものと考えられ、遠う用途として使用さ



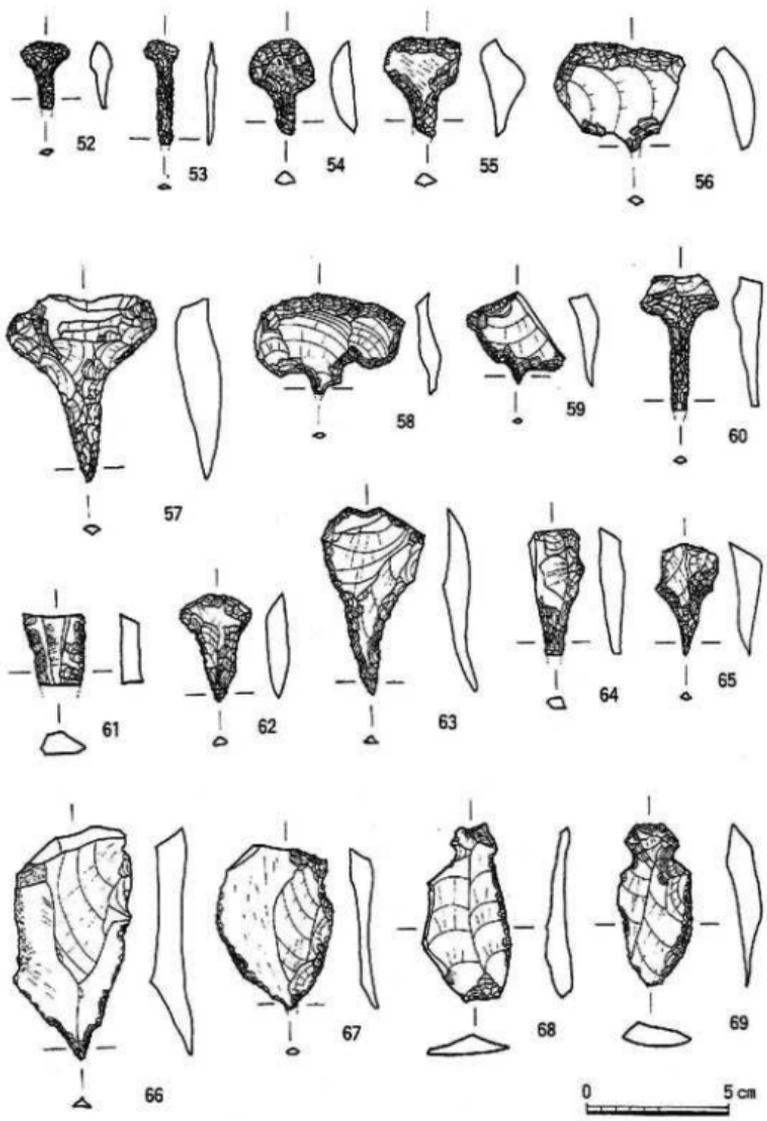
第58图 滇境外出土石器实测图(1)



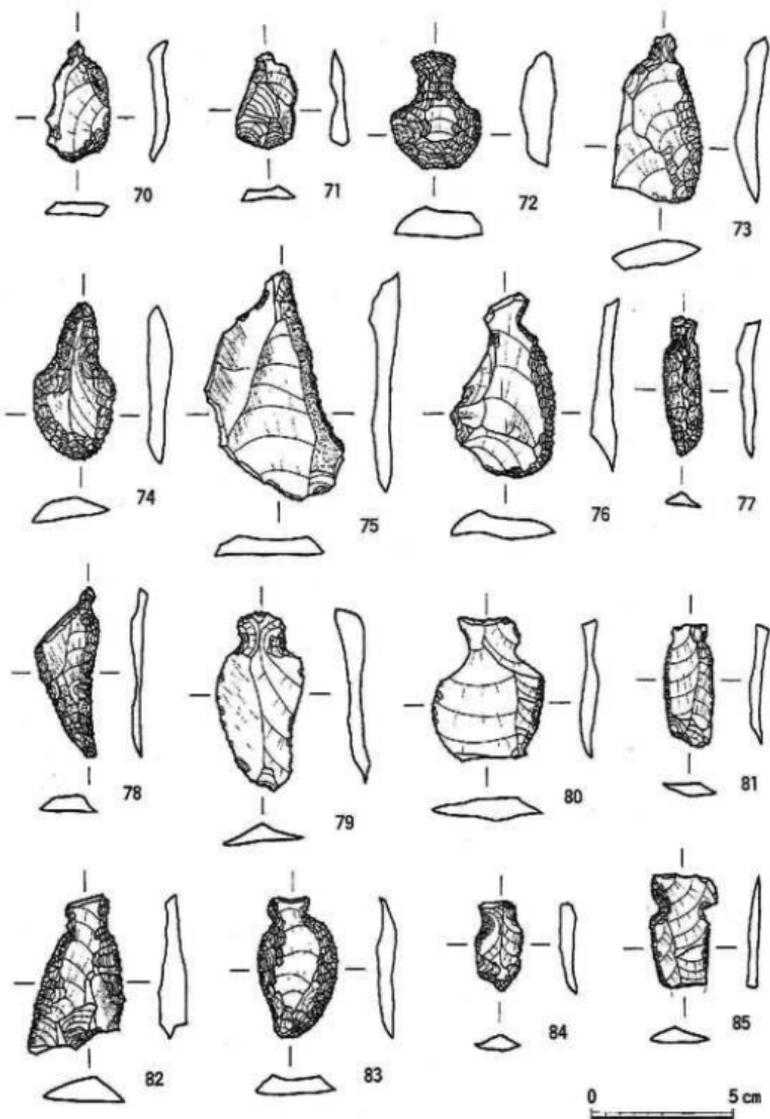
第59圖 遺構外出土石器實測圖(2)



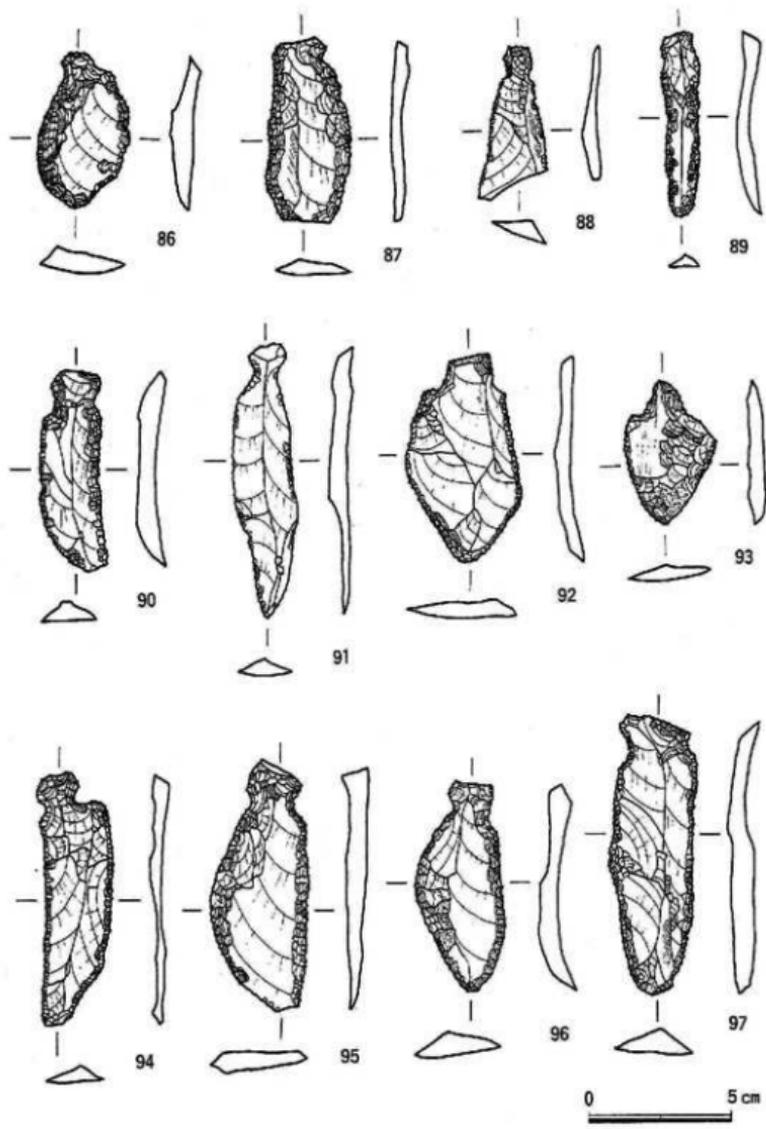
第60图 遼構外出土石器实测图(3)



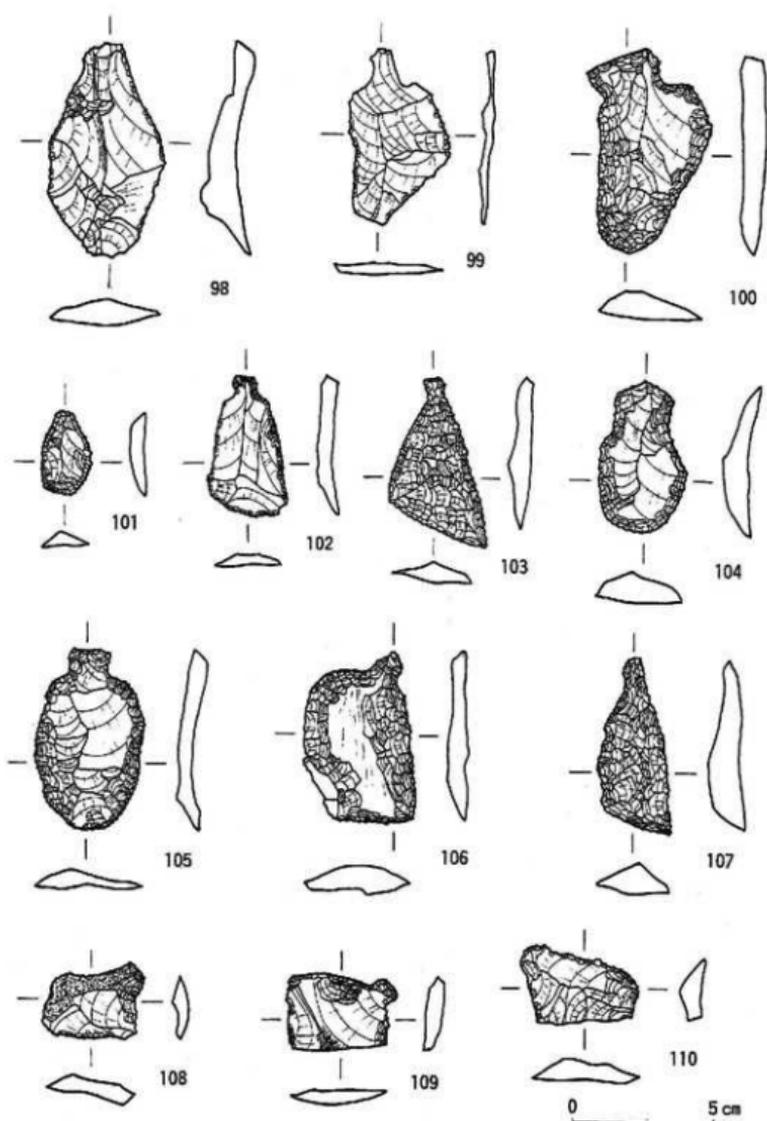
第61图 遗構外出土石器実測図(4)



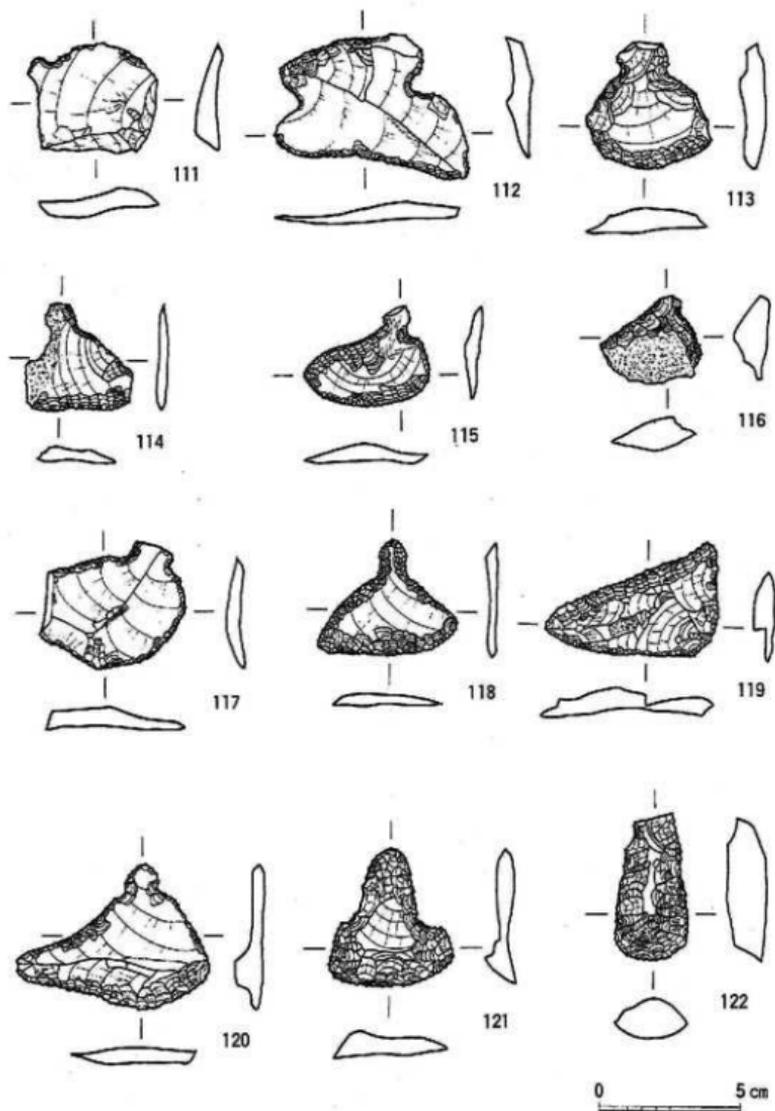
第62图 造精外出土石器实测图(5)



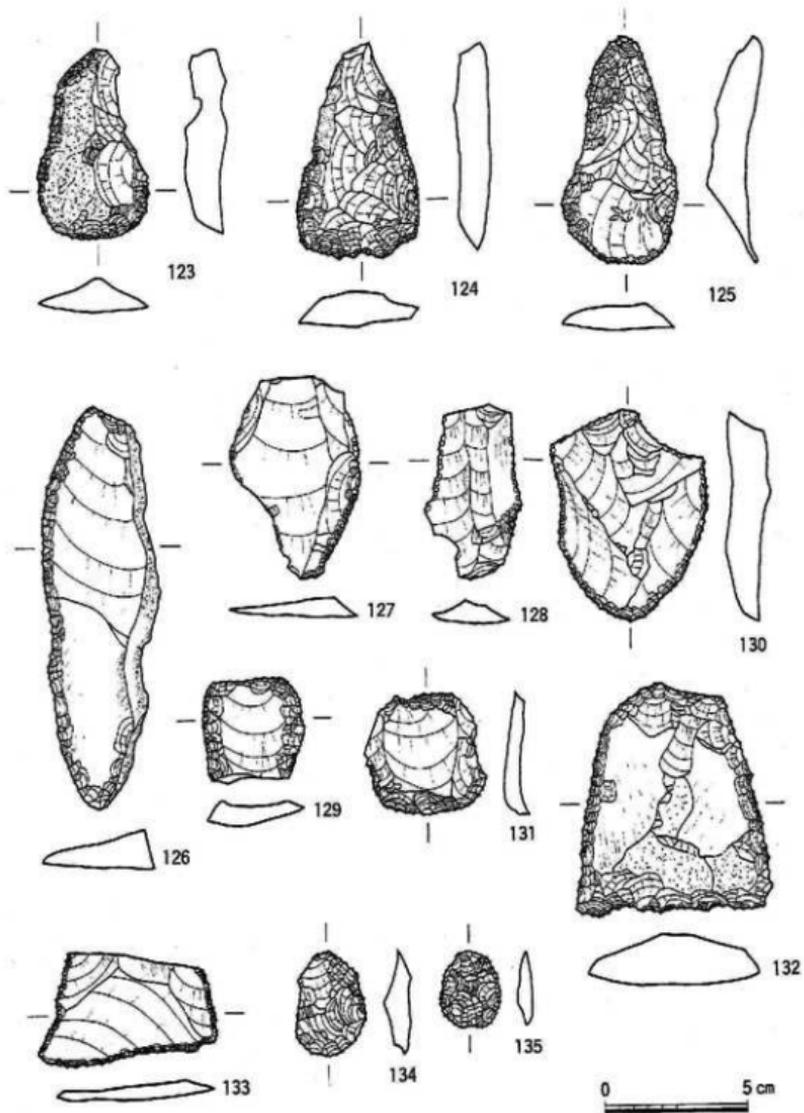
第63图 遗構外出土石器実測図(6)



第64圖 遼構外出土石器實測圖(7)



第65图 遺構外出土石器実測図(8)



第66图 遺構外出土石器実測図(9)

れたものと考えられる。石材は緑色凝灰岩である。(141、152)

**石錘** (第69図、153~165)

扁平な川原石の両側縁を打ち欠いているもので、法線的にはばらつきがある。28点出土した石材は緑色凝灰岩、凝灰質泥岩や泥岩が多くみられる。

**敲石** (第69図、166~170、第70図、171~177)

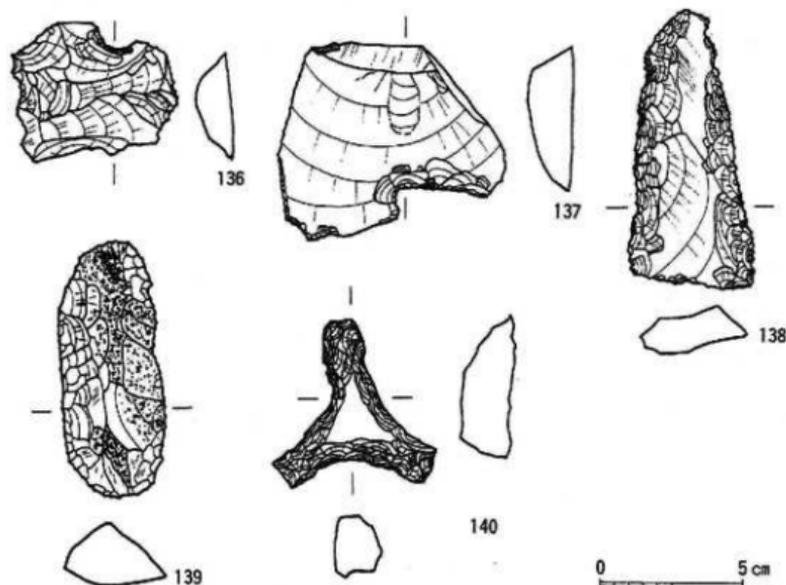
扁平な川原石の一侧縁のみが打ち欠かかれているもので、32点出土した。5~10cm程の手のひらにちょうどおさまるぐらいの大きさの川原石を用いているようである。石材は泥岩、緑色凝灰岩が多くみられる。

**凹石** (第70図、178~183、第71図、184~192)

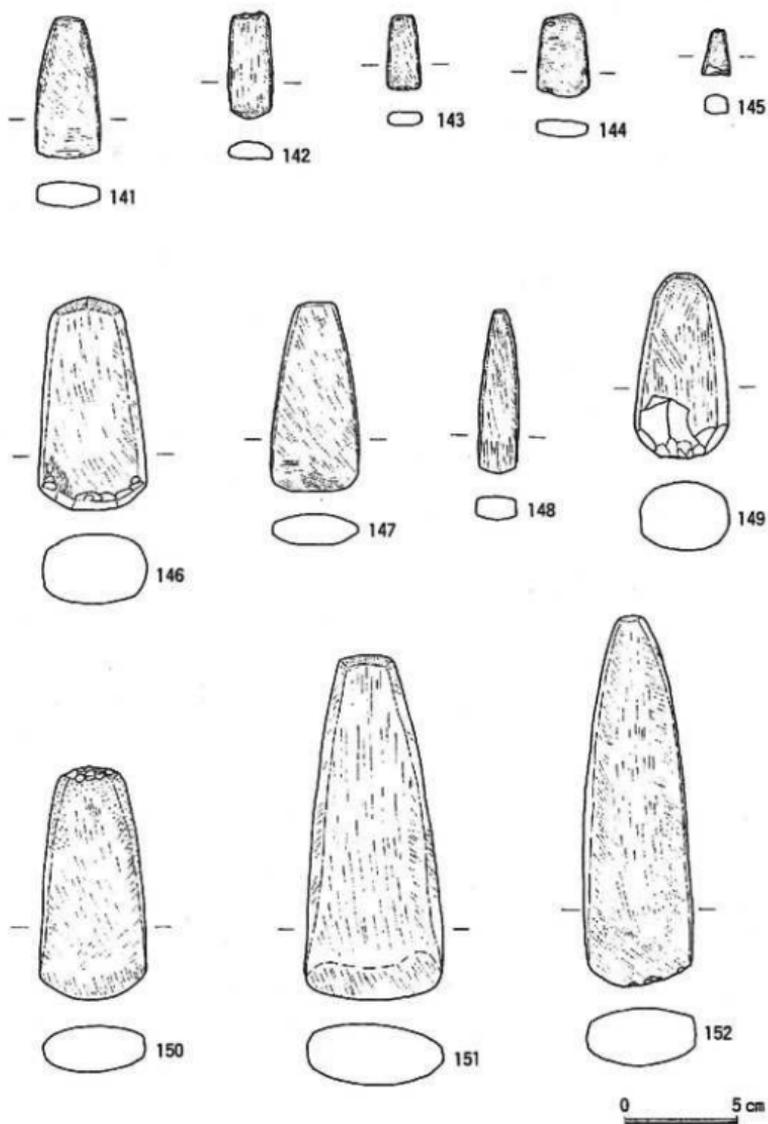
円礫、扁平な川原石、棒状の礫に、使用痕として凹が観察されるもので、98点の出土があった。中には189~192のように磨石として併用されたものもみられた。石材は凝灰岩、凝灰質泥岩、泥岩、緑色凝灰岩、石英安山岩等が多い。

**磨石** (第72図、193~201)

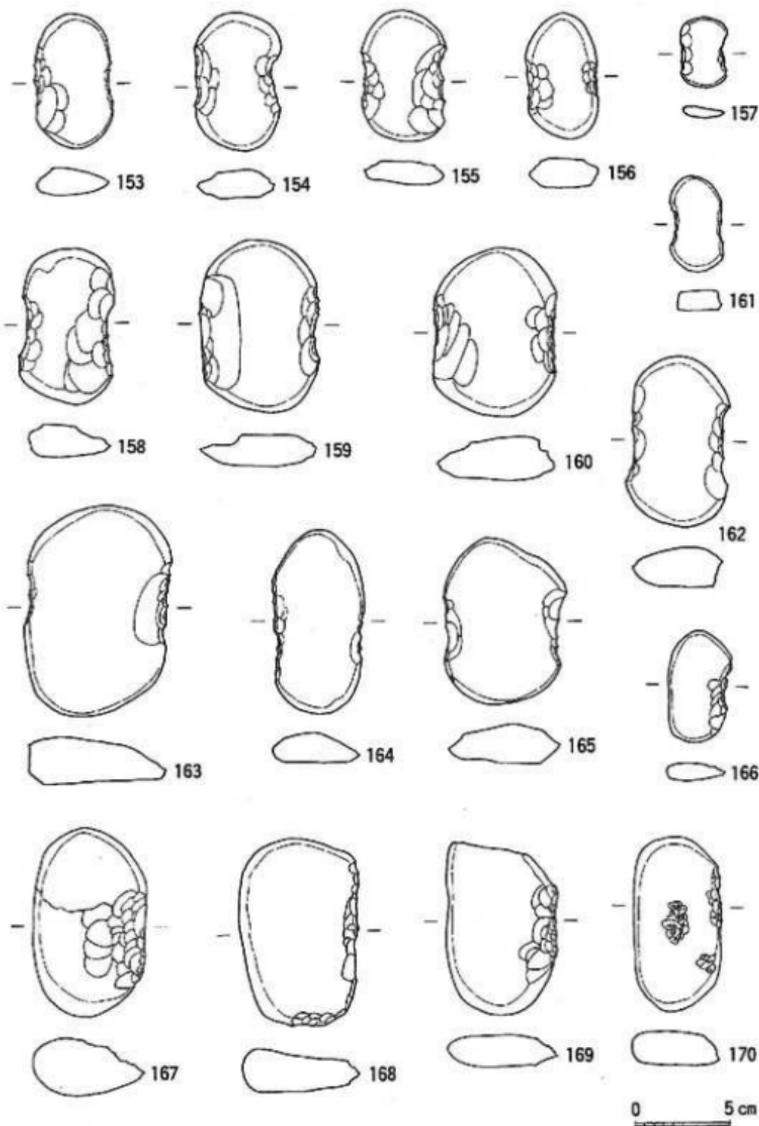
円礫の一部分や全面に磨痕が観察されるもので、24点出土した。石材は石英安山岩、凝灰質



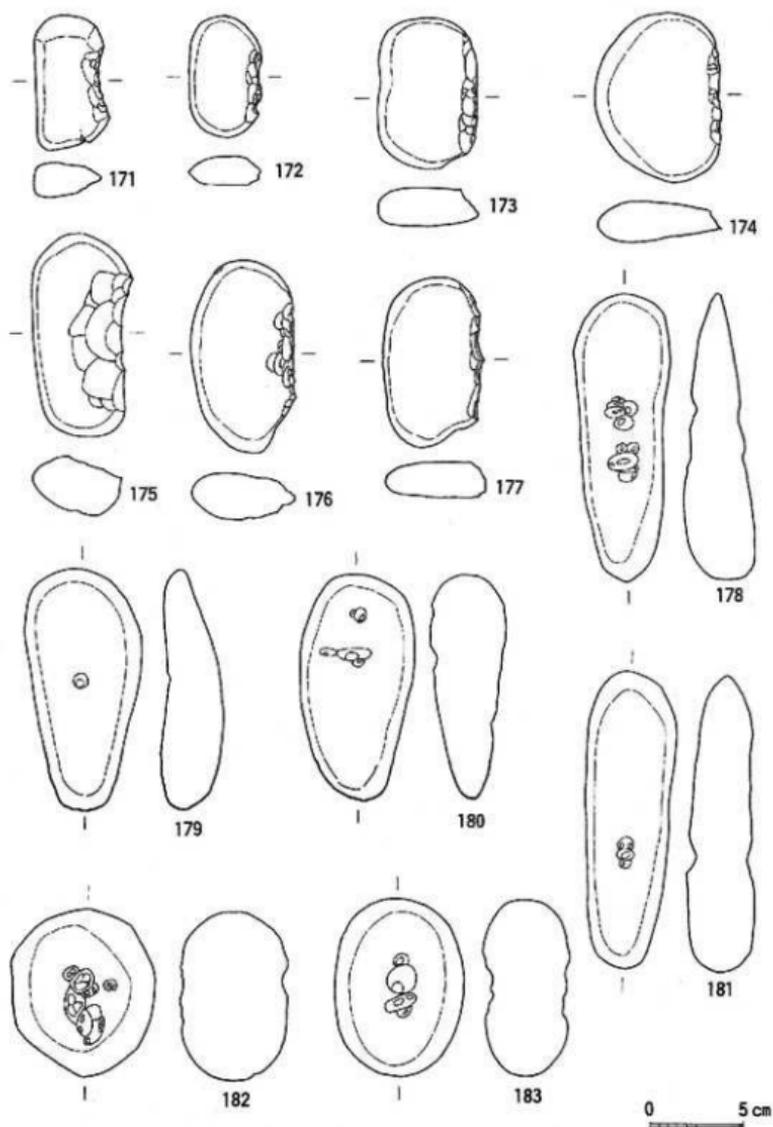
第67図 遺構外出土石器実測図(10)



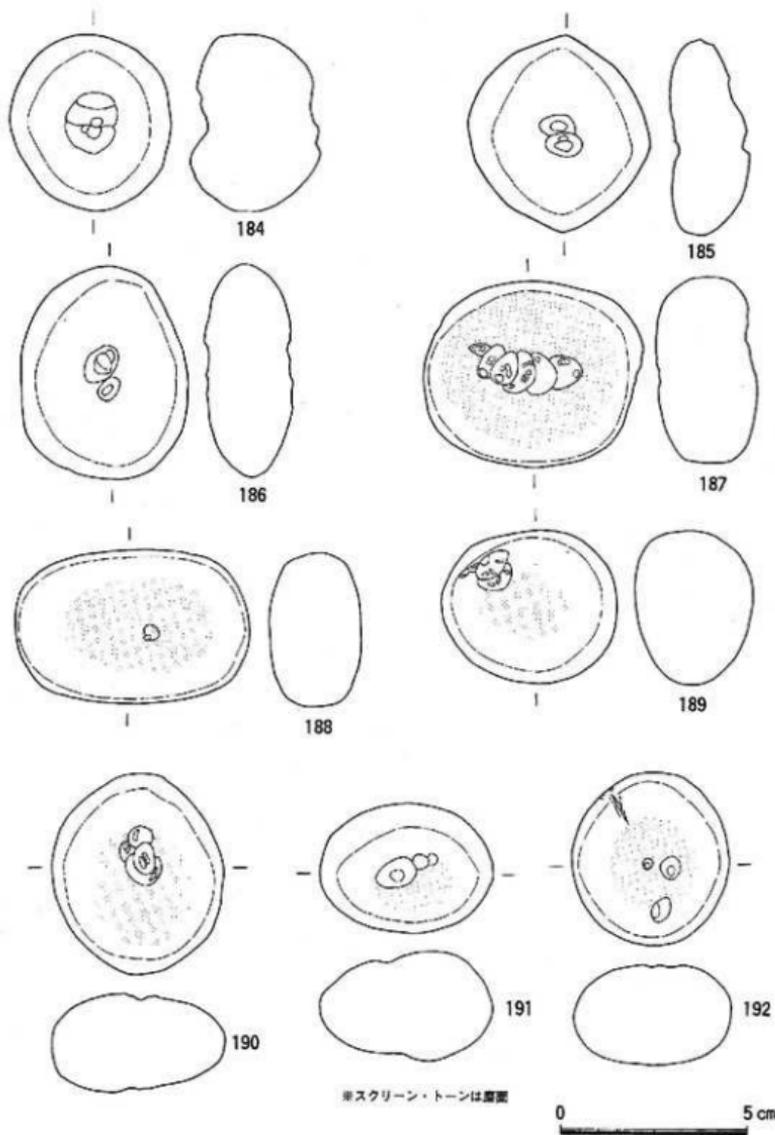
第68图 遼構外出土石器实测图(11)



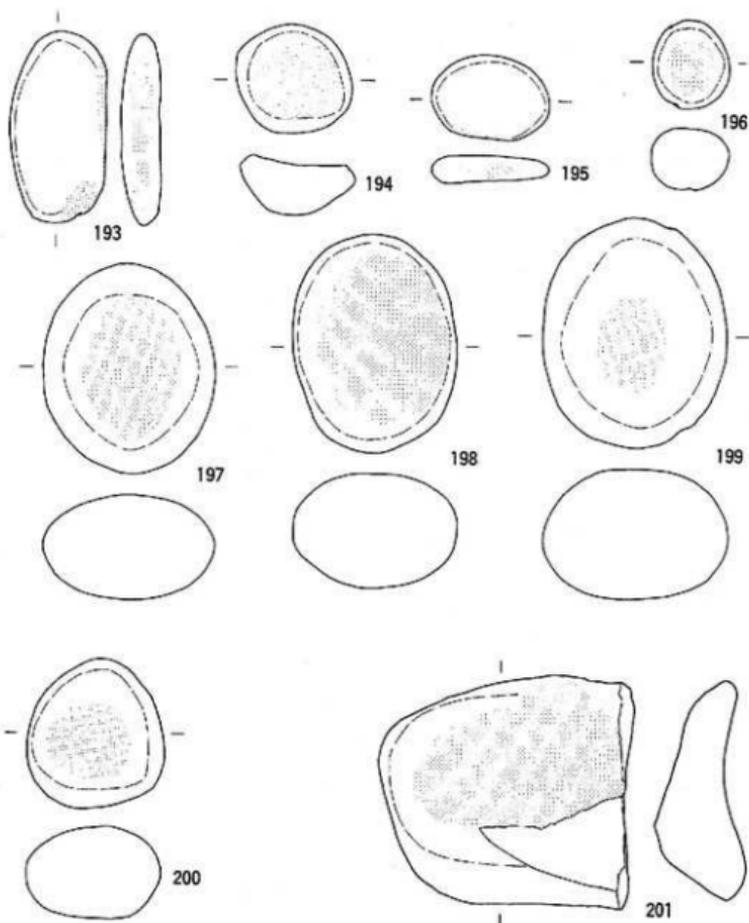
第69图 道槽外出土石器实测图(12)



第70图 遼構外出土石器实例图(13)



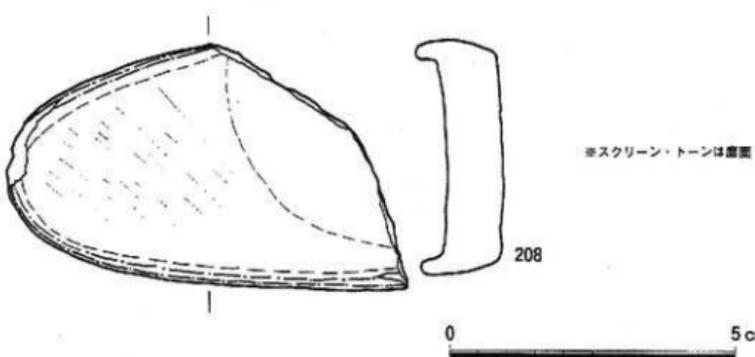
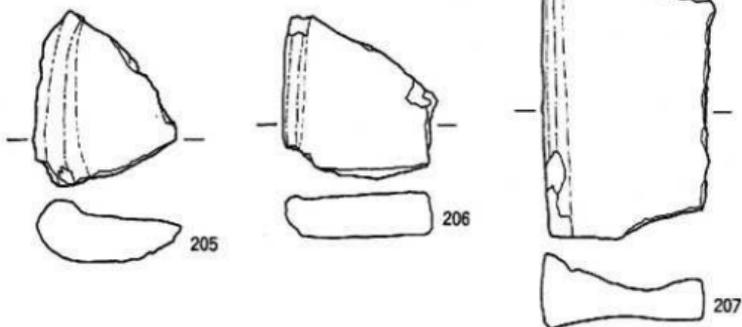
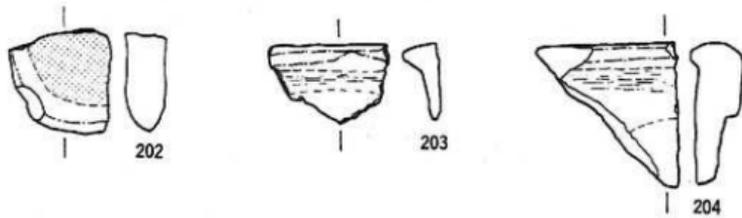
第71図 遺構外出土石器実測図(14)



※スクリーン・トーンは磨面

0 5 cm

第72図 遺構外出土石器実測図(5)



第73図 遺構外出土石器実測図(16)

泥岩が多く、石英閃緑玢岩等もみられる。

### 石皿 (第73図、203~208)

8点出土した。全て欠損品であるが、208は使用痕が観察される。石材は泥質凝灰岩、砂質凝灰岩である。

### 台石 (第73図、202)

欠損品1点のみの出土である。使用痕として磨面が観察される。石材は安山岩である。

### (3) 土製品

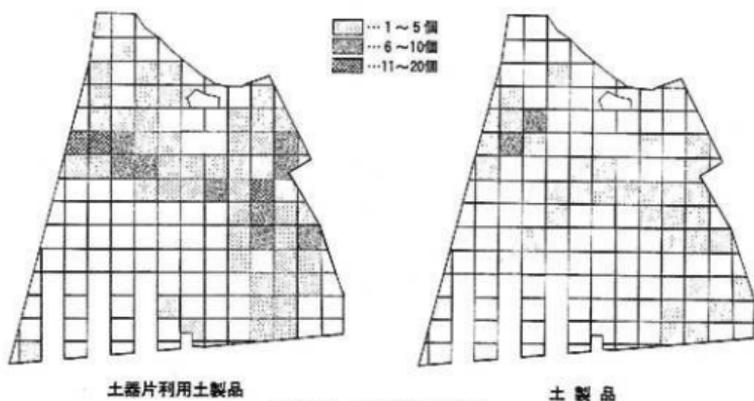
D<sub>7</sub>区遺構外より出土した土製品は、土偶16点、陰部状土製品1点、耳飾り8点、鐔形土製品25点、靴形土製品1点、土錘1点、有孔土製品4点、冑形土製品1点、その他の土製品5点、土器片利用土製品が最も多く226点出土した。また、動物形土製品を張り付けた土器の底部も2点みられた。

なお、野中堂環状列石と関連する土製品は、鐔形土製品1点、その他の土製品2点、土器片利用土製品7点である。

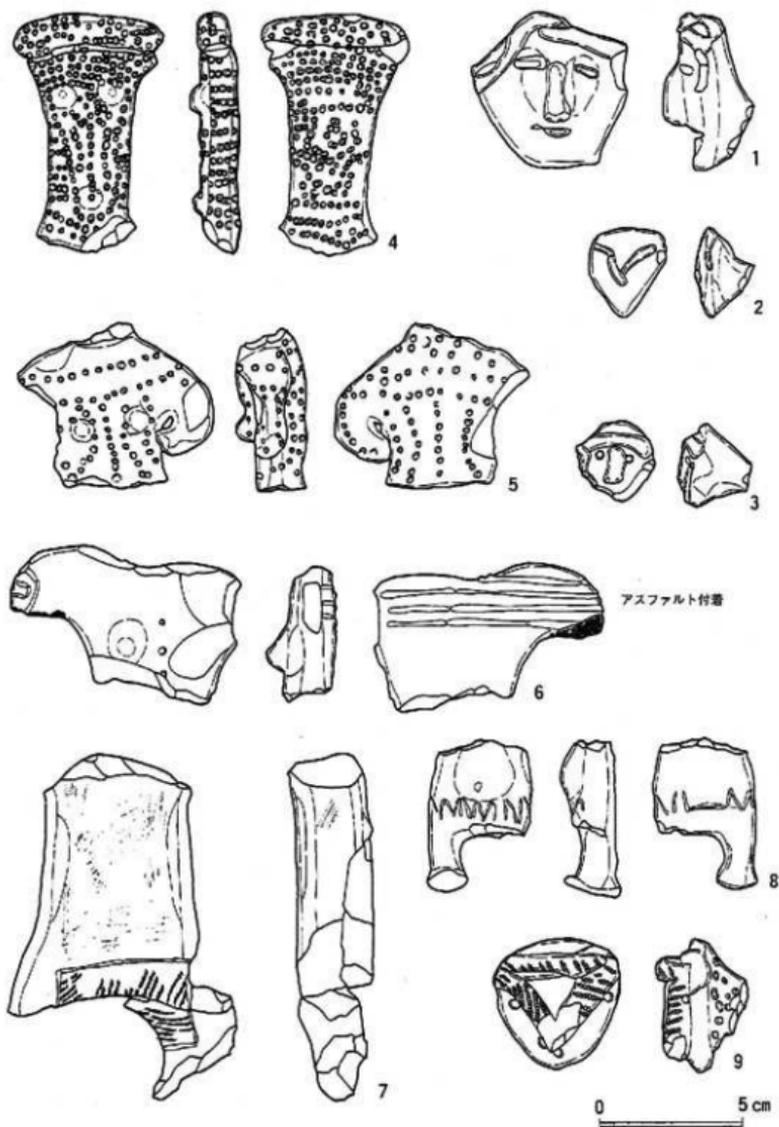
土器片利用土製品の分布状況については土器破片や石器と同じ傾向にあるがそれ以外の土製品は、領域以外からも数点の出土があった。土製品分布状況は第74図の通りである。

### 土偶 (第75図1~9、第76図10~12)

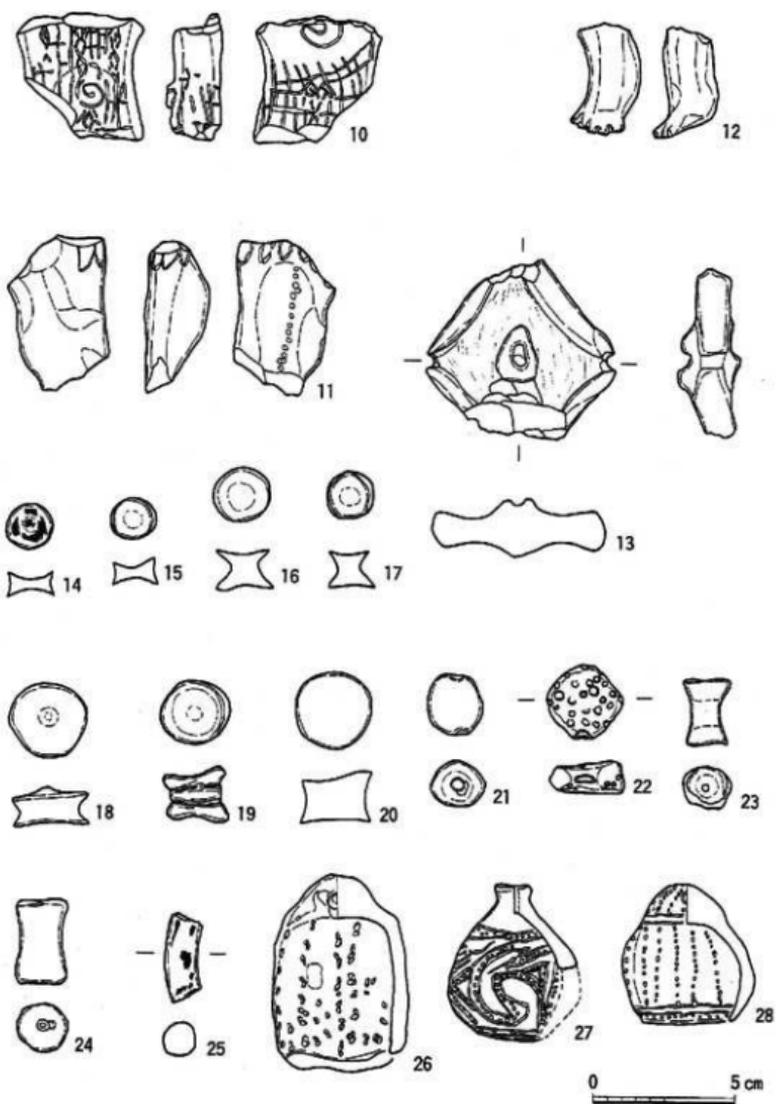
1~3、9は土偶の頭部。1は角張った顔に大きめの目、鼻が取り付けられ、髪型は今でいう七三分けのようで、比較的ていねいに表現してある。2は三角状の顔に眉だけを表現し、簡略化されている。3は丸顔で、特に眉の太さが特徴的である。9は三角状の顔に、目、口は



第74図 土製品出土状況



第75図 遺構外出土土製品実測図(1)



第76图 遺構外出土製品実測図(2)

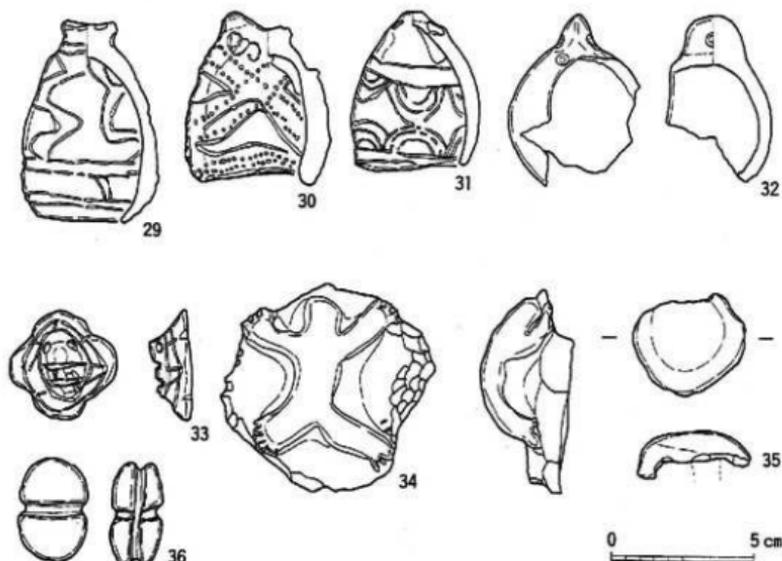
刺突紋、肩、鼻は粘土紐の張り付けにより大きく表現されている。眉鼻部分には単節斜縄文が指紋され、入れ墨等を表現していると思われる。4～8、10、11は土偶の体部である。4は頭部、腕部分が作り出されていない。体部には刺突文が施され、脚部は欠損している。7は股部分に沈線と無節紋により衣服と思われる表現がみられ、体部には研磨が観察される。6は欠損品で右腕破損部にアスファルトの付着がみられる。前面は刺突文、背面には沈線が施されている。5、8、10、11は体部で沈線と刺突文が施され、欠損品であるが、女性を表現しているものである。12は脚部でその他にも4点、腕部が1点出土した。

**陰部伏土製品 (第76図13)**

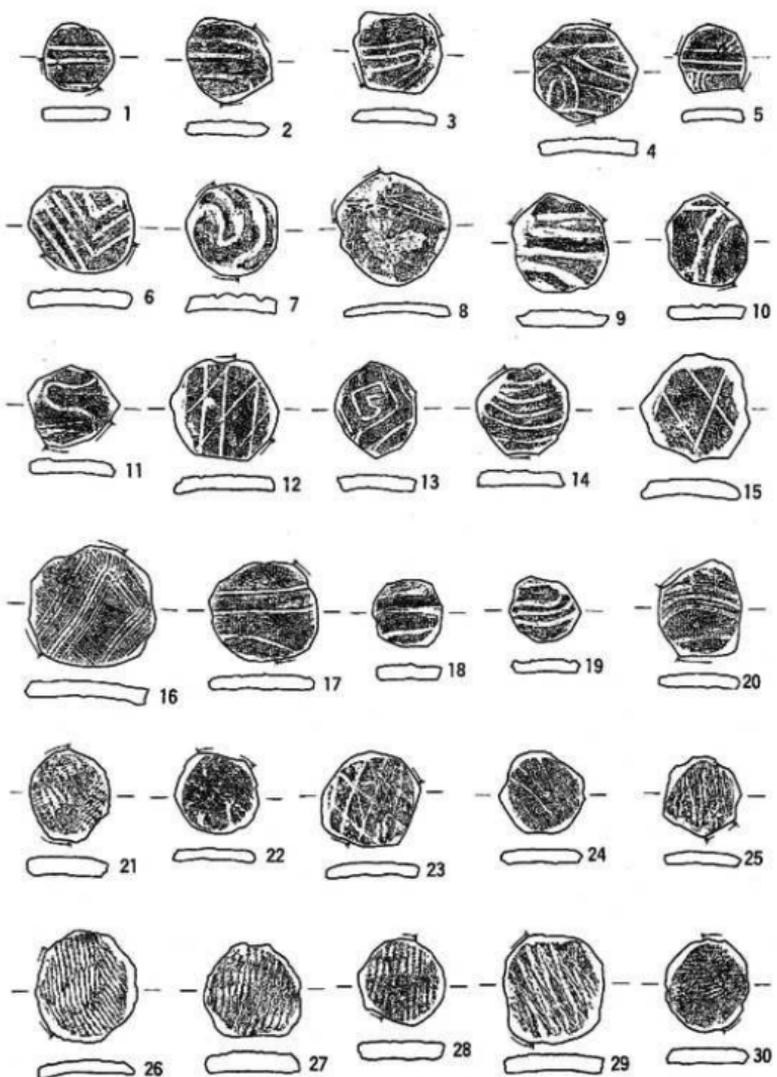
欠損品であるが、女性の陰部を表したものである。陰部の表現は通常土偶本体にみられることが多いが、女性の性器を単一で表現したものが出土したのは今回が初例である。土偶では簡略化されて表現されているが、極めて抽象的に形作られている。

**耳飾 (第76図14～20・25)**

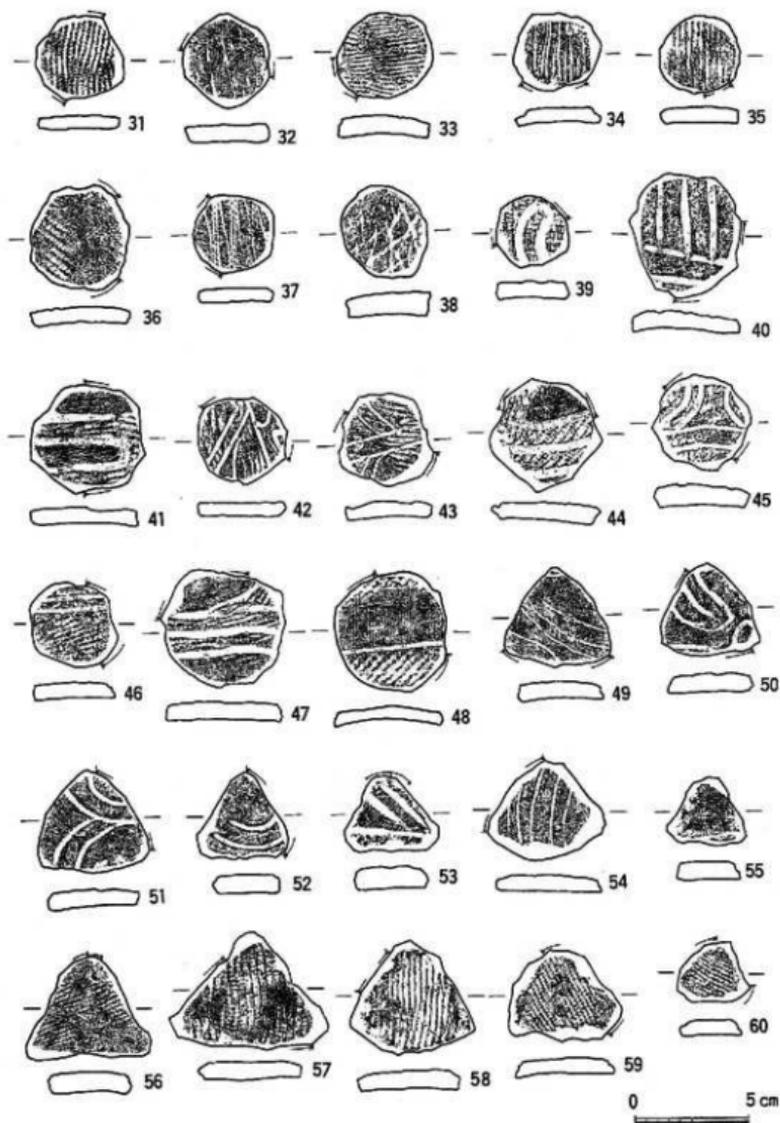
14～20耳栓。14には赤色顔料が付着、18は中央部に小さな突起がみられる。19には側面部に沈線による文様が施されている。25は滑車状耳飾で、赤色顔料が付着している。



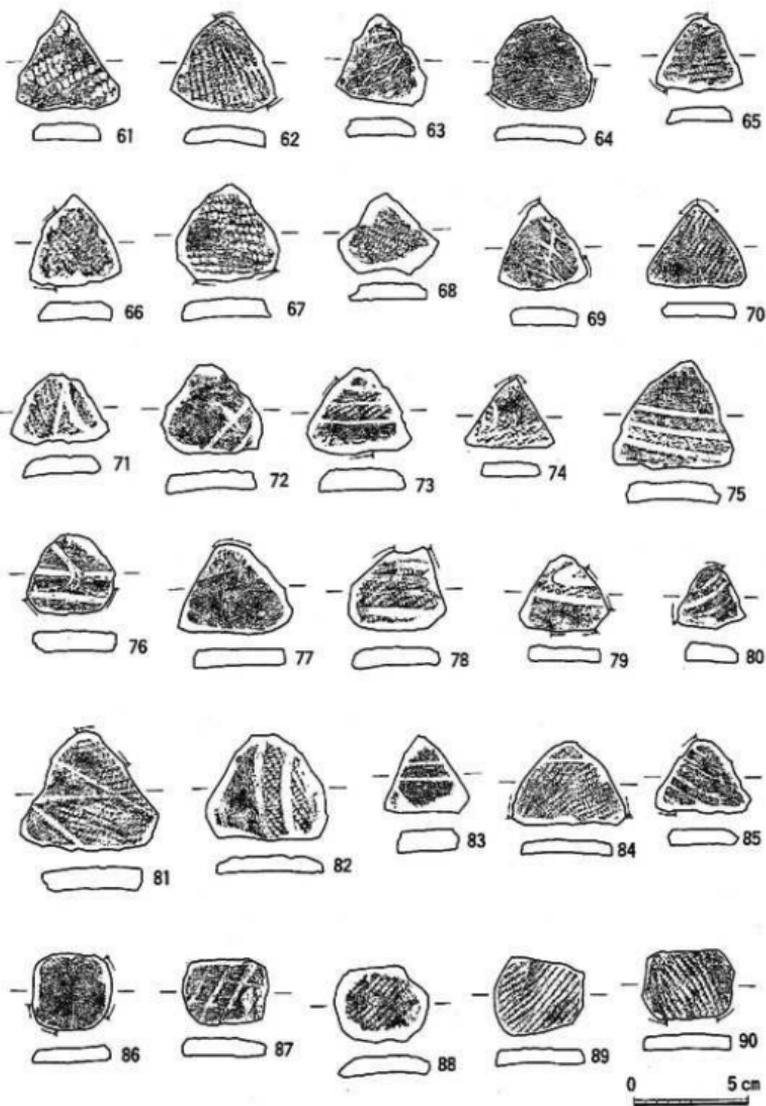
第77図 遺構外出土土製品実測図(3)



第78图 遺構外出土土製品拓影图(1)



第79圖 遺構外出土製品拓影圖(2)



第80圖 遺構外出土土製品拓影(3)

#### 有孔土製品 (第76図21~24)

孔を有する土製品を一括した。23、24は管状、21は楕円形でそれぞれ長軸方向に貫通孔を有する。22は方形で刺突文が施され、両角に貫通孔を有する。

#### 鍔型土製品 (第76図26~28、第77図29~31)

開口断面が円形のもので楕円形のものがある。貫通孔は鍔部の短軸方向のものと長軸方向に(26、29~31)穿孔されるものと、鍔部上部から開口部に貫通するもの(27)とがある。無文のものが多いが、沈線文、刺突文、沈線文と刺突文の組合せ等により文様が構成されている。

#### 靴形土製品 (第77図32)

欠損品であるが、胴部中央に円形の孔を有し、刺突による文様が施されているようである。

#### 土鍾 (第77図36)

短軸方向及び側面を一周するように沈線が巡らされている。

#### 箕形土製品 (第77図35)

箕を模したと考えられる土製品である。茎の部分は欠損している。

#### その他の土製品 (第77図33)

用途不明および形状不明のものを一括した。33は土板に、沈線により顔のような文様を施した粘土を張り付けたものである。

#### 土器片利用土製品 (第78図、第79図、第80図)

土製品の中で最も多く出土した。形態的に円形(176点)、三角(60点)、方形(5点)に分類され、円形が圧倒的に多い。整形技法は打ち欠きと研磨(←→で表現)があり、前者によるものが多い。

#### 動物形土製品を張り付けた土器 (第77図34)

うつ伏せになった状態の動物形土製品を張り付けた土器の底部である。2点出土した。

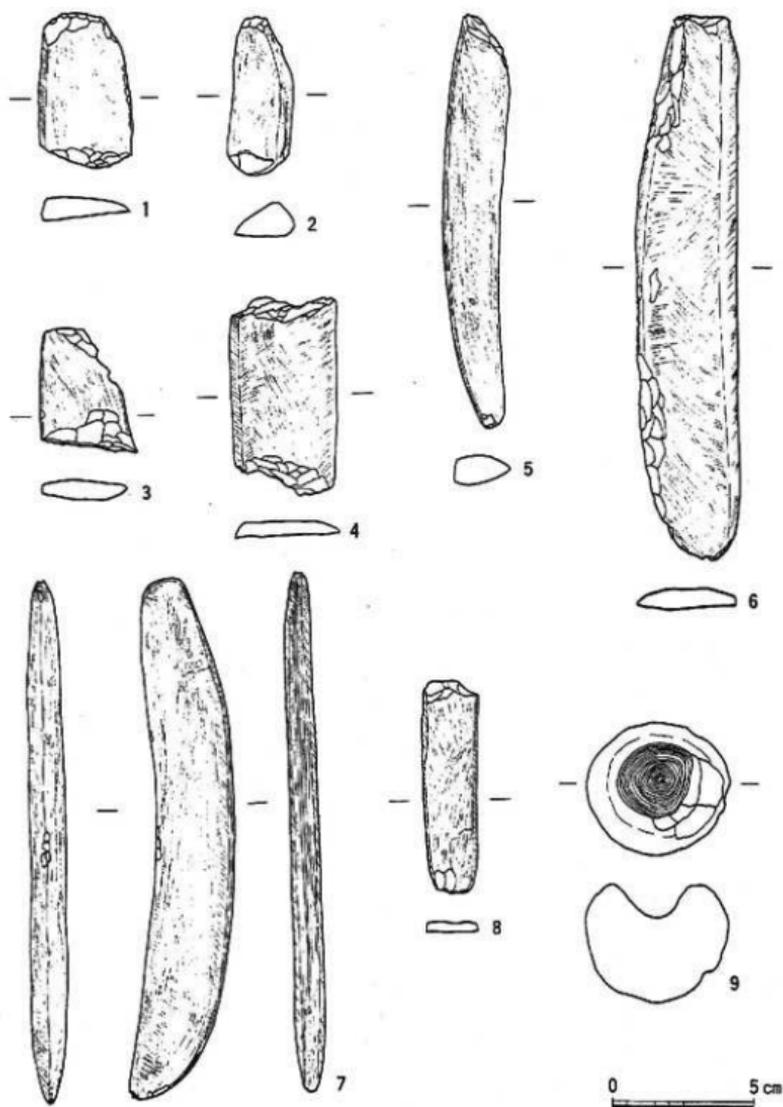
#### (4) 石製品

D<sub>7</sub>区遺構外より出土した石製品は、石刀8点、石冠2点、石棒2点、円形石製品8点、三角型石製品2点、凹部を有する石製品1点、棒状石製品1点、軽石製石製品17点、その他の石製品2点が出土した。野中堂環状列石に関する遺物は軽石製石製品1点である。

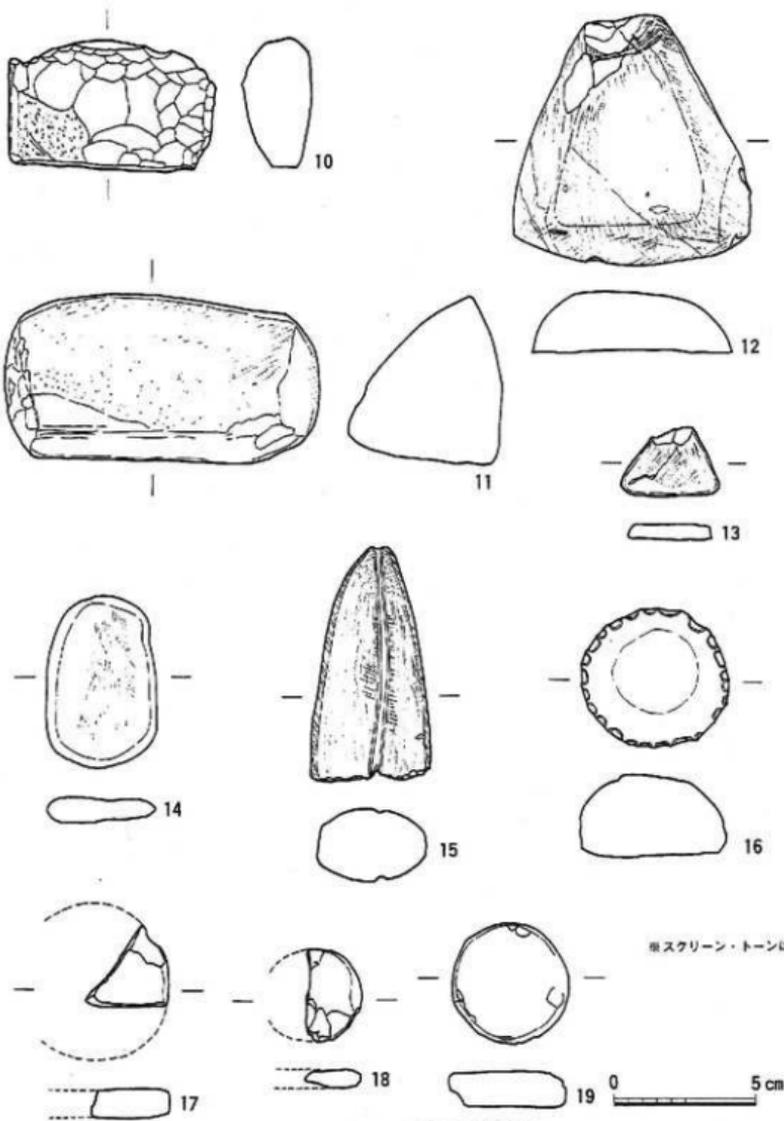
出土分布状況は第81図の通りで、他の遺物の出土状況と同じ傾向にあるといえよう。



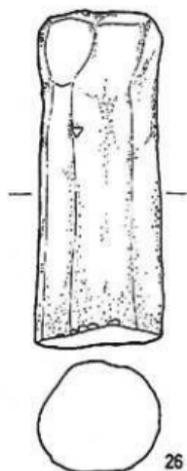
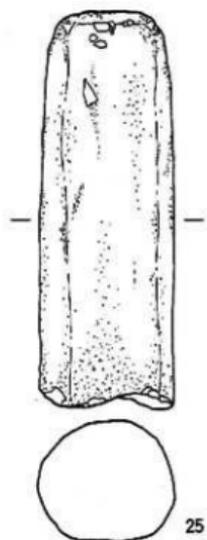
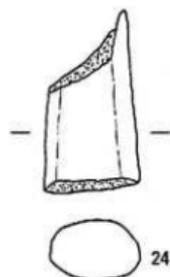
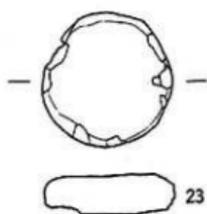
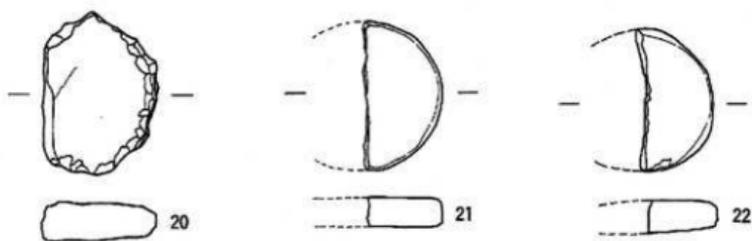
第81図 石製品出土状況



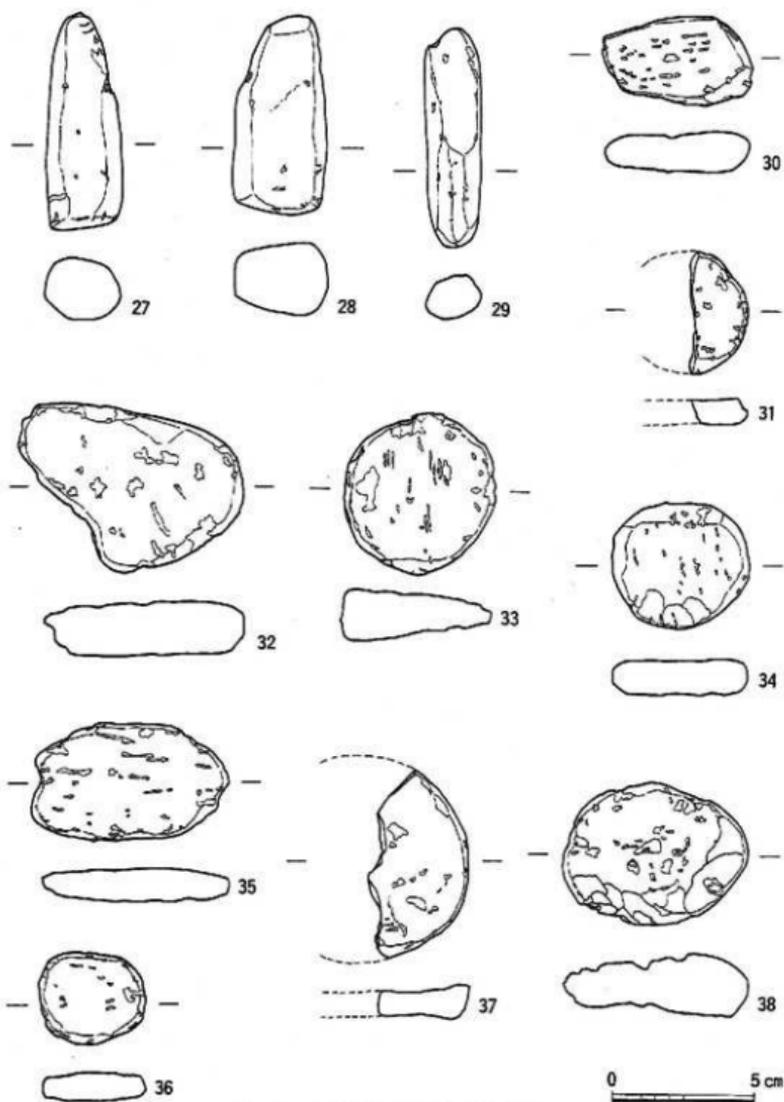
第82图 遼寧外出土石製品実測図(1)



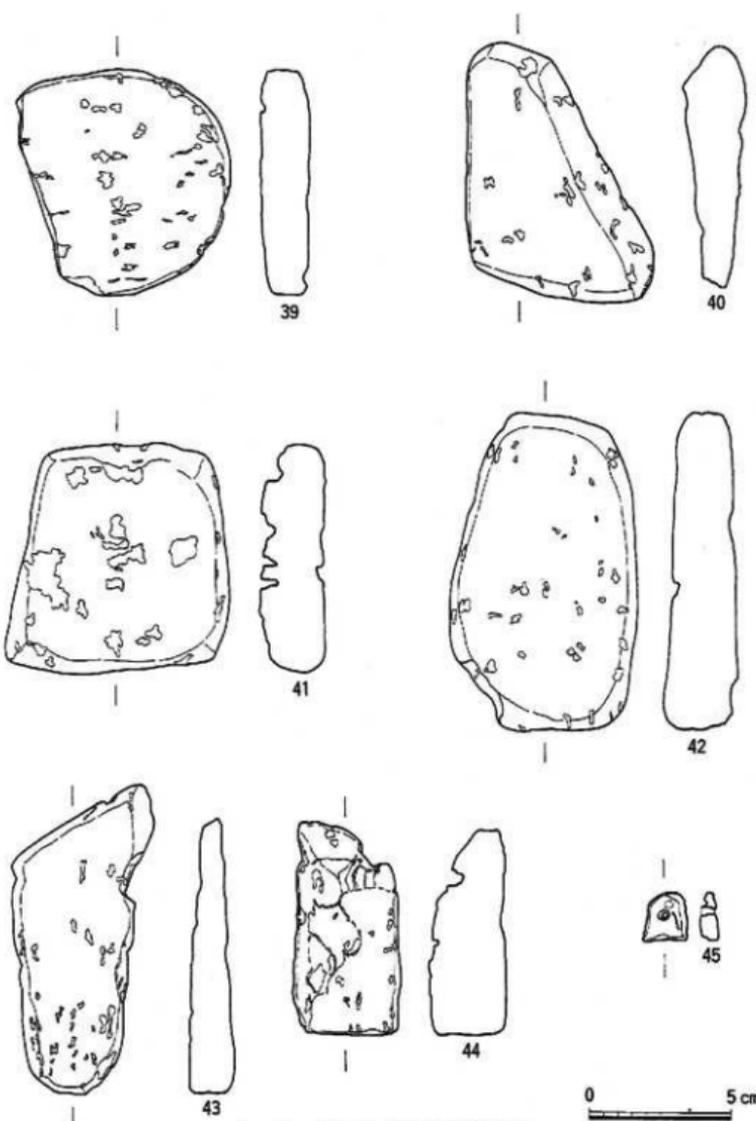
第83図 遺構外出土石製品実測図(2)



第84图 遼構外出土石製品実測图(3)



第85圖 遺構外出土石製品実測図(4)



第86圖 遺構外出土石製品実測圖(5)

0 5 cm

#### 石刀 (第82図1～8)

欠損品が多いが、いずれも内反りの石刀で、7は背刃の部分に一条の溝を持つ。石材は全て黒色頁岩である。

#### 石冠 (第83図11)

研磨によって成形されている。横断面は三角形状である。石材は凝灰質泥岩である。

#### 石棒 (第84図25・26)

25は現存長28.5cm、26は現存長22.4cmで、石材は凝灰質泥岩である。

#### 円形石製品 (第83図16～19、第84図20～23)

打ち欠き、研磨により、円形・板状に成形された石製品である。16は側面を溝状に研磨して作られている。使用される石材は、凝灰質泥岩である。

#### 三角形石製品 (第83図12・13)

打ち欠き、研磨により、三角形・板状に成形された石製品である。いずれも全面研磨により形作られている。石材はある。

#### 凹部を有する石製品 (第82図9)

凹部を有する球状の石製品で、凹部には螺旋状の線が観察される。石材は凝灰質泥岩である。

#### 棒状石製品 (第84図24)

破損品であるが、研磨によって棒状に成形しているものである。石材は凝灰質泥岩である。

#### 軽石製石製品 (第85図、86図)

軽石(軽石質凝灰岩)を円形、楕円形、方形、三角形、棒状等に成形したものである。45は孔を有し、欠損品である。

#### その他の石製品 (第83図14・15、第83図10)

14は扁平な川原石に線が多数に刻まれている。15は定角式磨製石斧の破損品を転用し、基部から刃部にかけて溝を有している。10は打ち欠きにより、半円形に成形されている。石材は10が黒色頁岩、14が凝灰質泥岩で、15は緑色凝灰岩である。 (花海 義人)

## 第IV章 分析と考察

万座環状列石を中心に、建物跡・土壌・遺物廃棄域が同心円状に広がることはこれまでの調査によって報告されている。

この章では同列石と最も係わりの深い建物跡・土壌について、分析を試みる。

### 1. 建物跡

建物跡については、第4次・5次調査で万座環状列石隣接地に分布し、しかも同列石を取り囲むのではないかと推定された。また、第7次調査では同列石外帯から北側150mの台地縁辺に営まれた住居域にも存在することが明らかにされた。本調査を含めその数は55棟におよぶ。その内52棟は同列石を取り囲むように分布している。建物跡の構築時期は出土遺物から縄文後期前葉～中葉と考えられ、性格としては万座環状列石の配石に対応するものとして「祭祀施設」と推定された。なお、建物跡は土壌・フラスコ状土壌と重複するものが多く、互いに切り合う状況を示している。

ここで用いる資料は、同列石隣接地に分布する52棟の内、I類（方形）20棟、II～V類（方形・六角形）27棟の計47棟（分類VI～VIIIを除く）である。

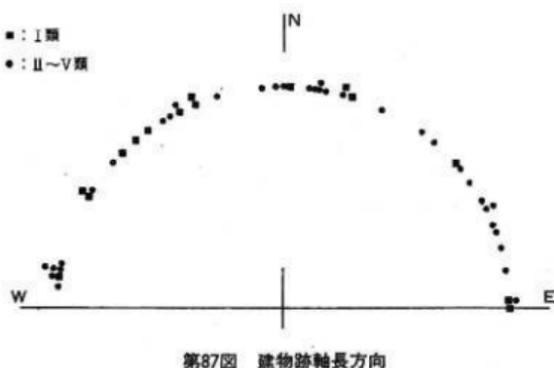
建物跡は、第4次報告書で分類しており、その後の分類の増減はない。柱穴4本、6本または8本からなる建物跡で、柱配置は方形または六角形を示す。規模は方形のものが長軸2.2m～4.2m、六角形のは軸長3.3m～5.9mを測る（第89図）。規模としては六角形建物跡が大型であるが、柱穴径・柱径は方形建物跡のものが大きく、深い。これら建物跡の配置をみると万座環状列石隣接地から、同列石の半径の約1.5倍の円環内に分布する。さらに建物跡は重複によって数棟からなる群を構成するが群内の建物跡形態が六角形と方形で構成されるものと、方形のみで構成されるものがある。特に混在する群では六角形建物跡の重複が著しい。

第87図は建物跡の長軸・軸長（以後 軸長という）の振れを図化したもので、軸長方向は集中することはない。ある方向を意識したものであれば軸長方向は集中する傾向を示すものと想定されるが、同図では看取されない。一方、建物跡の軸長を同列石中央から放たれた放射ライン（求心線と呼ぶ）と照らし合わせると、その軸長が求心線と同一方向を向くものと、それに直交するものが看取される。これは建物構築に際しては常に同列石（中央）を意識のなかに有ったものと推測される。

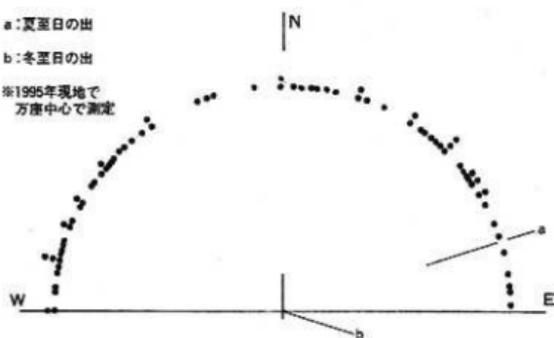
建物跡の分布は上記の特徴の他にも認められる。同列石北側（D<sub>1</sub>区、D<sub>2</sub>区、D<sub>3</sub>区、D<sub>4</sub>区）では建物数も多く、しかも建物群と土壌群が明確に区画されている。これに対し、同南側（本年度調査区D<sub>7</sub>区）では建物が少なく、土壌と混在した状況を示している。本来は中心を同じくす

る円環の遺構配置を意識していたものであったが、何世代にも渡る時間の経過やなんらかの要因により建物で構成されるべき円環と土壌で構成されるべき円環に歪みが生じ、その一部が重複することになったものと考えられる。

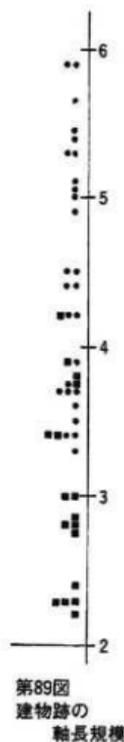
万座環状列石外帯の組石遺構の密度の高低については水野正好、阿部義平、林謙作氏(註1)らが注目・指摘しているところである。林氏(註2)は「はじめから環状の配置を念頭においていたとすればこのような偏りが生じるのは不自然」であり、「野中堂・万座の外帯も、内帯を中心としながら新しい場所に墓を作りつづけた結果」とした。岩手県西田遺跡の遺構の分布状況の分析から数回の移動が重なり環状となったことを踏まえ、大湯環状列石でもこの状況がみられるとし万座環状列石を例に取り、区画(埋葬区)の移動を指摘している。これ以前に水野



第87図 建物跡軸長方向



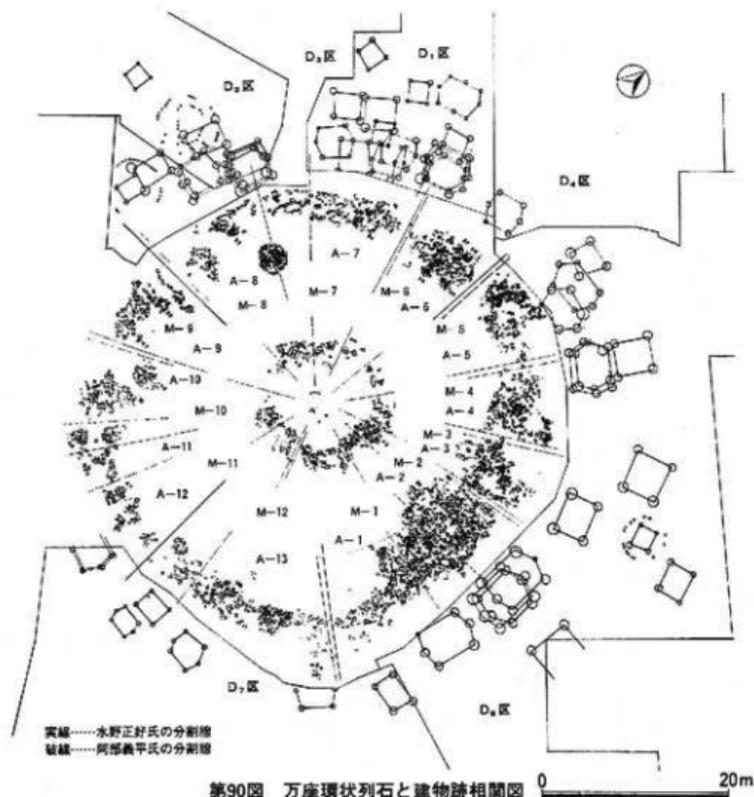
第88図 楕円形土壌の長軸方向



第89図  
建物跡の  
軸長規模

氏(註1)は、組石遺構の濃淡にふれ「万座遺構にあっては、東・北の一大群に長期にわたる住居跡群を西・南の一大群に短期の住居跡群」を想定し、その長短が組石遺構の濃淡に反映しているものとした。林、水野氏の指摘を加味し、建物跡をみていくと、その分布に偏りがみられ、万座外帯組石に類似した分布状況を示している。これは両氏の指摘とも一致するが、区画の移転に伴うものなのか、住居跡群の存続期間の長短によるのか検討されなければならない。

建物跡をみると方形と六角形の柱配置が基本となっている。林氏(註3)は万座内・外帯を群別し組石遺構の形態分類を試みた。外帯北半分は3分割され、さらにこの分割は2分することができ、組石形態に偏り(同一種・混在)があることを指摘している。これは、万座隣接地で確認された建物跡の占地と類似している。さらに阿部義平氏(註4)も両環状列石の組石遺構の形態分類を試み、立石の有無と円と方という傾向を指摘しており、建物跡の形態と無関係とは



第4表 万座環状組石基群構成

大群(西南)			大群(東北)								
第6小群	第5小群	第4小群	第3小群	第2小群	第1小群	第1小群					
第12小塊	第11小塊	第10小塊	第9小塊	第8小塊	第7小塊	第6小塊	第5小塊	第4小塊	第3小塊	第2小塊	第1小塊
推定6基 (確實1基)	推定5基 (確實1基)	推定7基 (確實5基)	推定6基 (確實2基)	推定5基 (確實1基)	推定6基 (確實2基)	推定11基 (確實4基)	推定10基 (確實6基)	推定9基 (確實4基)	推定8基 (確實3基)	推定11基 (確實7基)	推定13基 (確實6基)
対応する建物数											
4棟	2棟以上	2棟	8棟	10棟	6棟	3棟	3棟	4棟	2棟	4棟	

水野氏作成の表に対応する建物数を書き直した。  
(註1)と同様、小塊はM-1で表示

思えない。

これまでの調査報告で、建物跡は重複や空白部分の存在から数棟からなるグループに分けられ、しかも最も近くにある列石外帯を構成する小塊と対応するとした。原則的には本調査においても変わらない。第5次調査において外帯を構成する各小塊内の配石数と対応する建物群の棟数が「環1の建物群は列石外帯の小塊に対応するように群別化され、個々の配石と建物が1対1の対応関係を有する」(註7)とした。水野氏(註1・第4表)の分割によると1小塊の配石数は5~13基(推定総数110基=外帯97基、内帯12、日時計状組石1基)となり、また阿部氏(註1・第5表)は140基(外帯121基、内帯17基、日時計状組石1基)の組石遺構の存在を想定している。第4、5表は両氏が設定した小塊・群の配石数とこれに対応する建物群の各群の数値を表したものである。柱配置の兄落としや、昭和27年・28年の調査でも万座外帯組石下より柱穴状ピットが確認されている。これらを含めると建物と配石数の比は1:1に近い数値になりうるであろうが、しかし現時点ではその数値に隔たりがみられる。

## 2. 土 壌

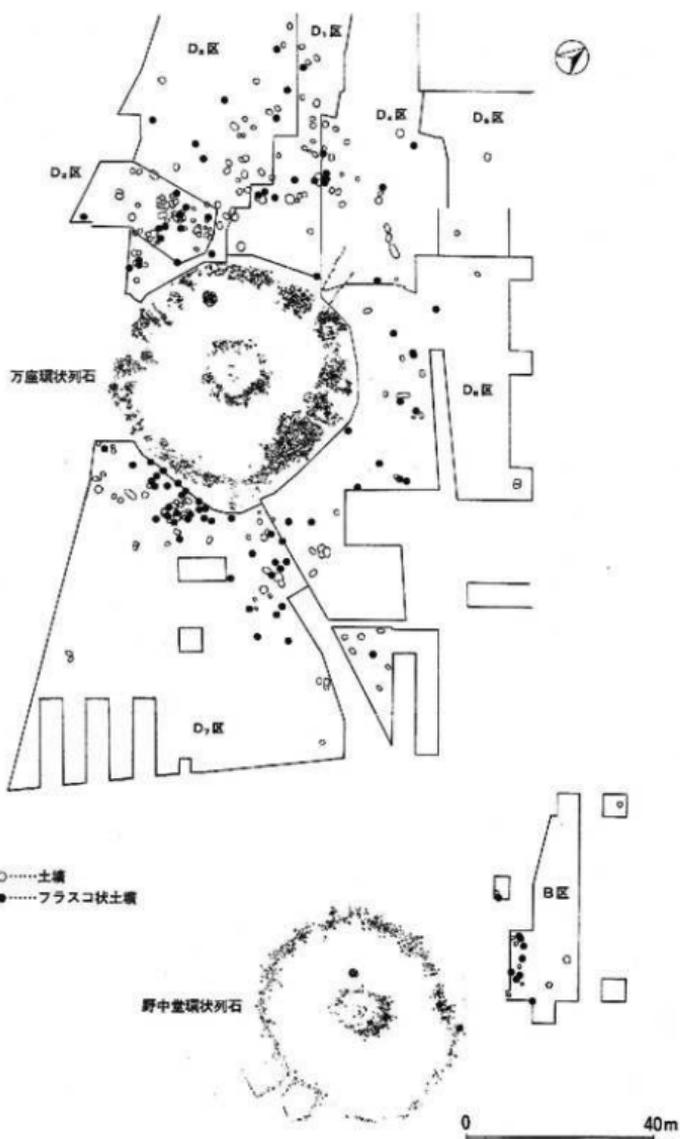
万座環状列石の周辺、特に同列石外帯から同列石の径と等しい距離の同心円内に濃淡を示し分布している。この環内に納まる土壌は190基を数え、その内訳は円形114基、楕円形76基である。土壌の構築時期は、土壌内出土遺物から縄文後前期葉のものが多く。

土壌と建物跡はお互いに切り合う状況を示している。その分布をみると2つ(建物群と土壌

第5表 万座環状組石基群構成

第13小群	第12小群	第11小群	第10小群	第9小群	第8小群	第7小群	第6小群	第5小群	第4小群	第3小群	第2小群	第1小群
推定9基	推定6基	推定6基	推定5基	推定9基	推定8基	推定7基	推定11基	推定10基	推定12基	推定8基	推定17基	推定11基
対応する建物数												
2棟	2棟以上	2棟	9棟	9棟	5棟	3棟	3棟	3棟	4棟	2棟		

阿部氏の分割をもとに表を作成した。  
(註1)と同様、小塊はA-1で表示



第91図 両環状列石と土境位置図

群)の円環の境界や同列石南側近傍に多くが見受けられる。これは建物跡の占地の特徴で述べたように、2つの円環の歪みによるものと想定される。

土壌は、重複・近接しながらいくつかの群に分割され、その群は弧状を呈するような配置がみられる。弧状の配置は一本木後口配石遺構群やG<sub>1</sub>区配石遺構群と類似している。

第88図は、土壌長軸をはっきりと示される楕円形土壌を用い、土壌長軸の振れを図化したものである。長軸は偏在する事無く放射状に分布している。仮に指標を弧状配置(又は円環)の外に求めたものとするとき長軸方向は偏った分布となるはずである。これは土壌の構築に際しても、建物跡と同様、列石を意識したことが看取される。(藤井 安正)

- (註1) 『発掘が語る日本史1 北海道・東北編』1986年  
「Ⅱ 縄文時代 3 マツリと記念物」P87~89  
「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究第26巻3号』1979年
- (註2) 水野正好 「環状列石墓群の意味するもの」『信濃20-4』1968年
- (註3) (註2)と同じ  
「Ⅱ 縄文時代 3 マツリと記念物」『第66図 大湯 万座の配石墓群』
- (註4) 阿部義平 「配石」『縄文文化の研究 9』雄山閣 1983年  
阿部義平 「口時計の考察—大湯環状列石の配石類型の意味—」  
『よねしろ考古 第2号』1986年
- (註5) (註2)と同じ
- (註6) (註4)と同じ
- (註7) 秋元信夫 「第四章 分析と考察 1.建物跡について」  
『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(5)』1989年

## 第V章 調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市の北東部、大湯川の左岸に形成された標高180m程の舌状台地、通称「風張台地」が最も台地幅を狭める地点に位置する。

大湯環状列石および同周辺遺跡の発掘調査は、国・県の協力と指導を得、昭和59年から開始し本年度で12年目となった。この間平成2年には周辺遺跡のほとんどが特別史跡に追加指定されるに至った。また、平成2年度からは追加指定地の公有化事業を開始、平成4年3月には「特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想」、同7年3月には「同環境整備基本計画」をまとめている。平成4年度からは「同基本構想」に基づき、史跡の環境整備の急がれる万座環状列石隣接地の発掘調査に着手している。このことから本年度の発掘調査区(D<sub>7</sub>区)を、万座環状列石南側隣接地に設定した。本調査を含めて同列石隣接地の調査は6回目となり、万座外周3/4を取り囲むまでに至った。

D<sub>7</sub>区で確認された遺構は、建物跡7棟、柱穴状ピット83個、環状配石遺構1基、立石遺構2基、焼土遺構5基、Tピット6基、フラスコ状土塚40基、土壇54基である。これら遺構と共に完形・復元土器79点、縄文土器破片98箱(コンテナ換算)、石器1,886点、剣片2箱、土製品325点、石製品48点、自然遺物(炭化物)が出土した。

万座・野中堂環状列石の中心を通るラインはN-29-Eで、このラインは台地が最も狭まる地点を通過する。なお、野中堂環状列石の日時計状組石はそのライン上、万座のそれは5度西側(万座中心から)へ振れている。

二つの環状列石の新旧関係についてはこれまでに多くの研究者から注目されていた。本調査の目的のひとつであったが、各環状列石の影響下にある遺構や遺物廃棄域の重複はみられず、その結果を導き出すまでは至らなかった。今後予定される野中堂環状列石隣接地の調査結果を踏まえ検討されなければならない。

本調査において建物跡が万座環状列石南側近傍にも分布することが確認されたことによって建物と同列石を取り囲み分布することがまぎらぬものとなった。その確認数は少ないが建物跡の濃淡と万座外帯組石の濃淡は位置関係において対応する傾向が看取された。建物跡は万座外帯の配石小塊に対応する位置に構築され、しかも建物跡の軸長は同列石より放射された求心線に対し平行・直交しており、同列石を意識した構築となっている。このように建物跡は列石と密接な関係を持つことから「祭祀施設」と考えられる。

本調査区で確認された土壌については、建物跡(柱穴状ピット)と重複し、新旧関係が認められるものについては土壌が古い。構築時期は出土遺物から後期前葉のものが多い。その分布は土壌同志の重複や空白部から群に分割され、長軸方向が求心性を持ち、列石を意識したもの

であることが囁取された。

フラスコ状土壌はこれまでの調査のなかで確認数が最も多い。その分布をみるとこれまでは万座外帯とは建物跡を挟み列石より離れて分布する傾向を示していたが、本調査においては同外帯真近まで迫り、土壌と同様の分布を示している。柱穴状ピットに切られているものが多い出土遺物から構築時期は後期前葉のものが大半を占める。なお、フラスコ状土壌においては、一般的に貯蔵穴と認識されているが、極めて浅いものもあり、貯蔵用として十分に機能したであろうか。本土壌から耳飾りや三脚土製品といった装身具や祭祀的要素をもった遺物の出土があり、機能の再検討と化学的な分析の必要性を感じる。

Tピットはいずれも長楕円形を呈し、長軸方向は概ね東一西を向く。軸方向と配置から第1号・2号Tピット、6号・13号Tピットは対のものとしてとらえることができる。

遺物廃棄域は万座環状列石を中心として同心円状に広がる廃棄域1と本調査区東端に遺物集中箇所（廃棄域2）の2箇所が確認された。これ以外の地域からの遺物は無い状態に等しい。この2つの廃棄域は距離約10mの空白を置き、重複することはない。本調査区を二分するように確認された遺物廃棄域1は万座列石と深い関わりを持つ土壌群域に接して形成されることから同列石に、廃棄域2は野中堂環状列石外帯から同列石の径と等距離内にあることから同列石に伴うものと考えられる。なお、遺物出土状況図をみると、廃棄域1では分在密度に濃淡が認められた。しかもその淡い部分は、列石・建物跡・土壌を分割（区画）するラインと重なっており、廃棄域においても各遺構と同様に分割される傾向にある。

縄文土器のほとんどは遺物廃棄域からの出土である。早期、後期前葉～中葉に位置付けられるものであるが、後期前葉の土器破片が全体の95%以上を占めている。後期前葉の復元土器は廃棄域1・2の全域から、後期中葉の復元土器および破片は廃棄域1西側からの出土が多い。

本調査によって多量の剝片石器（石鏃・石匙ほか4種）、礫石器（石皿、磨石ほか5種）が出土した。三脚石器の出土はその分布が米代川上流にまで広がっていたことを示すものである。

土製品・石製品も多種多様に及び、祭祀的な要素が強い。動物形土製品を土器の底に貼りつけたものがある。動物種については推定の域を出ないが哺乳類の可能性が高い。東北地方北部で類例を増している。土器内部へ貼りつけ、外から隠すことを目的にしているようにも見受けられることから、日常什器とは考えにくい。また、靴形土製品と呼ばれるものは初例である。

（藤井 安正）

参 考 文 献

- 阿部 義平 「配石墓の成立」『考古学雑誌54巻1号』 1968年  
 「日時計の考察—大湯環状列石の配石類型の意味—」  
 『よねしろ考古 第2号』 1986年
- 林 謙作 「Ⅱ 縄文時代 3 マツリと記念物」  
 『発掘が語る日本史1 北海道・東北編』 新人物往來社 1986年  
 「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究 第26巻3号』 1979年  
 「縄文期の葬制—第Ⅱ部・遺体の配列、とくに頭位方向—」  
 『考古学雑誌第63巻3号』 1977年  
 「大湯環状列石の配石墓(1)」『よねしろ考古 第7号』 1991年  
 「大湯環状列石の配石墓(2)」『よねしろ考古 第8号』 1993年
- 宮 檉 泰 時 「日本の古代遺跡 24 秋田県」 保育社 1985年  
 「秋田県大湯遺跡」 縄文時代の「自然の社会化」  
 第4回雄山閣考古学賞記念シンポジウム 雄山閣出版株式会社 1996年  
 「貝殻沈線文糸土器様式」『縄文土器大観 1』 小学館 1989年
- 水野 正好 「環状列石墓群の意味するもの」『信濃20—4』 1968年  
 「ストーンサークルの意義」『季刊考古学第9号』 雄山閣 1984年
- 戸 沢 充 則 編 「縄文時代研究事典」東京堂出版 1994年
- 秋 元 信 夫 「環状列石と建物跡—大湯環状列石近傍に分布する建物跡の分析」  
 『よねしろ考古 第6号』 1990年
- 小 畑 巖 「高屋館跡の環状列石」『よねしろ考古 第8号』 1993年
- 成 田 滋 彦 「青森県の土器」『縄文文化の研究 4』 雄山閣 1984年  
 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観 4』 小学館 1989年
- 今 井 富 士 雄 「十腰内遺跡」『岩木山』 岩木山刊行会 1986年
- 鈴 木 道 之 助 「石器の基礎知識 Ⅲ」 柏書房 1981年
- 高 橋 忠 彦 「米代川流域の三脚石器」『よねしろ考古 第8号』 1993年
- 文化財保護委員会 「大湯町環状列石」 1953年
- 岩手県教育委員会 「西山遺跡」 1980年
- 岩手県博物館 「岩手県の土器 県内出土資料の集成」 1982年
- 大槌町教育委員会 「崎山弁天遺跡」 1974年
- 大迫町教育委員会 「立石遺跡」 1979年
- 鹿角市教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書1～8」 1985～1990年  
 「特別史跡 大湯環状列石発掘調査報告書9～11」 1991～1996年

# 報告書抄録

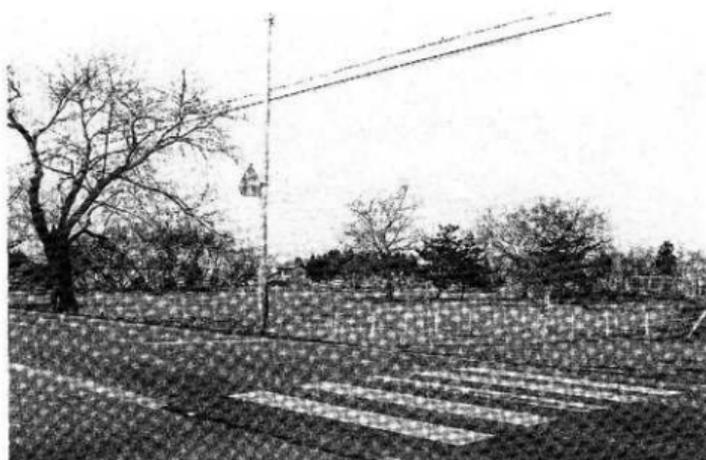
ふりがな	とくべつしせき たいよう環状列石第12次発掘調査報告書							
書名	特別史跡 大湯環状列石第12次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料							
シリーズ番号	55							
編著者名	鹿角市教育委員会 (生涯学習課 藤井安正・花海義人)							
編集機関	鹿角市教育委員会							
所在地	〒018-52 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1 TEL 0186-30-1111							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 <sup>m<sup>2</sup></sup>	調査原因
		市町村	道庁番号					
とくべつしせき 特別史跡 たいよう環状列石	秋田県鹿角市 十和田大湯 字万座 字野中堂 字一本木 後口	05209	123	40度 16分 20秒	140度 48分 49秒	19950410 ～ 19950906	3,176	史跡整備 に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
特別史跡 大湯環状列石	集落跡	縄文時代 後期	建物跡 柱穴状ピット 環状配石遺構 立石遺構 焼土遺構 Tピット フラスコ状土壇 土壇	7棟 83個 1基 2基 5基 6基 40基 54基	縄文土器 (後期前期~中期) 石器 (石鏃・石匙・環器・凹石等) 土製品 (土器・埴形土製品・耳栓) 石製品 (石針・筒状石製品・石棒)	万座・野中堂環状 列石を中核に広がる 集落跡		

## 鹿角市文化財調査資料一覧

刊行年	集	報 告 書 名	刊行年	集	報 告 書 名
昭和48	1	鹿角市文化財目録 第1集	昭和61	30	鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書(5)
49	2	鹿角市文化財目録 第2集	61	31	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)
50	3	黒沢家文書目録	62	32	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)
51	4	川口月 絵画調査報告書	63	33	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(4)
51	5	鹿角市文化財目録 第3集	63	34	花輪館跡試掘調査報告書(2)
51	6	大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報	平成元	35	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(5)
52	7	大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書	元	36	崎崎館跡発掘調査報告書
52	8	尾去沢館山関係文書(その1)	元	37	当麻館跡発掘調査報告書
53	9	尾去沢館山関係文書(その2)	2	38	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(6)
54	10	小平遺跡発掘調査報告書	2	39	秋田県鹿角市遺跡詳細分布調査報告書
54	11	鹿角市の民俗資料	2	40	下砂沢発掘調査報告書
55	12	鹿角市の建造物1)	2	41	天戸森の土器 天戸森遺跡出土縄文土器図録
55	13	毛馬内盆踊	3	42	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(7)
55	14	新斗米館跡Ⅰ次発掘調査報告書	4	43	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(8)
55	15	尾去沢館山関係文書(その3)	4	44	小枝指館跡発掘調査報告書
56	16	新斗米館跡Ⅱ次発掘調査報告書	5	45	特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(9)
56	17	長牛城跡発掘調査報告書	5	46	総合運動公園関連遺跡詳細分布調査報告書
56	18	鹿角市の建造物2)	5	47	地蔵野館跡発掘調査報告書
56	19	御休堂遺跡発掘調査報告書	5	48	赤坂B遺跡発掘調査報告書
57	20	鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書(1)	6	49	特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(10)
57	21	遺跡詳細分布調査報告書	6	50	赤坂A遺跡発掘調査報告書
57	22	高市向館跡発掘調査報告書	6	51	花輪古館跡発掘調査報告書
58	23	鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書(2)	7	52	特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(11)
58	24	鹿角市の建造物3)	7	53	赤坂A遺跡発掘調査報告書(2)
59	25	鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書(3)	7	54	大湯環状列石周辺遺跡 (鹿角市出土文化財管理センター施設事業)
59	26	天戸森遺跡発掘調査報告書	8	55	鹿角市の文化財
59	27	花輪館跡・下沢山遺跡発掘調査報告書	8	56	特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(12)
60	28	鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書(4)	8	57	黒土館跡発掘調査報告書
60	29	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)			



万座環状列石全景



調査区全景

PL 1 調査区全景



調査終了全景（西側）

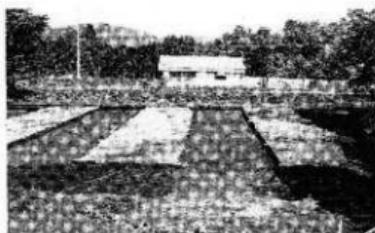


調査終了全景（東側）

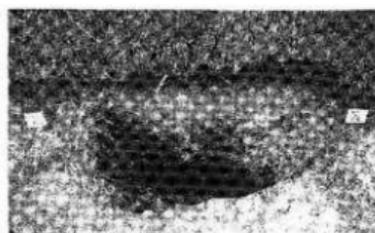
PL 2 調査区全景（終了）



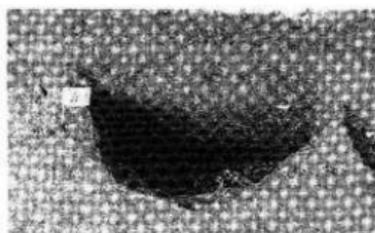
調査区東部



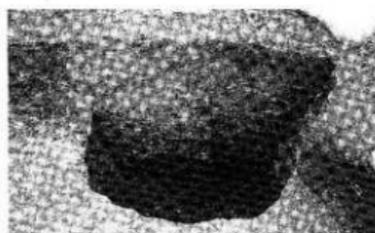
調査区南部



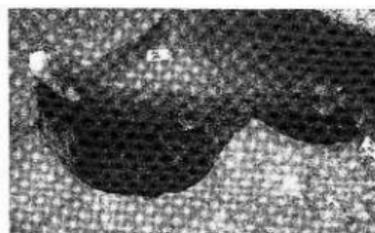
Pit 4・10



Pit26



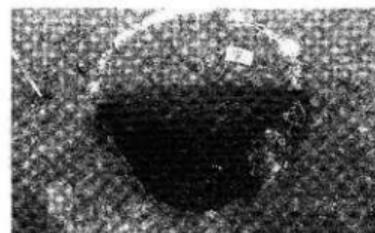
Pit27



Pit28・29



Pit40



Pit80

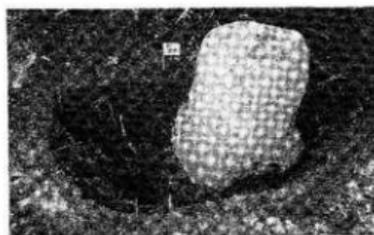
PL 3 調査区全景・柱穴状ビット



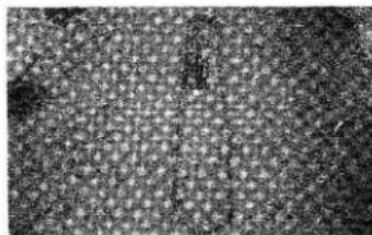
SX(S)03



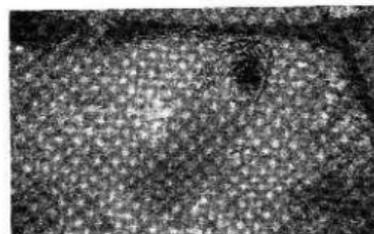
SX(S)02



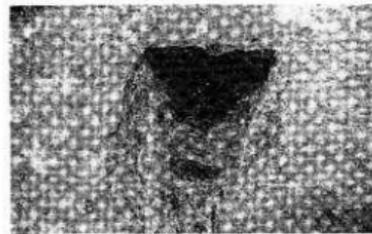
SX(S)03



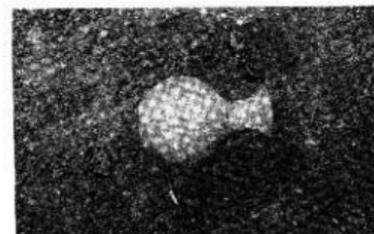
SK(T)01



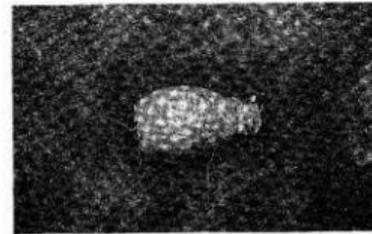
SK(T)02



SK(T)02



土器出土状況

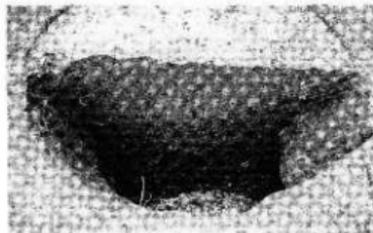


土器出土状況

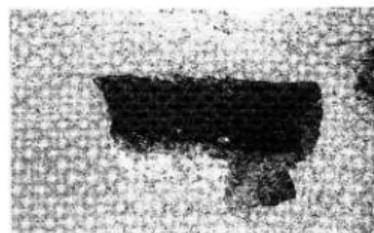
PL 4 SX(S)・SK(T)・土器出土状況



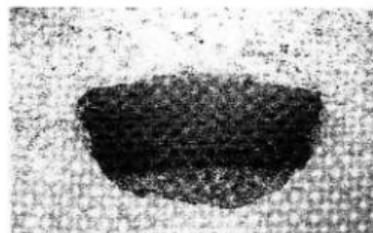
SK(F)11



SK(F)12



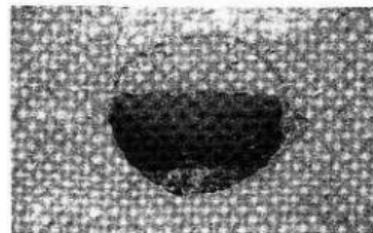
SK(F)14



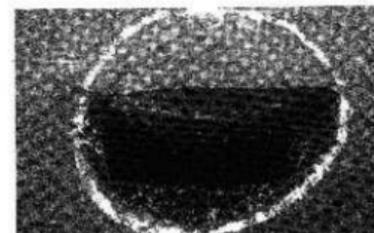
SK(F)15



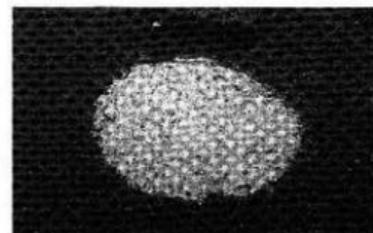
SK(F)16



SK(F)17

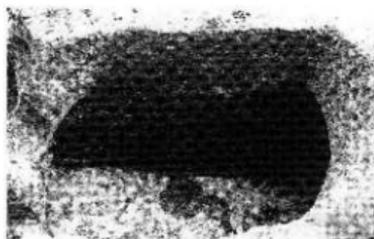


SK(F)23

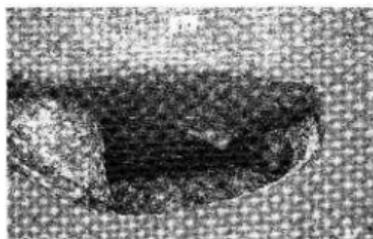


SK(F)32

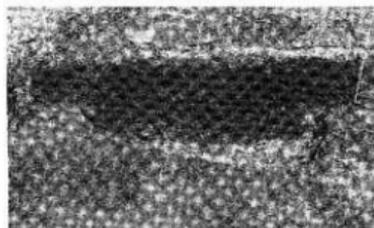
PL 5 フラスコ状土壌



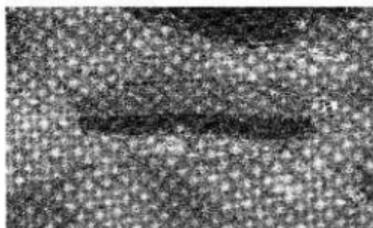
SK(F)56



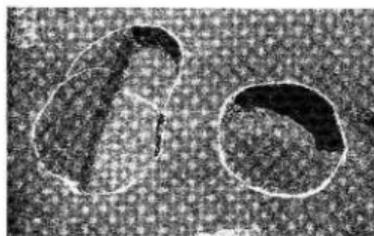
SK(F)58



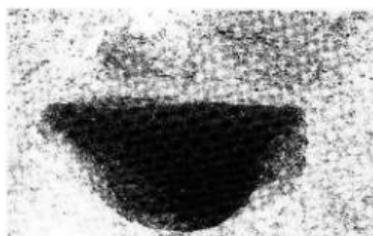
SK03



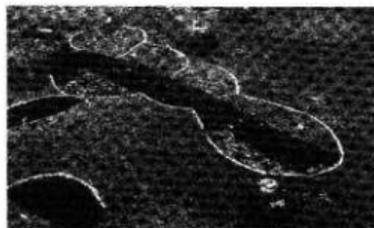
SK04



SK 5・7・8



SK10

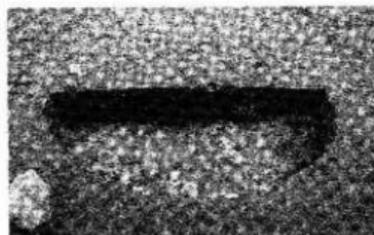


SK18・19・21

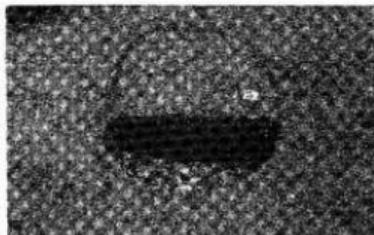


SK25

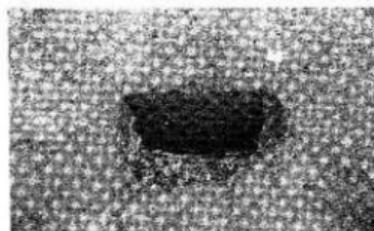
PL 6 フラスコ状土塊・土塊



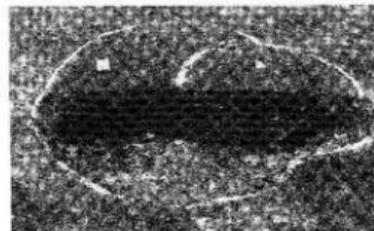
SK29



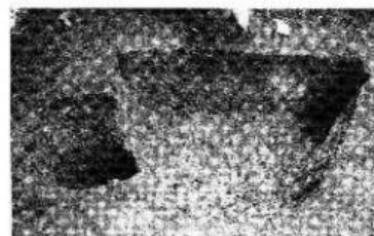
SK30



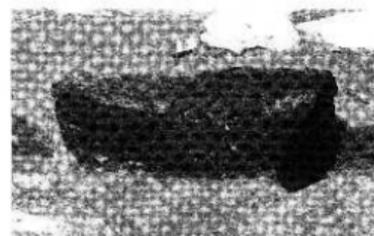
SK34



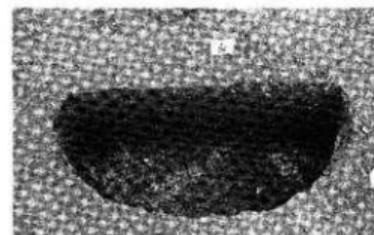
SK69 · 107



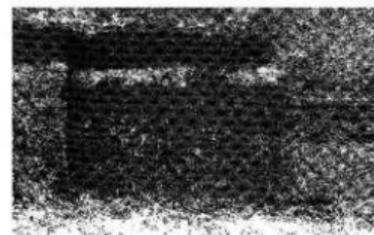
SK77



SK89

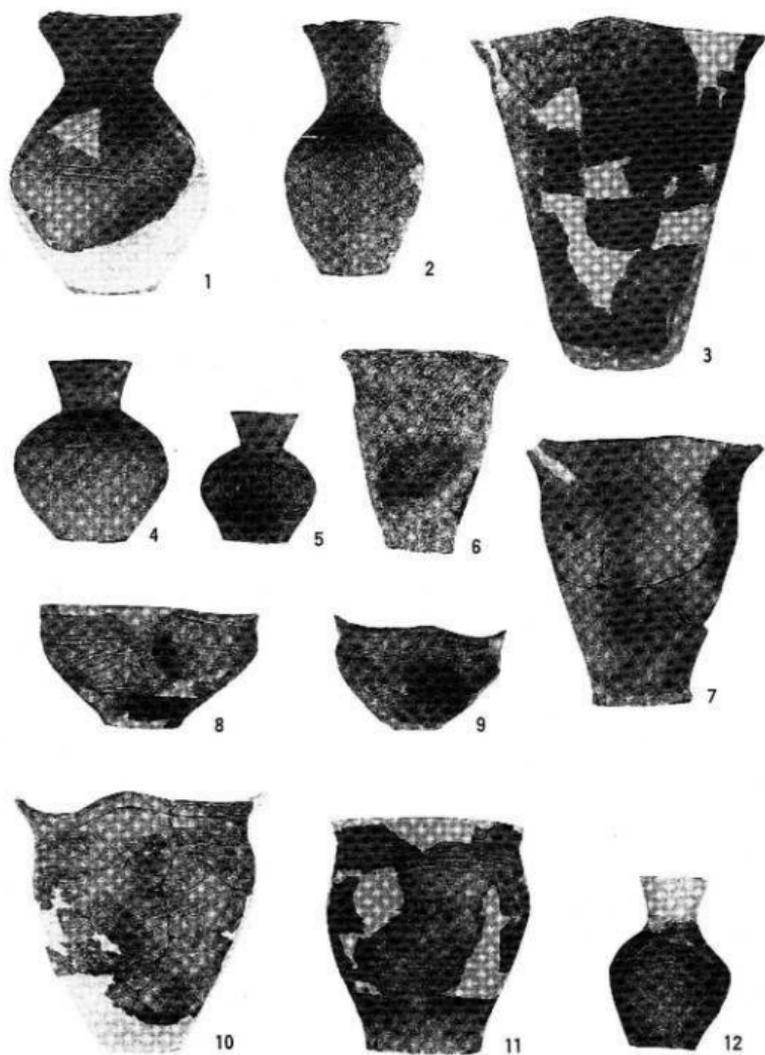


SK96



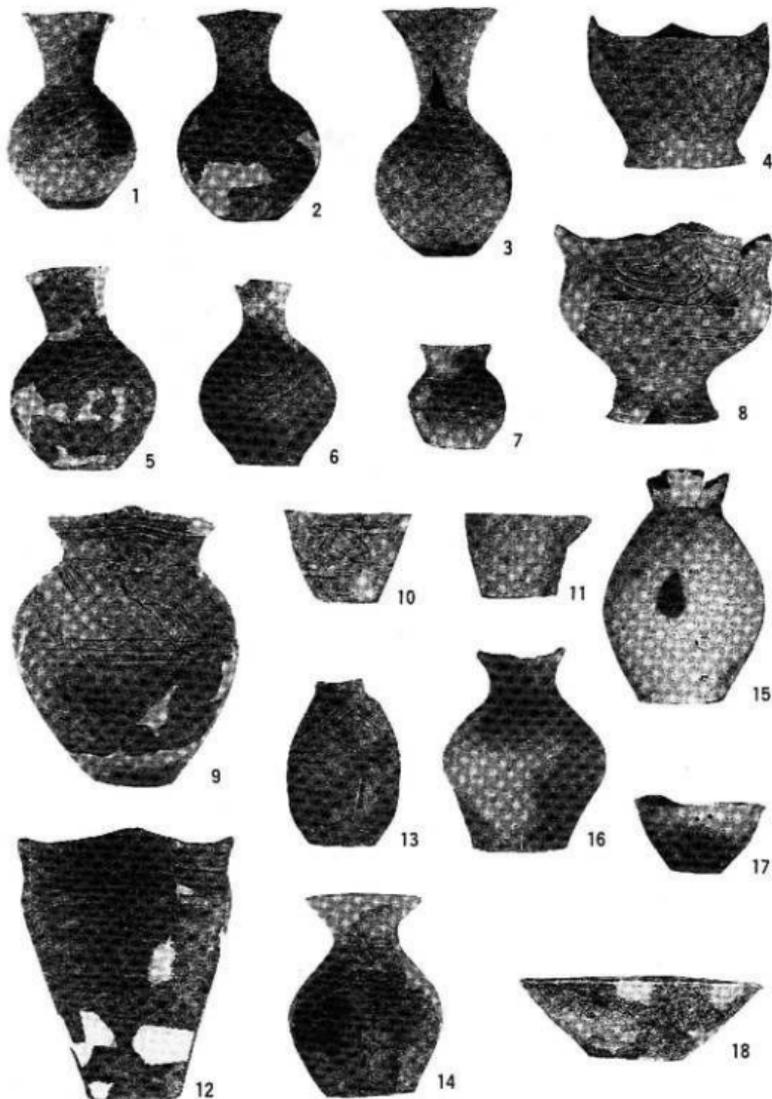
基本層序

PL 7 土壤・基本層序

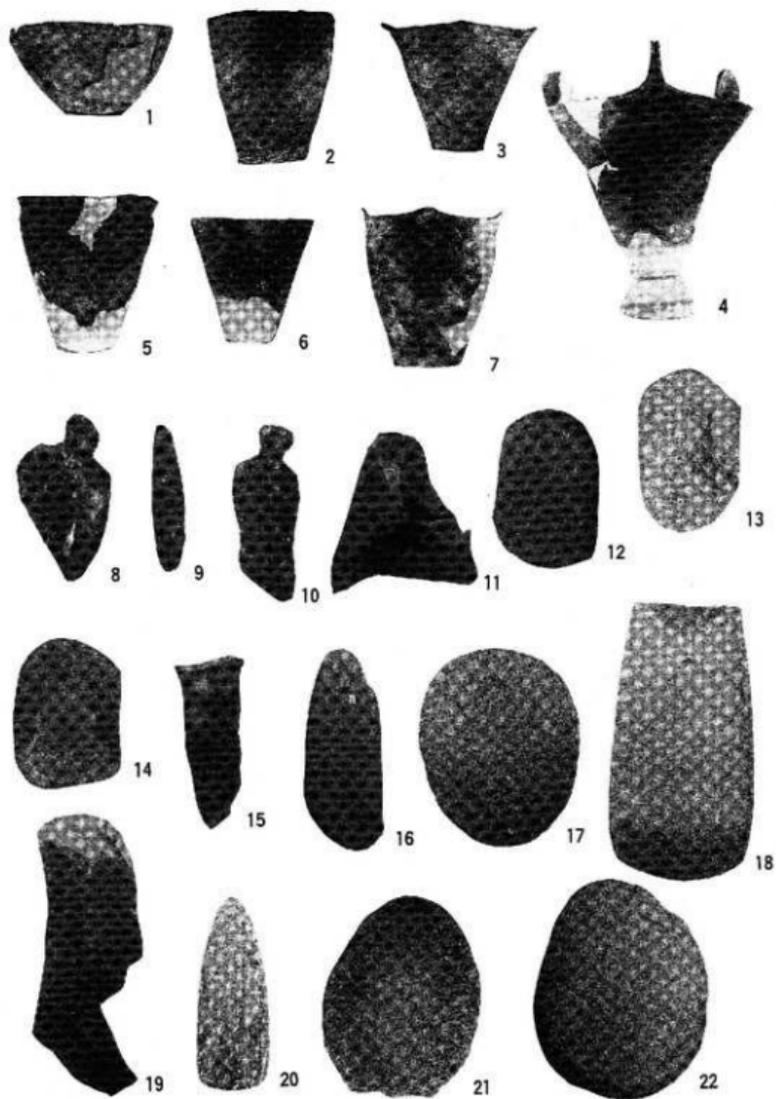


PL 8 出土土器(1)

1~7……波模内

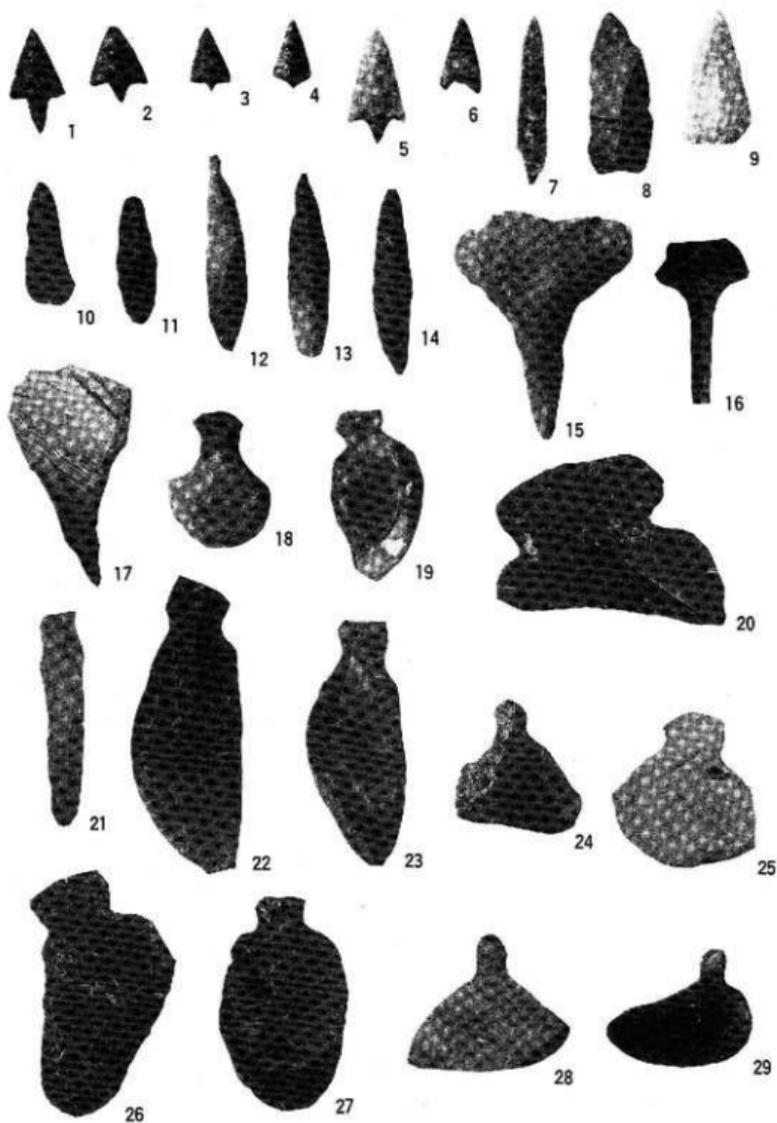


PL 9 出土土器(2)

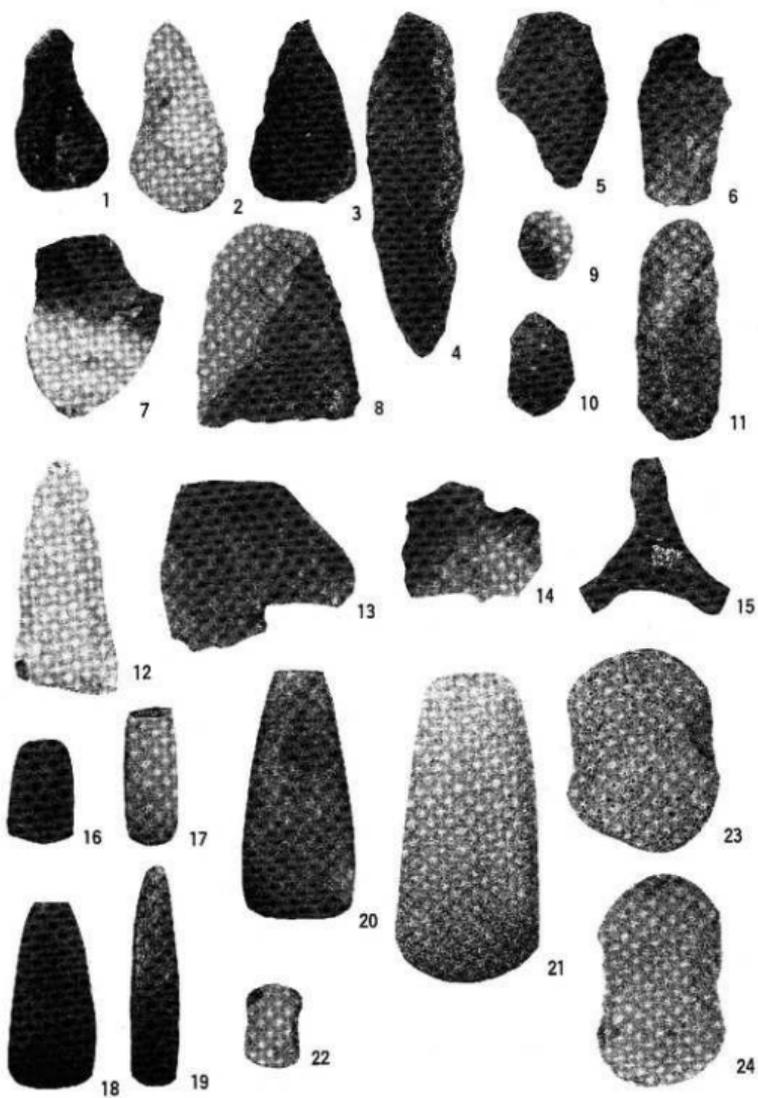


PL 10 出土土器(3)・出土石器(1)

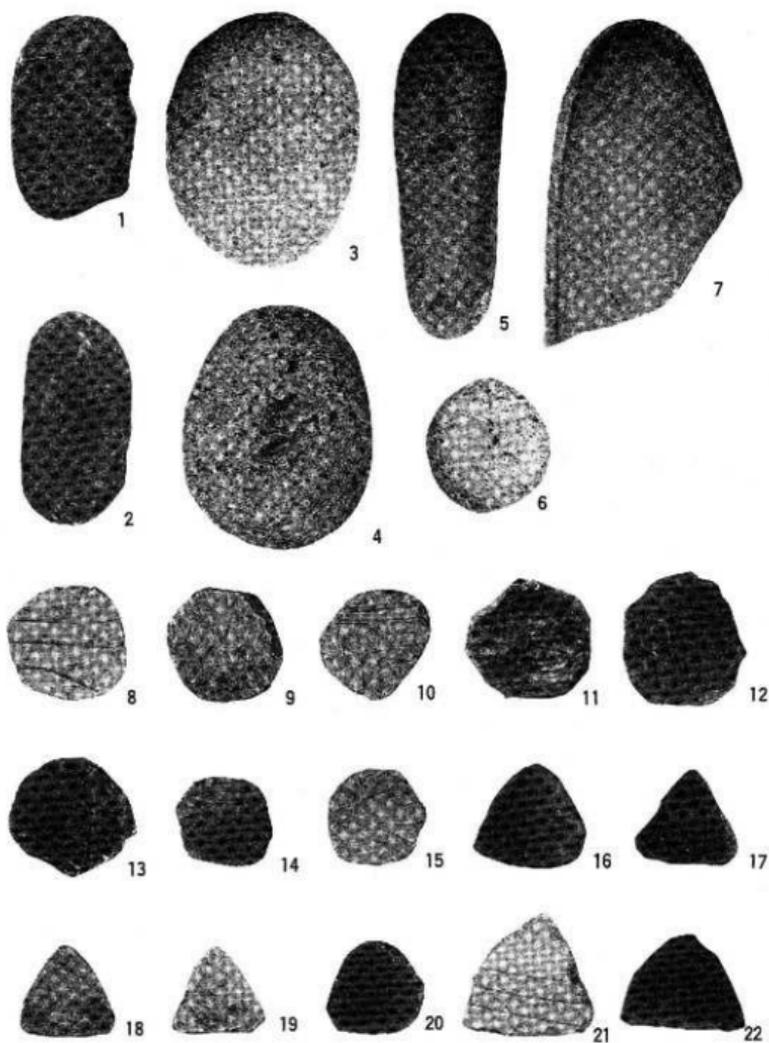
8~22……遺構内



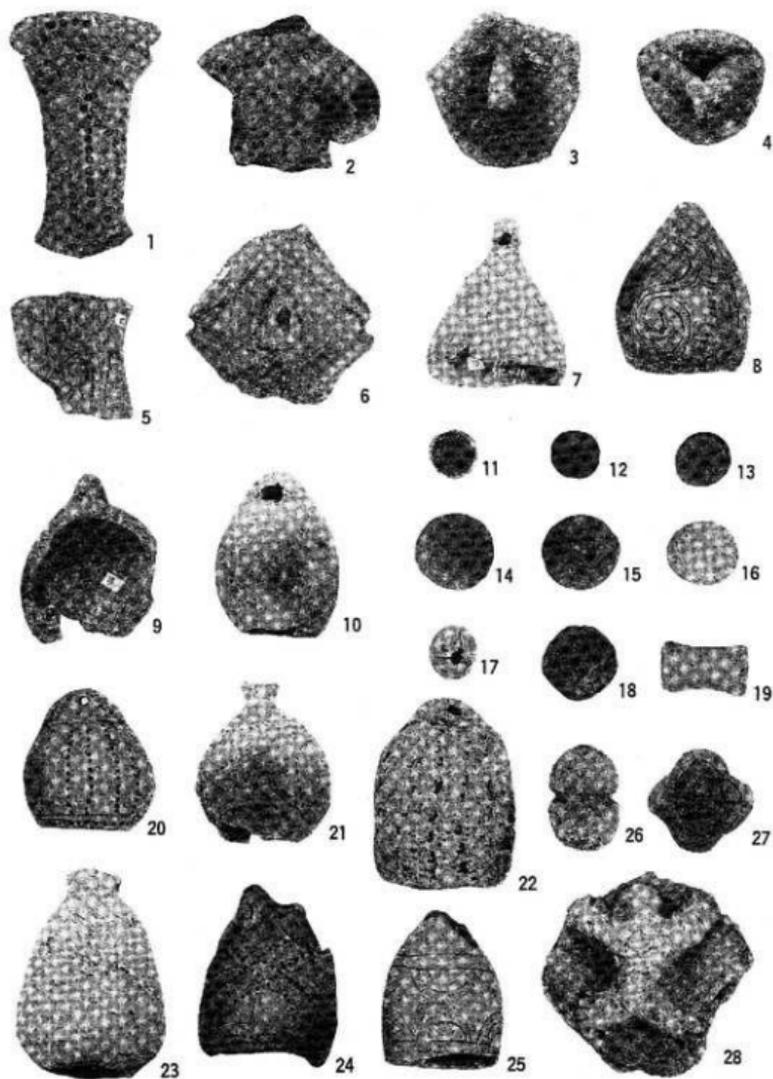
PL11 出土石器(2)



PL12 出土石器(3)

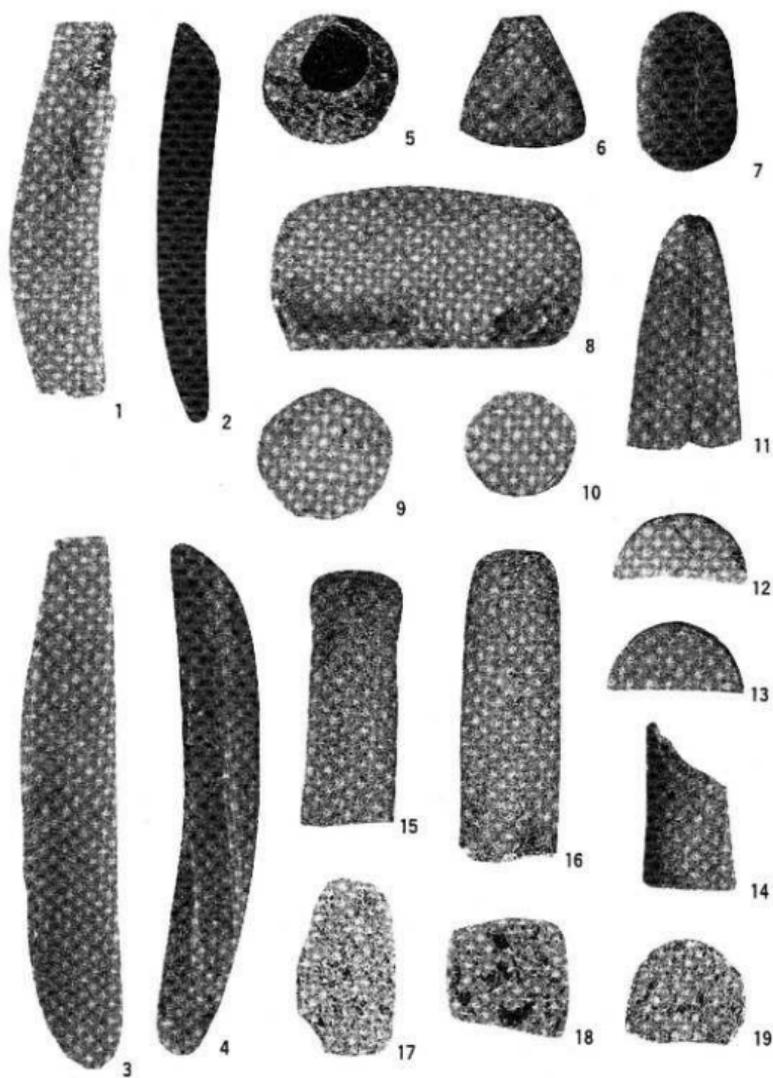


PL13 出土石器(4)・出土土製品(1)



PL14 出土製品(2)

7・8……遺構内



PL15 出土石製品

---

鹿角市文化財調査資料 56

## 特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(12)

発行年月日 平成 8 年 3 月 29 日  
発行者 鹿角市教育委員会  
〒018-52 秋田県鹿角市花輪字荒田 4 番地 1  
☎0186-30-1111  
印刷所 (有)大館孔版社  
〒017 秋田県大館市谷地町後60

---